### 日本醫史學雜誌

### 第 26 巻 第 2 号

昭和55年4月30日発行

### 原著

古代における民間医の変遷久米	幸夫…(113)
『四民月令』の薬品赤堀	昭…(143)
小関三英と内科学山形	敞一…(154)
作品をとおしてみる松沢病院 100 年史岡田	靖雄…(170)
Jenner のわが子豚痘接種実験物語りの史実について	
加藤	四郎…(189)
「千金方」と其の作者孫思邈に関する史的考察趙	有 臣…(204)
阿波漢方受難史―井上肇堂とその時代福島	義一…(212)
弘前藩医桐山正哲と天明元年の第一回躋寿館薬品会	
松木	明知…(231)
Scientization of MedicineShigeru NAKAY	YAMA…(256)
例会記事	( 238 )

通 巻 第 1418 号

### 日本医史学会

東京都文京区本郷2-1-1 順天堂大学医学部医史学研究室内 振替口座·東京6-15250番 電話03 (813) 3111 内線544

### 医学文化館・開館2周年記念

②病気の錦絵、 編集し、 医学関係の錦絵コレクション約二百点の中から、

適切な解説を付したものです。

の本書は、

泉を凝視した画期的な錦絵集\*庶民芸術の中に医学史の源 中 野 操 編著 \*

紀に

H

る錦絵蒐集の歩み、

財日本医学文化保存会/発行 金原出版株式会社

編纂

民生活や風俗の一面を知る上にも貴重なものと言えま これらの錦絵の集大成と言える本書は、わが国で初め 特殊な収穫であり、非常に稀少価値の高いものです。 件の中で多年に亘り収集されたこれらの錦絵はまさに 格上流布されているものが少ない。そうした困難な条 医学に関連の深い逸品を選び、中野先生みずから分類 こ診療のかたわら、三十数年に亘って苦心収集された 医学史にご造詣の深い中野操先生がご研究 医事や医療に関連のある錦絵はその性 錦絵の愛好家や収 また江戸時代の庶 特に

うべきであります。

集家はもとより、多くの医家や江戸時代の風俗史、

本書は浮世絵、

人事生活史に関心ある方々の必読必見の書と言

3以上のことから、

てのもので、

医学的にも興味深く、

(体裁)A3判

懐中鏡おはん長右衛門 原色図版一八七点 五渡亭国貞画 二三〇頁

その特異なテーマの全貌を世におくるパ 版

東京都文京区湯島 2-31-14 (〒113-91) 電話 (03)811-7161 振替東京 2-151404 金原出版株式会社 振替東京 2-151494

米

幸

夫

# 古代における民間医の変遷

### 巫術から医術へ

る者 こととなった。 は それにも に行った方法が呪術である。こういう超自然力に対応するためであるから、巫者による呪術は疾病に関してのみ行なわれ 力と人間との間に立って通訳のようにその間の意思を疎通させることができ、更に進んでこれに対処する方法を知って 同じような意思を有する者の力によって惹起されるとすること、 あやうくするからであるが、 よる死亡からの脱却を所期する努力が払われることとなった。苦痛は人類に必要な生産をさまたげ、 衣類の製作は最も先決を要する問題であった。これらはいずれも生命の保持、 疾病の治癒を企図する努力は人類の文化と共にはじまったことであろう。原始人にとっては食料の確保、 疾病の原因というものは、 或は少くともそのように信じられている者が現われたが、 かかわらず、 これは原始時代には洋の東西や人種の如何を問わず共通した考えであったろう。 人類の文化の芽生えが多少なりともその姿を現わすと共に、 何よりも人々のすべてにとって本能的に厭わしいものだからである。 外傷の如きを除いては不明であった。そういう判らぬものは何か超自然的なしかも人類と これが巫者である。 例えば神の怒り、 子孫の養育上必要不可欠のものであった。 邪霊の崇りといったものに帰せられる 疾病による苦痛の除去、 そして彼らがその目的を達するため その場合に、 併し原始時代にあって 死亡は人類の保存を 住居の構築 およびそれ この超自然

者 t ろ多くの場合不安定であって、天候例えば暴風雨、 るものとは限らず、 るものでは はその役割を果さねばならない。 う超自然と考えられる原因に対しては呪術は常に登場することとなる。 ズ ムはこの 食料の獲得は、 耕作という遙かに進歩した方法が案出され且実施されるようになってからも、 例であって、これを行なう呪術者はシャーマンと呼ばれるが、 狩猟・漁撈、 アジア大陸の北部を占拠しているウラル・アルタイ民族に古くから行なわれてい 多少進んでは振耕によって得られたものの、 大旱など人力で左右できない原因によって甚だしく損なわれた。 また豊漁や豊作を祈るための呪術者としても巫 今日なお東北アジアに広く見られると それらは必要量を常に それによる収穫はむし るシ こう

1 1 国の歴 マンであったことは周知の通りである。これらの呪術者の中の有力な者は、 史上でも 「魏志倭人伝」 中に記されている鬼道を事としたという卑弥呼 例えば卑弥呼の如く、 中 伝説的 な人物である神 皇

VI

恐らく西洋諸国に於ても昔は同様のことが観られたことと思われる。

という官がかなり長い間存続した事実があるが、このこととも比較されたい)。 を記した る。 祈禱の類 態で存在した。このことをわれわれは決して笑う資格を持っていない。 こういう風であってみれば、 て権勢を得るに至ったが、 その後文化の 巫履、 にせよ太古に於て 未分化の が一部に行なわれ 周 礼 巫相などという名が見え、 K 進歩と共に治療に関する実際的な知識 時 は初めて 代の原始的想念といったものが潜在的にそして遺伝的に人類の思考の中に残っているのであろうか。 は医と巫とは同 てい 一般的には単なる巫者にとどまった。 巫と区別して 原初 るからである にあっては医は巫として現われ、 「皆神医なり」と注されていると言う。 の人物が示す二つの行動面であっ 医という官が設けられてい (それのみならず、 が増加し整理されてくるにつれて両者は次第に分化 薬剤や検査に対する過信という迷信があることを見逃すことはで 多少進歩した段階に於てもなお医は巫と未分化の状 このように区別されるに至って「春秋左氏伝」 る 現在に於てさえも疾病治療の目的でおまじないや (わが国の令制に於ても典薬寮には医師の た。 すなわち、 中国に於てはその古典 巫は同時に医であっ 山山 海 経2 周 たのであ K の官制 K

時代の末期に於てすら、 間 \$ は 0 医緩 呪術が混在していて、 あったことを示す。 和という名称が見られるようになる。 不可以以 中宮のお産 わが国十世紀末の有名な「医心方」中にもおまじないのようなものが諸所に見られ 実際医術と呪術との分離はかなり後世まで行なわれなかったのである。 作三巫医こ」という言葉は之を示すが、 に際して典薬頭ともあろう者が呪術を行なっている例が知られ しかしながら両者はなお截然と区別されたもので この言葉は巫や医が有識人から見て一 従って医 は 15 かった。 術 般に甚だ低

### 民間 医 0 出 現

とを意味しない。 術を業とする者が庶民の集団の中に現われる。 医者の治療にその対価を支払い得るようになってから、 次第に 「くすし」と名のる者が存在するようになる。社会の経済状態が次第に良くなり、人々が多少の富を所有するようになら た折の治療は医術とも呪術とも言いにくいものがある。 はわが 離れてそれ自体独立する傾向を見せはじめる。 「くすし」は職業として存在し得ない。 国でも同 医 術の効能が多少なりとも認められ、 様 であろう。 古代神話 に現 そして更に社会が発達して人々からの需要が増大するに至って、 われる因幡の白兎の しかしこのことは直ちに医という職業を持つ者が社会に出現するこ 耕作等の間の半分以上片手間の仕事であったかもしれないが、 他方社会の進歩と共に人々の富が増大して、 が、 とにかく人類の文化が漸く進むに従って医 物語 は初歩の医術を思わせるが、 如何なる形式にせよ 大国 [主命 は呪術 はじめて 医 (

婆、 るべし、 適当な比較ではないという批判を受けるであろうが、 穏母、 今日の 今の世のとりあげばこといふ物は近世の事也、 とりあげばば也、 助産婦というに値する者がなかった。 国史、 三鏡等古代の実録にとりあげばばの事なし、 「安斎随筆」は、 江戸時代中期にいたるまで江戸には穏母、 是は老女などめしつか 江戸中 期の故実家伊勢貞丈の著であるが、 ふ事もなきいやしき者、 産になれたる常の老女、 すなわち明治以後の産 あたり隣の産 此 事をせしな その 中 K

K なれたる人を頼み、 るべ その頼まれし人を功者也といひふれて所々より頼まれしが、 後には家業の様になりて、 とりあ

L

ある。 徳院殿 之を生業とする者が現れるに至ったものと考えてよかろう。 n から と記され なか は医術の効果を認めるようになったことを意味するが、 ば ったという。 なおこの名ある穏母は任務の終るまで江戸に滞在させられたが、その間有徳の町人たちの招請で席のあたたまる暇 は徳 とと云者出 ている。 川八代将軍吉宗であるが、 また、 来しな これと同じく古代にお 「有徳院殿御実紀附録」(5) 云々 この頃にいたってさえ産婆を業として名ある者が江戸には居住してい いても、 には 般の人々、 「後宮の女房懐姙せし時、 7 それも財を有する人々からの需要が大きくなり、 れに応えて「くすし」を標榜する者も多くなり、 京より名ある穏母をめされ」とあり、 な か 遂には た 0 有

ある。 75 信 であるが、 ことはくどくど言わなくとも自明のこととわたくしには思われる。 呼 前提とするが かい 民間医がい ぶには ろうか。 用され、 じられた者がかなり多数に存在していたからこそ、 従って医師 0 これ は 余りに幼稚であり、 春秋 官制 既にそれまでに民間に医者が、その名は殆ど伝わらないとしても、 は本末を顚倒していると思う。 周 たと考えるのが妥当ではなかろうか。 は文化の進歩、 0 時 0 0 枠 代 時 によって人為的に造られたものではない。 組 代に初 0 医師 の中に組込まれたのであって、 3 は官医であって、 て現れ 術と言っても呪術と大した相違がないにしても、 社会の要求に応じて自ずから現れたのであって、 たとい うの 国家の官制が 民間に医者の現われたのは春秋の時代に至ってからであるとするような説 は名の伝わる民間医のことであって、 医官の制度を確立することができたのである。 それが周王朝の時代にはっきりと制度化されたと考えるべきで 整ってゆくにつれて、 それ故先づ出現したものは民間の医者であった。 中国におい 何かの制度 とにかく疾病を治療する特殊 て医官の制度が現われたのは 最初に現われたのは民間医であって、 民間の医者の中の それより以前からかなりの数の無名 それは巨大な権力の 優れた者が官医として わたくしの理解し得 周王 の技能ありと それは学と 前に 在を はな 於て

間医であったと信ずる。 ること、 るにすぎなかった。 日のように医を生業とする者ではなく、 あって、 る(律令制の医師とは官名であって、 その他一 様 0 従ってこのことは 解釈はわが律令国家に就ても存在する。 且その不可能であることを論じた。 二~三の官司の医師、 そして社会も医術も次第に進歩して律令制が布かれた後も庶民の疾病の治療に当っ 但し需要は極めて小さかったと思う。 一種の医療国営制度であったという解釈を生ずる。 現在のそれとは意味が異なる)。 および諸国に 農耕、 わが国の場合も最初にくすしの現れたのは民間においてであろう。 一名宛配置され 漁猟に従事するかたわら、 例えば、 この 庶民の診療も彼ら官医のみによって行なわれたとするので 律令国家における民間医の存在については第五節で更に論 た国医 時代には中 師たちによってのみ医療が行なわれたとする説であ 央における典薬寮、 依頼に応じて呪術と共に医療に類した行為をす わたくしは前著に於てそのしかるべか 内薬司 (八九六年典薬寮に併 たのは主として民 それ は今

# 一大陸医学の伝来と医官の成立

じたい。

て讃 ある。 進出しており、 天皇に比定されている。 倭国の名称は一 であったが、 医学と称するに値するものは、 あっ 珍·済 医療を受けるには対価を要し、 た。 興 世紀後半の中国の史書 仏教の伝来に伴って印度の医学の影響も受けたが、 五世紀に ことは当然同時に大陸のすぐれた文物に接し、 武 0 名が見られるが、 は 南朝との通交は東アジアに於けるわが国の国際的 中国南朝の宋には屢々使を遣わして、之に朝貢をしている。 最初は朝鮮を通じて、 従ってある程度の富の所有を前提とすることはさきに記したが、(w) (「後漢書」) にすでに現れるが、 讃は応神あるいは仁徳、 次で中国との通交が開けてからは直接中国から伝えられた大陸の 以後主流となったのは中 之を摂取する機会を興えた。 珍は仁徳か反正、 四世紀になると倭国は統一国家として 朝鮮半島 地位を確保するための 済は允恭、 かい 0 国 国の医学である。 0 外交的 興は安康、 正 医学の輸入もその一つで 史に所謂倭の この新らしいそし な目的 武 を有 は雄 五 王とし 略 するも の諸

てはるかに進歩した医術を享受し得た者は先づ支配階級であったことは想像に難くない。

ように思われる。 我が れ以後大和 不天、 朝 報廷に 「日本書紀」に 久しく篤き病 おける官司制度は次第に整備されて行くが、 がに離りて、 よれば允恭天皇は病弱を理由とし 歩行くこと能はず、 | 且我既に病を除かむとして独り奏言さずして而\*\*ヒセーグネル て即位を辞 なおこの頃には医官というほどの者は存在しなかった している。 允恭紀」 を借りると、 天皇

身を破りて病を治むれど病差ゆることな

てい は当時のくすしを頼むに足らぬ者としているように思われるが、 録 る っている。 「身を破る」とはどういう方法であったか判らないが、 九条兼実の日記 すなわち、 天皇はおのが病を治そうとして父帝にも話さず侍臣にも知らさず、こっそりと自ら治療を試 「玉葉」) 0 先蹤をなすかの如き感がある。 何 同時に後 か 0 形の 世 の平安時代の貴族たちの医学の造詣を示す諸 「物理療法」ででもあったろうか。 この 記 録

更に 「允恭紀」三年条には

あし 三年の春 しむい 正月の辛酉の朔に、 高時 も経ずして、 病已に差えぬ。 使を遣して良き医を新羅に求む。秋八月に、医、 天皇、 歓びたまひて厚く医に賞して国に帰したまふ。 新羅より至でたり、 即 ち天皇の病

を摂取することを努めるようになった。 ことに関 性 VE 1 たのであろうが はは 記されてい ばこの時の良医 . 術を教えることはなかったであろうが、それでも彼に接した知識欲に富む何人かが多少その技術の伝授を受けた可 心がすくなかっ 当時 る。 の国力も制度も先進技術者を国内にとどめてその知識を吸収するという程度に達せず、 当時の朝廷に出入りのくすしたちあるいは嘱託のくすしたち 一に信をお lの名は金波鎮漢紀武と伝えられている。 たものと考えられる。これが六世紀に入り、仏教伝来の頃になると、 かなかった天皇も大陸からの新しい医療を受けることによって全治している。 「欽明紀」十五年には百済から諸博士が渡来しているが、 この人物は短期間滞在しただけであるから、 この人々もその前に長 政府自体が積極的に諸文化 その中 また諸豪族 には 正式にわ い間治療を試 「古事 医博士、 記 が国

薬博士という名が見える。この人々は正式に新しい学問、技術を伝えたものであろうが、任期があって、一定期間

ると別の人物と交替している。

寮、 が、 度も設けられたことを知り得る。 医官と見做すべき最初の記録としては、七世紀になって「天武紀」朱鳥元年(六八六) 外薬寮の名が見られるから、 更に同年五月条に侍医百済人億仁の名が現われる。これよりさき「天武紀」四年(六七五) その記録を文字通り評価し得ないにせよ、 なおこの外薬寮は後の典薬寮に相当する。 官司制度が一応整ったことを示し、 四月条に侍医桑原村里訶 正月条には大学寮 医官の制 都 の名

\$ とを進言した。 世紀以上後の奈良時代になっても正規の学業課程を修めた者は少かったのである。 令が制定 医の中の優秀な者で、そして恐らく大陸医学を多少聞きかじった者も医官として採用されたことであろう。 ことのできた者は国内の狭い文化圏における極めて少数者に限られていたと思われる。 な多年留学をした人物を除けば、新しい学術の習得は一般に非常に困難なことは明らかであって、 それ のがあっ 司や医官があったことには不思議はない。 よりも更に前に推古天皇三十一年(六二三)に (六八〇年以後)されているのだから、 たと思う。 以来半世紀を経ており、何の記録もないけれども、その間先進国に倣おらとする政府の努力は そして、 たとえ天智朝における近江令の公布が事実でなかったとしても、 印刷という技術はなく、 その間に諸制度の整備は着々として行なわれたと見るべきであり、 唐から留学生の一行が帰国し、 また紙は非常な貴重品であったから、 この時代には旧来の医術を伝えた民間 医恵日らが唐の制度になららべきこ 後記するように、 天武朝では飛鳥浄御原律 隋唐の医術を学習する 数十年後、 恵日のよう 並 々ならぬ 翌大宝 以上

って幸いに之を知り得る。 |年に全国に頒布されたことは周知の通りである。この大宝律令は今日之を知ることができないが、之に多少の修正 ح 令や律があるいは改正されあるいは整頓されて、遂に大宝元年(七〇一)に 大宝律令として完成され、 って大きな相違はないと言われている養老律令 この大宝律令によって医療に関する官司やそこに勤務する医官の制度が確立され、明文化され (七一八年制定) 0 大部分が 「令義解」 (八三三年成立) を加 t

場合第 たと言えるが、 ても触れ 一の困難 制度の確立とその実施とは別の問題であって、 は適格者が少ないということであり、 これは殊に国医師の場合に著しい 直ちにその通り運営され たか から これに就 否 かに は疑問 ては以前の小文にお から ある。 医官 0

### 四民間医から官医の

じて、 けられ、 方洪庵の適塾にはるばる僻遠の地から勉学におもむいた医学生の気魄は感じられないのである。 らの渡来人)や御立連清道らがすでに老齢に入ったので、 勤 も考慮に入れねばならないが、 ぜられるための必要条件であるが に何人かの特志の者に医術を教えた可能性は充分にあった、と考えては誤まりであろうか。 教導に当ったであろう。 中国から学者を招聘したという記録はないが、前記した百済からの諸博士はこういう学者や技術者に相当し、 は古代も余り変りがなかった。 ,給費生) に留学させると共に、 それではその医官はどのようにして採用され をしていたのであろう。そうしてみれば、典薬寮の医生という教育制度はまだ出来ていなかったとしても、 あるいはその後までも、収入の多い国医師の志望者が多かったのにもかかわらず、 をつけて之を学ばせたという事実がある 且封戸百戸を与えられている。 多数の御雇外人教師を招聘することによって泰西文明の摂取に努めた。 **侍医百済人億仁は朱鳥元年に歿しているが、このとき勤大壹位の官位** とにかく積極的な姿勢が認められない。 中国 - に積極的な者は少なかったようである。 留学生を送ったことは推古三十一年その一行が帰国した記録がそのよい例である。 これは永年の功績に対する褒賞と考えてよかろうから、 たか、 (「続日本紀」 天平二年三月条)。 あるい その医術の絶えることを惜んで、 は養成され 江戸末期に長崎のシ たか。 例えば天平二年 明治政府はその初期に多くの俊秀を西洋諸 習学するに何 医術の習得 特に官から衣食を給し ーボ しかしながら、 カン (七三〇) 恐らく医生としての修業 ルト 隘路 (後の正六位上に相当) この点人間の考えること かなり長期間侍医として 0 があったという事 吉田連宜 鳴滝塾や大坂の緒 それは医官に任 奈良時代を通 また実際に その期間 (百涤 た弟子

を重ねても医師となることが仲々困難であり、 域である近 ような事情であってみれば、 畿の一 部の地に のみ存していたものであろう。 中国の医学を一通り正式に学んだ者は極めて寥々たるもので、 言わば労多くて功の少ない魅力に乏しい仕事 その人々も都や文化の先進 であったのであろうか。

他方文化から隔絶されたような諸国において新しい医学を知った者がいたであろうか。 る。 が置かれ、その下に若干名の国医生が医学を学んでいるが、 生省の大臣や局長が医師であることが少ないのに似ている)、 る。 な者は数が足らず、 医疾令によると、 典薬頭 ところで都の典薬寮において、 (長官) は後世には医道の極官となったが、 典薬寮には医博士(教授)一人、医師十人(所謂「十医師」)、 そのため欠員となった国々も多かったのである。 医博士はともかくとして、 そのことは平安時代までつづいている。 奈良時代には医学を学んだ者であることは少なく、これは現代の厚 正規の医学を修めた者が最初から十名揃ったであろうか。 その人数は国の格付け(大・上・中・下国) 医生四十名がおかれることに 国医師 の場合には確かにそのよう また諸国では国医師一人 によって差があ 15 って

「続日本紀」天平宝字元年(七五七)十一月条に左の如き勅が出ている。

勅 日。 如聞。 頃年諸国博士医師。 多非 ·其才」。託請得\選。 非 唯 損政。 亦無、益、民。 自一今已後。 不少得

### (以下略)

0 示すものでは して指定されているものであって 学術が伴わないのに情実で国博士や国医師となるのを禁ずるというのであるが、その後段に 医 甲乙、 .師にとってはむづかしいことであったろう。 るのは 脈経、 なか ろうか。 奇妙なこととい 本草などの医書が挙げられている。 典薬寮の十医師はたとえ少々未熟であっても後日習得する機会があったろうが、 わねばならない。 (「医疾令」 医針生受業条)、国学の教官である一人前の国医師 わたくしは、 これはとりもなおさず、 ところがこれらの諸書は何れも典薬寮の医生 律令国家の初期には十医師の一部および 彼らが正規の学業課程を修めていないことを 医師 に戒告するために の学ぶべき書 0 必修の教科書目と 国医師の多数 国学に唯 物として これら

生考試条 歳位迄に成業することになっており、 なお満足 員は大都市に於ては比較的早く消滅したが、 くなるにつれて初等教育にあたる適格者が不足し、明治三十三年には代用教員という制度をつくって之を補った。 むを得なかったのであろう。 者は政府としても望ましくなかったことは、 正規の過程を踏んだ者でもなければ苦心して自ら学習したものでもなく、 場合も多少これと似た事情にあったと言えよう。 このようにして民間医の中の恐らく優秀な者が官医として吸収されることになったと考えられるが、 を心得た民間医が多少の断片的新知識を与えられた上で官医として抜躍された者ではないかと想像してい な国医師を充足することができなかったのである。また、「医疾令」に従えば医生は普通に過程をすませば二十三 立前になっているが、 話も時代もちがうが、 実際は三十歳をすぎても一人前にならず典薬寮にくすぶっている者があった。 一定年限かかっても成業し得ない者は元の身分(本色) 前記天平宝字元年の勅からも明らかであるが、 田舎や避
哪の地では
永く存続し
昭和年代まで
残っていた。 天平宝字元年は大宝律令発布より実に半世紀余を過ぎた時であるが、 明治十九年(一八八六)「小学校令」が 旧来の医術 発布された後、 何分にも過度期のこととてや その多くは家に伝わった医術 にかえされる(「医疾令」 奈良時代の国医 これは民間 就学児童が多 医 代用教 の官 かい

Ŧi. 律令国家における民間医の存 在

医

への上昇時期とも呼ぶことができよう。

れたが、 奈良時代に 次に之に対する反証を挙げよう。 般 の診 療 に当っ たのは官医ば かりであって民間医という者は殆どいなかったとする説のあることは前 に触

第 一に「令義解 の中 に里中医 (民間医) という語が明記されていることである。 「獄令」応給衣糧条に

及修二理獄舎」之類皆以,臟贖等物

充。

無則用

官物

は

凡獄囚心公給

云太糧蓆医薬1。

とあって、囚人の衣糧医薬から獄舎の修理まで原則として囚人の負担となっている。 この医薬に就ては「令義解」

雇,里中医,令、療也。官不、給、医。

と注釈している。 之は官医の他に民間医の存在を何よりもはっきりと示している。

第二に「医疾令」の医生等取薬部及世習条に

凡医生。 按摩生。 呪禁生。 薬園生。 先取:薬部及世習一。次取:庶人年十三已上。十六已下。

とあり、薬部及世習の者の子弟は優先的に医生に採用される。之に就ては

謂 薬部 姓称 :薬師 者。 即 蜂田 逐節。 奈良薬師類也。 世習者。 三世習 上医業一。 相 承為 名家

従事していて名家と言われている家の者を指すという。 力 「令義解」 たであろうが、 は注釈を加えている。 その一部の者は医業にたずさわっていた家系があっ 薬師とつく姓を持っていて、当時の社会需要から考えれば全員が医術を心得ては どちらも代を重ねて医を業としている民間医のあったことを示し た訳である。 また、 世習とは三代つづい いな

ている。

うな申請をするところから考えれば彼自身は医術とはすでに無関係であったと判断すべきであろう。 たことが察せられる。 子孫の何代かは難波に居住して医を業としていたのであるが、 て、 り、 波薬師という姓を与えられている。 人間であり、 第三に、 難波連 現在も子孫は男女を問わず薬師を名乗っているが、今では之は名実相伴わなくなっているので、 正六位上という官位を持っており、 多少間接的な証明ではあるが前記の医恵日の子孫にまつわる挿話がある。 0 姓をいたゞきたい」と申請して、 後に百済に帰したが、 これ は社会の需要が多くなかったことによるのであろう。 天平宝字二年 雄略朝に渡来した。その五世の孫が恵日であって、 内薬司の次官ではあるが医術を心得ていたか否か不明であるけれども、 許可を受けている (七五八) 難波薬師奈良など一族十一名は 百数十年後には医術の心得のある者が少なくなってしまっ (「続日本紀」天平宝字二年四月条)。 難波薬師奈良は当 恵日は医術を良くし、 それ以後難波薬師を姓としてお 「我々の遠祖徳来は 時内薬司佑 難波薬師の姓を改 このことから恵日 その子孫 兼出 元は 雲国 高 は難 0 3 麗

から 勅 Vi T ある K 6 ということはその 富の蓄積 から想像されるように医術の水準も極めて低かったことは否定し得ない。 又は当時 これらの民間医の多くは文化の先進地域、 は官医ではなか ない筈である。 最初 から 現在は堺 池辺弥氏 四 K 所謂 国 れらの 都 も多いような要地に居住していたろう。そうでなければ、仮りに片手間の仕事であっても医業が成立つ筈がな 医 市に併合されている。 帰 、は蜂田薬師の名を挙げている。(10) 0 師 あ 化 の実情である。 中 系 5 ったのだから当然民間医でなければならぬ。 期限が来れば他の人物と交替しなければならない。 なお、 かい の家柄である。 た所である。 5 国医師が採択されたものと思われるが、 僻遠の国では暫定的に終身官が認められていたところもあった 国医師 蜂田に就ては「和名類聚抄」 これも近畿の文化地域と言ってよかろう。 この地は後に八田と呼ば はその国 そして経済力にも富んだ地域に住んでいたことであろう。 「新選姓氏録」 「内から採用することになっており、 れ (方多親王その他編、 秩限の規定はかかる民間医の存在を前提としない限り成立 仙北郡 勿論その名は殆ど伝って (源順編、 この新しい人物も同国内の者である訳だが、 (昔の大鳥郡はその北半分を占める)に含まれ 九三〇年代に成立) 遠隔の諸国の民間医も人口が比較的密集 八一五年成立) また勤務年数に秩限 いない。 (「続日本紀」宝亀二年十二月条)。 K K 和泉国大鳥郡 は また、 「蜂 難波、 天平宝字元年 田薬師諸 (任期) K 奈良は以前 力 蜂 ていたりたり そ ある。 田 から

# 六律令制の弛緩と官人の貧困

知 にさせ、 0 持 基本ともなるべき戸籍はたゞに調査製作が困難になったばかりではなく、 0 振興に努めた。 通り 世紀末 遂に十世 数 なの (七九四) 実 一例が が、 紀初期になると之等は殆ど不可能となって来た。 都が平安京に遷った後も、 ある。 それにもかかわらず、 このことは之を基とする班 九世紀に その初 は律令国家の諸制度は次第に弛緩することとなっ 田収授とい 期は奈良朝の継続ともいうべきものであって、 もっとも苦痛は人民の方では遙かに甚だしく、 う土地制度を崩壊 まことにいい加減な戸籍が造られたことは 租 調 庸 う徴 政府は律令制 た の実行を困 例 の維

採らせるに至ったが、このことについては曽て触れた。(12) 3 当てられる地税式のものと変った。 K 7 出挙の重圧は多くの浮浪の民を生むこととなったが、 は 所謂殷富の民をも早くから生じた。こうしていわば人身賦課である租調庸は不可能になって、 「続日本紀」 年 (八七九) 和鲖 に官田を選定してこれを諸官司に配分し、 一年十月条)。 中央政府の財政の困難は京官への給付を京庫から支出することを殆ど不可能にし 口分田はもともと均等であったのにもかかわらず、 本貫 (本籍) を離れた浮浪者や逃亡者は既に奈良時代 そこからの収入を給付するという一種の独立採算制 次第に階層の分離が起って 遂に徴税 は耕作 0 初 3 K たたた に割 一方 現れ

れないという不公平な状態とな 条)ことになっているが、 は下級官人であった。 のように中央政府の財政が困難になってくれば官人の給与が満足に行なわれる訳がない。その場合最初に窮迫するの 季録は、 十世紀初頭の延喜年間には官庫欠乏のため公卿や出納に関与する所司の官人を除いては支給さ た13 官位の高下によって差はあるものの、 後世延喜聖代と称えられた時代の之が実像の 官人全員に年二回に分けて給与される 面であった。

なった。そのことは、ずっと時代は下るが平安末期の「大槐秘抄」 田 の如きは次第に私物化されて荘園となって行ったと言われている)。 また上級貴族官僚に与えられた封戸、それは彼らの最大の所得源の一であるが、 その結果彼らは荘園と呼ばれる私有地に頼らざるを得なく 中に これも亦廃滅の道をたどった (但し位

は り候は 今の上達部は封戸すこしもえ候はず。庄なくんばいかにしておほやけわたくし候べき。 封戸のなきがする事なめりと思候に、 めさるるこそ力およばぬ事なれ 近代の上達部おほく国を給

という言葉の端的に示すところである。荘園がなければば公私の事をまかなって行けない、 るのだと思うけれども、 それも取上げられるのは何とも困 ったことである、 と言うのである。 封戸の無い ために知行国を与

ましくないことである。 園は明らかに公地公民制の立前に背くものであり、その増大は国庫の枯渇をもたらすから、 数次にわたる荘園整理令の 発布もそのためであるが、 政府の大官が荘園の所有者であってみれ 中央政府としては

ば 的とも言うべき奇妙な生活共同体を形成することとなる)。 朝廷に仕えるべき者が 族で通るべき四位・五位の者が摂関などの権力者の家司になったり、あるいは家臣同様になったりして、 中下級貴族では中央政府からの給与は勿論思わしくない上に、ろくな荘園を持つこともできないので、 土地が「一の人」(この場合藤原道長を指す)にのみ集っていると硬骨の右大臣藤原実資をして慨嘆させることともなる。 か判らなかったので、 寄進型の荘園についてはそうであった。 実効のあまりあがらなかったのも不思議はない。 になってもらうこととなった。 そらいらおそれのある場合には領家ははるかに強力な権勢者に一定の年貢を納めて名義上の所有者 権力者に隷属するという 姿になる(後世武士が政権を握り、公家が権勢を失なうと、公家全体が相互扶助 こうなれば摂関の如き最大の なまじっ かの権勢では寄進型荘園の所有者 従って荘園の保持には権勢を有していることが必要であった。 権力者にのみ荘園が集まるのは当然であり、 (領家) は何時これを失なってしまう 以前なら立 その結果元来は

士 の貧しさから生れ替ったような身の上になる様が描かれている。これもその当時の実情を示すものであろう。 で 道長は之に列席しないという嫌がらせをした。がそれはともかくとして、その折に公家達は殆ど道長の東三条殿に行って ととも言えよう。寛弘九年(一〇一二)三条天皇の女御誠子の立后の儀式が行なわれたとき、彼女がおのが女でな (刀伊の賊を撃退して勇武の名の高かった人物) 等二~三の廷臣と共に式をすませたという事実がある。 はあるが まい、使者をやって召しても応ずるどころか、逆に使者を激しく嘲弄した。やむなく右大臣藤原実資が権中(ほ) このようになると天皇に仕えるよりも摂関に阿る方が大事になるのは、おのが生活がかかっている以上やむを得ないこ 人の給与が 他に有利 「源氏物語」 困難であるばかりではない。 な兼官でもなければ、 乙女の巻に大学寮の博士 あるいは富裕な貴族の批護でもなければ、 公的な官衙や寺社の建築も政府自体の (教授) が光源氏の若君の教導に当ったため源氏の愛顧を受けて今迄 貧窮に沈淪しなければならなかった。 財政は之を担う力がなく、 また、 フィクシ 所謂 ため 一 成ら

功」によって行なわれることが多かった。すなわち、一定の有利な官職主として国司(受領)に任ずることを条件として

(14)

ら吸収して私腹を肥やしたのである。 授けるという一種の売官制度である。 官人個人が私財を使って工事を引受ける、 成功の例は枚挙に遑がな これは各国の庶民にとっては勿論重圧であり、 逆に言えば、 個人の財によって工事を完成させる条件付きでその人物に官職 受領は工事費を上廻る利得を庶民 カン

五、 とてもその博士が貧困にあえぐ訳はないのである。 かい 典薬寮田というものが後々まで彼らの生活を保証するに足りたとは思えない。 態がこのようになってくると、 彼ら諸道の博士には職務俸が与えられていた筈だからである。 典薬頭をはじめ医博士、 夙に延暦十年(七九一) 医師などはどのようにして生活を保持して行ったのであろう K 諸博士職田が規定され(「類聚三代格」巻十 そんなことでうまく行くなら、

# 七 平安中期以後の医官の生活

に属しており、 平安時代の高名な医家というと和気、 典薬頭および施薬院使という医道の極官はこの両氏によって独占されてしまう。 丹波の二氏である。 中期以後になるとその名を知られている医師 は殆どこの 一両家

特に知られた者はないようである。 のことであり、 あたりに典薬頭に補せられたものであろう。丹波氏が名を著したのは康頼に始まる。 はすでに六十歳に達している。 を成したのは 併し平安初期からそうであったのではなく、両家の抬頭は意外に後になってからである。 何よりも永観二年(九八四)に「医心方」を選進したことによって名高い。 時雨で、 平安時代も既に末期に入って院政が将に始まった頃である。 は 「尊卑分脈」 族の伯叔父あたりであろう。 和気時雨の母は典薬頭宮利名の女であるから、利名は時雨の外祖父であり、 施薬院使に初めて補せられたのは康頼の曽孫雅忠であるが、これは既に十一世紀末葉 によると彼は清麻呂の曽孫にあたり、 そして忠末は宮利名の弟子とされている。 天曆十一年(九五九) 以後典薬頭も施薬院も両家の独占するところ 「二中歴」によると康頼は丹波忠末の 彼は医官としては針博士にとどまっ 和気氏で初めて医師として名 宮氏にはその後医家として に典薬頭に任ぜられた 十世紀の初 時

となり、 この時代の名ある医師として両氏以外の者は惟宗俊通 (侍医か医博士)ぐらいより知られていな

ているが、それに続いて 富家殿 如きも門生の出身であるが、 ではなくて、 寮に学ぶ者は次第に減少したものと思う。 必要とする訳ではないから、 らの給 のではなかろうか。 さてこのように医官の要路が一 与が心もとないとあっては尚更のことである。 (藤原忠実、 典薬頭、 忠通・頼長兄弟の父)が しかも医生から医師に進むには、 博士その他高名な医師にお伴をしてついてきた弟子たちだったのではあるまいか。 優れた医師の門下で修業してもそれですむことではないか。 彼が医博士に昇進したのは異例であるとされている(「官職秘抄」)。「続古事談」(ほ) (ほ) 定の家系の者によって塞がれると、 灸を焼くときに前記の丹波雅忠の子忠康、 典薬寮に医生と称してやって来る者があったにしても、 官医を目指すのでなければ、 生活上の辛苦を伴なうかなり長い年数の修業を要し、 典薬寮の医生を志すことは誠に味気ない 今日と違って医師免許証の如きも 重康の兄弟がその可否について争っ わたくしは平安中期以後は典薬 それはもう昔風 前記惟宗俊通 その上に官か によると、 こととなる

シテ子ニシテ、 兄弟仲アシクシテ、 道ヲッ " ネ タヘタルナリ、 = カ カ ル事アリケリ、 医道ノ課試忠康マデシタリ、 忠康 ハ雅忠ガ実子ニ 其後スルヒトナシ ハアラズ、 上野守良基ガ子也、 雅忠オサ ナク

る とは医生というものがなくなったためと考えてよいのではあるまい と記されてい る。 この課試には多少の問題があるが、 それに就ては次に解れる。 かっ そのことはとりもなおさず令制の崩壊の結果であ とにかくこの課試がなくなったというこ

たことは前記した)。 九年で業を終えねばならなかった。 令制の典薬寮は医師 かるようなら見込がないといわば退学させられる(しかし実際は三十歳を過ぎても典薬寮に残っている者のあっ その間一月に一度教官 と称せられる医官の養成機関でもあった。 医生は十三~六歳で採用されるから、 (博士) の試験を受ける。 医師を希望する者は医生として典薬寮に入ってから最長 そしてとにかく一応修業をすませると宮内省 おそくとも二十二~五歳で終業することを要

する途中の一段階となり、この得業生が考試に合格して医師となると、(3) 首尾よく合格すれば位階を授けられ、 は宮内省の所管) 示す次の如き一文が「朝野群載」の巻十五に載っている。 (3) 天平年間に医得業生という者がおかれ、元来はいわば特待生のことであったが、平安時代となると医生が医師 で試験があり、 その成績が太政官に報告される。 医師 (医官) に補せられる 資格ができる。 最後に式部省で国家試験とも言うべきものが 別の医生が得業生に補せられる。 併し直ちに 任官できるというのではな その間 あって、 の事情を に任官

太政官符 式部省

応、補,医得業生壱人,事

医生正六位上行田朝臣文信左京人

得業生大中臣致忠奉」試及第替

從五位下権医博士兼丹波介清原真人為時弟子

読書

新修本草経一部

黄帝明堂経一部

小品方一部

右得一宮內省去年月日解 称云々者。 某宣。 依」請者。 宜、承知依、宣行、之。 符到奉行。

弁 史

年月日

の弟子であること、修めた課目は新修本草などであること、が記されている。此処に注意すべきは、医生と言っても典薬 すなわち、 得業生大中臣致忠が試験に及第したので、その替に医生の左京人行田文信を医得業生とするが、 彼は清原為時

医学までもいわば家学化され、 は 身分家柄にむしろふさわしからぬことと周囲から考えられている。 は令制によれば大学寮で学修すべきであるが、その紀伝道でさえ実際は高名の学者の家塾において学ぶことも行な た 寮に学んだという正規の経路が記されていないで、 っては、 であろう。 うのはどの段階における課試であるか不明であるが、恐らく令制の規定した課試のすべてがなくなったものと考える。 典薬寮の医生などにはならず、 典薬寮に学ぶことを必要としなかったのではなかろうか。 かも後世の私塾に於ける勉学の履歴を思わせるものがある。しかしながら、平安時代における学問の主流である紀伝道 その貴族は大学寮での勉学には重きをおかなかった。前記 菅原道真の父是善の菅家廊下はその有名な例である。高級官人に任ぜられることは貴族にのみ開 典薬寮を通して医術を学ぶ志望者が非常に少なくなったのは当然であって、 医道の高官への道は和気・丹波両家によって壟断され、一方官医の給与が 初めから家学として修業したものであろう。丹波忠康以後は医道の課試がなくなったと 清原為時の弟子であることのみが記されていることである。 和気、 「源氏物語」の源氏の若君は大学寮に入れられるのだが、 丹波両氏は医道の貴族というべきであるが、 同じように、 平安時代もその中期になると医術の学修 そのことが課試を不要とした原因 かれた門であった 面白くないとあ その子弟 わ n

使重忠 が褒賞を与えた記録が屢々見受けられる。一例を挙げれば、 紀」に散見するところであるが、平安時代特に中期以後の貴族の諸日記を見れば判る通り、 生活を支えた。 (前記丹波忠康の子) (前記丹波重康の子) に 灸治を受けたときには、 もそのままではいけない「下﨟必蒙」賞時、 平安時代も降るに従って中下級官人は本来の姿を失ない、 医官もその例外である訳はない。 から灸治を受け、その賞として馬を与えている(「中右記」)。 奈良時代にも医官が天皇の疾病を治療して 賞賜されたことは 任 上﨟共浴:臨時恩,多有:先例:」 ·先例·必可\被 中御門右大臣藤原宗忠は大治四年(一二九) 権門に隷属して之に奉仕することによってその 一勧賞こ」こと、 鳥羽上皇が長承二年(一一三三) ということで、 更にその上官である典薬頭 医師に治療を受けた場合貴 弟ば かりではな に施薬院 「続日

3 た違いはなかった。 ったが、 る(このことはその後鎌倉時代も同様とみえて、「吾妻鏡」にも散見する)。 えると上皇にはさしつかえなかったのであろうか) く手を下さなかった兄まで賞賜されている(「中右記」)。(なお天皇には灸治をしてはならぬことになっていたと言うが、 のは 奉仕であり、 「令」針 平安中期以後は明らかに下級官人の貴族に対する奉仕で、しかもそれはおのが生活にかかわる大事なお得意様 一であり、 反対給付を予期したものであった。 そのことは「任」先例この一語がよく物語っている。 典薬頭や施薬院使の如き当道の上臈と呼ばれる人々も、これが往診は「召」前」であり、 礼物を与えるは「賜」である。 恐らくこの頃は 医官から治療を受けたときには 恩賞を与えるのが慣習とな 貴族が医者に対するのは臣下乃至ははるかな下僚を頣使するのと大し 決して敬意を以て招聘するというものではない。 奈良時代の医官の勤務は官人として 当然の責務であ 「玉葉」(九条兼実の日記) などには頻繁に見られ

術の書を読むことによって簡単に医術を理解し得たかのような錯覚におちいりやすかったためもあろう。 知識を要するものと異なり、医学自体がかなり自然哲学的色彩を帯び、且陰陽道や呪術に毒されている点も少くなく、方 あ 平安時代の知識人は、その代表は貴族であるが、屢々医学の知識に詳しかった。上記九条兼実などもその一人で 々医 に関し高名な医師に自分の意見を聞かせたり、 医書を見せたりしている。(33) これは今日の医学の如く複雑な

る ける医生、 ることによって生計を立てることができょうが、立派な官医への道を閉ざされている一般の医生の如きはどうなったであ 召すだけあって、 たらしいことは次節に記す「今昔物語」の説話がよく示している。 礼物を受けて診療を行うことが常となれば、これはすでに民間医への傾斜である。 残された道はただ一つ、すなわち民間医として生活するより致し方がなかったのではあるまいか。 は政府自体が最初から民間医の数の増加と質の向上を秘かに意図していたためとしたら少々思いすごしであろう 国 医 生の定員の数を考えれば判るが、 何れも和気・丹波両家の名ある人々である。 彼らが普通に業を終えるならば、官医の欠員を補ってはる こういう家に結びついた令名を有する人々は貴族に奉仕す 公卿の日記に名の現われる医師は、 典薬頭自身がそういう生活 さすが かに余りがあ 大体令制 は貴族 にお

る。 # n 内容は荒唐無稽なものであるが、 考えて間違いはないであろう。名高い官医がこの需要に応じた場合があったことは想像に難くない。 高 京都 弟子となって修業した人々ではなかったか。 五 かったことであろう。 併 K 丹波守貞盛が はそれまでも最高の文化を誇っていた土地であり、 印刷技術が進み図書の刊行も目覚しくなった江戸時代でも低かったのであって、 般 後世のようにその名を知られた富豪はまだ存在しないにしても、 0 庶民の診療に当った者はかかる官医の門に入って医術を修めた上で民間医となった人々、 在国の折に矢創が原因で瘡となり、 して見れば此地やその周辺の近畿文化圏こそ医療を需むる人々の数が最初に増して行ったものと 招かれて都から丹波に下って来たやんごとない医師は令名ある官医であったと考えられ 勿論民間医の学術水準は 「止事無医師ヲ迎へ下シテ」 後には日本一の商業都市となり、 一般に、 他の諸国よりは富の集積も著しく生活 特に地方諸国では、 治療させたという物語が 何れも医師免許証を必要としな 町町 衆の町」ともなったとこ 「今昔物語 甚だ低かったと思わ あるいは更にそ ある。

## 八官医から再び民間医へ

かい

た時

の事であるから、

やむを得ぬことと言うべきであろう。

恥 歳の女の童をつ t で名声ある医師の家に立派な車に乗った三十歳ばかりの美しい女房 聞 ツレバ」などと殺し文句をならべて泣きながら話す。診療すると陰部に瘡がある。 代の医 n 師 命には 「歯モ無ク極テ萎ル顔ヲ極ク笑テ」すなわちお世辞笑いをして、来訪の用向きを尋ねる。 て訪ねてきた。 の生態を示す興味ある説話が「今昔物語」巻廿四 か えられません 典薬頭はすでに老年で三~四年前に妻を亡くしているので、 ので是非診 ていただきたいと言い、 (皇室や摂関家などに仕えている高級の女官) 「女行医師家治瘡逃話第八」に記されている。 「今ハ生ケル 典薬頭は自宅に置 モ殺サムモ其 何とかしてこの女を自分の ノ御 女房は 心 た上で親切 + 誠に 五~六

と逃げてしまう。 しますとうまいことを言う。まだ二~三日は帰らないだろうと安心していると、夕暮頃に女房は女の童をつれてこっそり とをしようと目論だのがあべこべに一杯食わされたのでべそをかいて泣くが、 ケル」ということで終る。これは「今昔物語」の中でも傑作の一つである。 一比被謀テ逃シツレバ、手ヲ打テ妬ガリ、足摺ヲシテ極ナル顔ニ貝ヲ作テ泣テケレバ、弟子ノ医師共ハ密ニ極リナク笑ヒ 也。 自ラ襷上ヲシテ」治療をするが一週間ほどで癒ってしまう。女は「今奇異シキ有様ヲモ見セ奉リツ、偏 かくとは知らず典薬頭は自ら夕食を運んで行くが、そのうちに逃げられたのに気がつく。 然ラバ返ラムニモ御車ニテ送り給へ」、その時には自分の名もお教えして、 弟子たちは陰で見聞きして大笑いした。 その後は始終お訪ね 折角うまいこ

ても存続するのである。 この説話が事実かどうかは勿論判らない。併し事実として不自然でなければこそ世人に受入れられるのであり、 この話は次のようなことを示すものとして興味が深い。

n 世 的 に従って謝礼を受取ったものであろう。後世の開業医と殆ど変るところがない。 ているのである。 処置をするのは昔は常に見られたことであった。またこの場合は女を自宅に収容し給食し治療している。 典薬頭というその道の極官の人物が自宅で現今の医院が行うような医療行為に従事している。たすきをかけて外科 この女の場合は失敗に終ったが、典薬頭は一般の富裕な庶民の需めに応じて実際に治療を行ない、そ

が、 弟子たちの笑いを誘ったのである。 他方これによって礼物を省くという利得もあったためであろう。うまい事をしようとして却って損をしたので、 女房の逃げだしたのは 「極ゲナル」顔をした老人の典薬頭につきまとわれるのが迷惑だったからにはちがいが

者とその代脈 習得するためであるが、 典薬頭の家にはこの一件を見聞きしている何人かの弟子がいた。恐らく住込みの者であろう。これは医学・医術を (代診) との関係を髣髴させる。こういう弟子が門生であり、彼らを従えて典薬頭は典薬寮にも出勤したも 他方同時に典薬頭の助手のような仕事をしていたに相違ない。 これは近世に おける名誉ある町医

よい 示す。 で、 あるものではなくなってい ここでは明らかに典薬頭の町医者化が認められる。 平安中期以後も であろう。 医の数を増して行くと共に、その学術水準を上げることとなるが、 これは都 K 杨 国 い [医生が存在したかは疑問である。 て顕著であった。 た。 この弟子達は殆どが民間医となるために令名ある医師に就 国医生に就ても同様の事情が考えられるが、十世紀以後は国学は衰退してい 門生は原則として医博士や侍医にはなり得ず、 以上のような変化は官医から民間医 同時に 般社会からの需要の増大があったことを いているのである。 の下降的 医師という官も魅力 な過程と呼んでも このことは るの

### 九 民間 医 の増 加

善坊に らいう名のものはやや後の中世初めになって現われる。そうしてみれば、 であり、 経営したりしてい 密度もある程度以上であることを必要とする。すなわち、 に上ってきたのであろう。 K て治療を行なら民間医 は都を除 江戸 時 代以 九条兼実は筑紫の医僧大善坊の灸治を受けている か ったのだが、 いてはそういう町は殆んどなかった。 後に た半農半医 比 れば は何処にも居るという訳にはいかない。 れは それまですでに 勿論寥々たるものであるが、 の形の医者も多かったに相違ない。 誰 かがわざわざ筑紫から招聘したのではなく、 一部に名の知られてい 人家の密集した部落が出来上ると之を何々千軒! とにかくこのようにして民間医はふえて行った。 社会的経済的諸条件がそろっていなければならない。 (「玉葉」安元三年六月十日条)。 報酬を支払って医治を需める人々が また僧であって傍ら医術を施し た医僧であったと考えられる。 自ら耕作したり、 大善坊自身がおの 兼実は他からの あるいは小地主として農業を が医術を拡めるために都 た人々の とい あって、 う名で呼んだが、そ しか 推 いたことは確 L 奨に従って大 かも人 し報酬 平安時代 口

これとは別に、

一定の地にのみ居住しないで諸国を 遍歴しながら需に応じて 治療を行った 医者がいたのも

不思議はな

(22)

い の草紙」 (平安末期あるいは鎌倉初期の製作) の中の恐らくは 白内障の 手術をしていると思われる 場面を描いた絵

には次のような詞書がついている。

りいりきたり、 0 たすけかとおもひて、 ちかごろやまとのくになるおとこ、 あれはなにものぞといへば、我はめのやまひをつくろふくすしなりと云、いゑあるじしかるべき神仏 よびいれつ、 めのすこしみえぬことのありけるをなげきいたるほどに、 (以下略 かどよりおとこひと

う遍歴医が非常に稀なものであったなら、 これは遍歴医であろう。 ある遍歴医もすでに庶民に馴染みのある人物であった。 眼医者と名のってきた見知らぬ男を、家の主人は喜んで招き入れて手術をまか 主人はこんなに安心して針を刺させたりはしない筈である。 この一 せてい 種の民間医

遍歴医はしかしわが国に限ったことではな 扁鵲名聞::天下:、過::邯鄲:、 聞」貴、婦人、即為、帯下医、、 い 中国の伝説的名医である扁鵲が遍歴医であったことは「史記」の列伝に 過鶴陽一、 聞"周人愛"老人二、 即為二耳目痺医一、 来入二咸

陽一、聞"秦人愛"小児」、即為"小児医二云々

診療科目を変えて名のっている。また、 とある通りで、 「過」「入」などの文字は遍歴医の面影を如実に描いており、 古代ギリシャにも遍歴医がいたことが知られて 彼は行く先々の土地柄に従って得意とする

医红師 そぐために付加えれば、 もう一つ癭をつけられてしまう。 る爺を見て、 の取申たるぞ。我につたえ給 ように民間医がふえてくれば、 周知のこぶとり爺い これもこぶのある隣家の爺がびっくりしてうらやむ。 この隣家の爺が悪玉であったとは何処にも書いてない。ここで「いづこなる医師」という言葉に (「鬼に癭とらるること」) の話がある。 「ものうらやみはせまじきことなりとか」という教訓で話を結んであるが、一 へ。この癭とらん」と言って、 先進的な土地にあっては人々は医者を選択し得るようにさえなる。 子細を聞いた上で同様のことを試みるが、 筋は誰でも知っているが、鬼にこぶをとられて喜ん 「こはいかにして癭は失せ給たるぞ。いづこなる 結局失敗して 「宇治拾遺物 言寃をそ

よかろう。 期の成立とされているが、 が居たことを示している。 この二人の老人が何処に住んでいたかは記してないが、 一人よりいなければ「いづこなる」という言葉は出てこない。 物語の多くが「今昔物語」と重複しているし、 彼らの手の届く、 この話も平安末期の実情を示していると考えて 否足の届く範囲 「宇治拾遺物語」 に何 は鎌 倉時代初 の医者

にもそのような民間医がいた筈である。 50 力 ラヲョ た 右京は早く衰えた土地であるから、 「続古事 バズ」との託 談 の中に、 宣があったという話がある。 ある病人が薬師仏に祈ると夢に仏が現われて「此 左京には之よりはるか多数にいたと考えてよい。また、すでに人口のふえた洛東 これは右京にも何人かの民間医があったことを示すと見做してよか 病 八右京 ノ医師 ニックロ ハスベシ、 我ハチ

から ず、 質も向上することとなった。 たその門生として医術を修業する人々が多くなった。これらの弟子は官医としての望みを断ち、 疑わしい。 このように平安中期以後は典薬頭、 これは庶民 官医としての生活上の困難あるいは不満によって典薬頭さえもが半ば民間医に類した仕事に従事することとなり、 医官の養成 医官は和丹両家の子弟で家学としての医学・医術を修めた者が任ぜられるだけになったものと考えられる。 0 もおろそかになってしまった。 間 からの需要の増大を背景としなければ存立し得ない。こうして民間医はその数が増加するのみならず 施薬院使という官はあっても、 医生の数は次第に少なくなり、 典薬寮自体は令制の 規定するような 運営はなされ 末期には医生という者が存在したかどうか 大部分は民間医となっ 重 他 た

示す通りであるが、 わ 宋の から 長 国 い平安時代の間 医師 に使を遣わ が来朝したことは、藤原隆家が眼病を治すために太宰府に赴任した事実や、 したという事実もあった。 K これらは新しい医術も多少は伝えたことであろう。残念ながら、 は わが国 0 医学・医術も次第に進歩したであろう、 しかし家学の如くなっては、 その沈滞に向うべきことは想うに 承暦三年(一〇八〇) 平安時代には渡宋した僧はあって 「平家物語 には 三の巻の医 高麗が良医を求め 0

も、医術修業のため渡宋した医師の名は伝わるものがない。

### 十むすび

民間 これによって民間 官医に望みを断 れ 律令制は 立するに及んで官医の制度は全国的に確立されるが、この折民間医の中の優秀な者で多少の大陸医術を心得た者も官医と た 名医が生まれるまでにはなお百数十年を要した。 のためのものであって、 して採用されたが、 は恐らく五世紀頃になって朝鮮および中国との通交に伴って伝来したが、 太古の医はその初めは恐らく巫と区別し難いものであったが、 には 大和朝廷の官司 医学自体 全く崩壊し、 依然民間医が存在したが、 一があたかも両家の家学の観を呈するに至った。 った医師 医 いの数の この時期は民間医から官医への上昇過程を示すと言えよう。けれどもこの官医は貴族、 制度が整えられるにつれて、 典薬寮における官医の養成もいい加減になり、 個々の庶民がこういう医療を享受し得るのは稀であり、 は再び民間医を志向するようになる。 増 加 質の向上がもたらされたと思われる。併しながら、 その学術水準は低く、 かかる人は例えば侍医として採用された。 また一般からの需要もすくなかった。 他方一般庶民の社会的経済的発達は医療の需要を高め、 これは官医の民間医への下降過程を示す時期と言えよう。 とにかく先ず民間に現われた。 医官の要職は悉く和気、 その知識を有する者は 決して国営医療と言ったものではない。 和丹両氏をはなれて梶原性善の如き 奈良時代に入り律令国家が成 医学と呼ぶに値するもの 丹波両家によって独占さ 平安時代中期をすぎると 勿論極めて僅 官人、 かであっ 有力者

く多くの偏見が含まれていることと思うが、 \$ かい ら医療の状態をうかがおうとしたが、 0 中 国の歴史、 か 特に古代のそれは殆ど権力者の歴史である。従って民衆に関する史料というものは少ないが、そういう の生活をかいま見得ることがあり、 史料の不足からいくつかの推測と想像を付け加えるより致し方がなかった。 何卒識者の御叱正をいただきたい。 また史官が気がつかないでこれを漏らすことがある。

1 ウノ・ハ ルヴァ著 田中克彦訳 「シャーマニズム」(一九三八) 三省堂

る。 ズムの神の中にマンディシリエー、 文明の滲透によって当時と比較すれば急速に減少し、 これは飜訳されたのはずっと後の一九七一年であって、すでに古典的とも言うべき著書であり、シャーマニズムの分布は近 マニズムはそれまでも近接する地域からキリスト教、回教、仏教などの影響を受けており、圀下大慧はアルタイ、シャー (圀下大慧「シャマン教の創生伝説について」一九二八「民族」第三巻第二号所載) マイテエレーという名を見出し、之が明らかに文珠師利、 またシャーマニズム自体も変形しているものと思われる。 弥勒であることを指摘してい

- 2 「山海経」の名は「史記」太宛伝に初めて見られる。この書には禹が関係しているとする説があるが、実際はそんな古いもの 周秦の時代の人の著であろうという。あるいは後人の偽作かも知れない 往 五十郎「漢籍解題」八〇五頁)。
- (3) 平田篤胤「古史伝」十八。「古事類苑」方技部六五○頁にその一部分所収。

本には九世紀に渡来し、藤原佐世の「日本国見在書目録」(寛平三年頃成立)にも載っている。

- 4 で「典薬頭稚康朝臣、鎮」御座」施」呪術」」とある。 「古事類苑」方技部九一五頁。一二世紀初期に鳥羽中宮藤原聖子が皇子(後の崇徳)を出産する際に、宮主が御祓をしたあと
- (5) 現在国史大系「徳川実紀」第九篇に所収。
- (6) 尚秉和著 秋田成明編訳「中国社会風俗史」二一五頁 平凡社東洋文庫
- (7) 久米幸夫「庶民と国医師」日本医史学雑誌 第二十四巻 第四号
- 8 すしを招聘する話がある 「日本霊異記」は九世紀初期に成立したわが国最古の仏教説話集であるが、その中巻第四十一に河内の国の富める家の人がく
- 9 奈良時代に医官が典薬頭に任ぜられたのは前記の正五位下吉田連宜が最初である(「続日本紀」天平十年十月条)。之に反して 内薬司の内薬頭は医官である侍医が代々補任されている。 典薬頭が医道の極官ときまったのは平安中期になってからのことで
- (1) 池辺 弥 「和名類聚抄郷名考証」 一八二頁 吉川弘文館
- (11) 吉田東伍 「増補大日本地名辞書」 第二巻 四九五頁 冨山房
- (12) 久米幸夫 「悲田院の沿革と終焉」 日本医史学雑誌 第二十五巻 第

号

13 延喜十二年 抄出する 三善清行は有名な「意見封事十二箇条」(「本朝文粋」巻二に所収)を提出したが、 その第七条を次に

是公卿及出納諸司毎年充給。 右謹案、式条。二月廿二日、 自余庶官。則五六年内。難」給二一季料。(以下略) 八月廿二日、於二大蔵省一可」給二百官春夏秋冬季録。 而比年依言庫之乏物。 不少得 三偏賜。 由

太政大臣藤原伊通の政治意見書。一一六〇年頃成立「群書類聚」巻四八九に所収

15

14 「小右記」寛弘九年四月廿七日条によると

とあり、罪のない身分の卑しい使者を嘲弄したり石で打ったりするあたり公家の陋劣さを感じずにはいられない。翌廿八日の 日記で実資は 後聞、 諸卿候東三条之間、喚使申可参内之由、打手同音笑、其後嘲弄無極、大蔵卿執石打召使両三度云々

臣威強、 王道弱

16 に所収。 南北朝時代洞院家の人々によって継続編纂された諸氏系図の集成。系図の中では最も信用のおけるものという。 「国史大系

- 17 「二中歴」は鎌倉時代末期の著。 この事項は「古事類苑」方技部七六四頁より転載
- 18 「官職秘抄」は平基親の編により一二〇〇年頃成立。現在「群書類聚」巻七〇に所収。 その中に

殊選,其人器,任之。如,門生,者不,任,之。但惟宗俊通拝,一除之。

けとなっていたのであろう。 てしまってから慣習的にとりきめられたものにすぎないと思う。そしてこの頃には博士は教官というよりも医師の一つの格付 とある。この規定は令制には勿論存在せず、 「三代格」や「延喜式」にも見られない。医道の高官が和気・丹波両家に固定し

- 19 「古事談」にならった説話集。 著者不明。一二一九年成立。「群書類聚」巻四八七に所収。
- 20 「官職秘抄」に

自二得業生1補之。

21 三善為康編。 一一一六年成立。平安時代の詩文、宣旨、官符などを分類編纂したもので「国史大系」に所収。

22 るが、 古くはすでに仁明天皇が医学の知識に深かったことが記されている(「続日本後紀」嘉祥三年三月条)。ずっと後代のものであ 周知の 「徒然草」の百二十二段

人の才能は、文あきらかにして聖の教をしれるを第一とす。 忠孝のつとめも、 医にあらずはあるべからず。 (以下略 (中略) 次に医術を習ふべし。 身をやしなひ、 人をたす

とあり、 医術に関心を抱く有識人が多かったことを示す。

23 「玉葉」 承安三年(一一七三) 二月四日条に次の如く記されている。

切無」之由、 今日憲基呼、前仰。医書之事等、有心千金秘髓方云書」令、見、之。憲基申心末、見由、此中有、云心年月日神、 丹家之輩所、申也。 而定成貞時等申,,有、為、神之由、而今此書有,,月神、仍問,,憲基,頗有,,不審之気、 件事於 月神一者

貴族である兼実が当時の専門家の知らぬ医書を読んでいたことが判る。 はないかと言ったところ、憲基はその本はまだ見たことがございませんがと答えて、いぶかしげな顔をしたというのである 成らはあるという。それで丹波憲基を御前に呼んで、 陽陽道には年神、月神、日神などという迷信があった。これに関して丹波氏は月神というものは無いと云っていたが、 「千金秘髄方」という書物を見せて、 これに月神のことが書いてあるで 和気定

24 一時は医を業としたこともある平田篤胤はその「志都の石室」の中で

テ、口過ヲシカネル者が医者ニデモナラウト云、ソレヲ号ケテ、デモ医者トテ云々 今時ノ医者ト云ハ、武士ノ子ナレバ惰弱モノ、 百姓ナレバ疎懶モノ、町人ナレバ商ヲ為得ズ、職人ナレバ不器用モノニ

れば医者になるくらい 拠医者二相 と口を極めて罵倒している。 医学的知識を持っていなくとも医者になれたのである。新井白石が若くて貧しかったとき、知人から「足下ほどの学問があ う問合せを阿部播磨守が幕府に伺いを立てているが、 江戸時代には数多くの名医が知られているが、他方あやしげな民間医も少くなかった。 成度旨願出候」とあって、よんどころなく医者になろうというのは、 何でもないから、 又 「徳川禁令考」四十一九に百姓から医者になった者が名字を名のるのを放任してよいかと 生計のためになったらどうか」と勧められたことが「折たく紫の記」 その文言が面白い。 「幡磨守領分在町百姓共の内、 何となくユーモラスであるが、とにかく特別 病身等二而, に記されてい

最も古く知られているのは草戸千軒であろう。これは広島県芦田川の河口の近くにあったもので、 にはすでに伝説的な幻の町として記されていたが、 昭和の初期に芦田川改修工事に初めて遺跡が発見された。 十八世紀の その後昭和三十

25

っていたことは確かだが、まだ千軒と呼ばれる程にはなっていなかったのではなかろうか。備後国草戸住一乗と銘打った法華 一年以来福山市は数次にわたって調査をしている。この遺跡からは平安時代の遺物も認められるから、その時分から聚落を作 「考古学講座」 6 乗と名のる刀工もこの地の者であるという。 ちなみにこの 草戸千軒は鎌倉末期に 芦田川の 洪水によって壊滅した(雄山閣 一七九頁以下)

26 医者は、歌い手や予言者や船大工の棟梁のように「人助けな職人」だとされている。かれはこれらの人々とおなじように自発 抱え医者をもっていたであろう。(ハイベルグ著 平田寛訳 「古代科学」 三八頁 鹿島出版会) 的に、または招待をうけて町から町を渡り歩き、いたるところで歓迎される。多くの領主たちは、一人の歌い手に、一人のお

# On some Changes in the Situation of the Doctor among the People in ancient Times

by

### Sachiwo KUME

appointed to the post of court physician. "Yamato Chotei" (the kingdom court in the province of Yamato) developed its governmental system, these doctors had been China in the 5th or 6th century, but only a few doctors could gain any knowledge of the newly-arrived medicine. As the medicine and sorcery. Medicine worthy of the name was introduced into Japan across the sea from Korea and then from In the ancient days doctors appeared at first among the common people, but there was little if any difference between

(29)

At the outset of the 8th century a system of written laws called "Ritsu-Ryō" was formulated, and thereafter governmental measures were carried out in accordance with the laws. The medical officers were appointed and arranged in the offices in the capital and also in every province. Many doctors were newly appointed as officials, but these medical officers were of little use for the people. Some doctors remained among the people and treated them, though most of the doctors had a low level of knowledge and ability, and the people seldom consulted the doctors about their diseases.

In the late Heian era the laws had almost lost their efficacy and many medical officers had to suffer from the reduction of their incomes. On the other hand, the important medical posts had been possessed exclusively by the members of two famous families, namely Wake and Tanba. These facts had disappointed the medical officers and they began to come back among the people. However we must not overlook the gradual increase of the demand of the people for medicine.

The increase in number of doctors among the people slowly raised the level of their medical abilities, I suppose. At last, though it was after over a century, a few eminent doctors, for example Shozen Kajiwara, appeared except for the members of the above-mentioned two families.

## 四民月令』の薬品

### 赤 堀 昭

### 『四民月令』 中の薬品記

とされ、今回の考察に際しても、 後、 たと考えられる。この書は『隋志』や『新・旧唐志』などに採録され、宋代までは存在したという記録があるが、その(4) より前というように、人によって推定時期にずれがあるが、 後漢(二五~三二〇)の 中期から後期への 移行期に 著わされ(3) K (3)ついて疑った人はない。その成立については、万国鼎氏が延熹六年(一六三)よりのち、ついて疑った人はない。その成立については、万国鼎氏が延熹六年(一六三)よりのち、 清以後、たびたび試みられ、 失われてしまった。しかし『斉民要術』 四民月令』は後漢の崔寔の撰とされている。 数種の輯本が作られた。そのなかで、もっともすぐれたものが石氏の『四民月令校注』 それに従った。 P 彼がこの書を撰したということは彼の伝には記載されていないが、 『玉燭宝典』、『太平御覧』などに 引用されている 逸文による復原が、 石声漢氏が元嘉元年(一五一

考察を加えたい。 事を取り挙げている。 この書は、序文が残っていないため、どのような目的で著わされたか明らかでないが、月令の名が示すように、年中行 それらは農作業に関したものが中心であるが、薬についての記述もかなりある。以下それについて

一神農本草経』には多くの穀物や蔬菜も取り挙げられている。 これらはその薬品としての応用について述べたものであ

不出」、 分は、 乾燥させるという、 と解すべきかもしれない。その他については、使用目的は明確にされていないが、 る。もっとも茜については、崔寔自身によるとされている「染絳艸也」という注がつけられているから、藍と同様に染料 頭、 ったと解してよいであろう。これに対して、 豆、 るが、『四民月令』中の瓜、瓠、芥、葵、薤、大、(5) (6) 天雄、 | 栽培収穫時期についての指示である。本草書にこれらの薬品の産地が挙げられていないことの一因も、 「栝楼以治蟲厲也」という注から、薬用と考えて差し支えないであろう。 天門冬、艾、烏韭、瞿麦、 蕪菁、 京師謂之蝦蟆。北州謂之去角。或云苔就。可以合悪疽瘡薬也」、「螻蛄有刺。治去刺。 亭歴、 地黄の栽培を示している記事も、注目すべきものの一つである。 冬葵、 蘘荷などの植物は、 柳絮、 薬用を主にしたと考えられるものには地黄、 莨菪子、恵耳、 小葱、蓼、蘇、牧宿、蒜、芋、大豆、胡麻、 食用を主としたものと解すべきであろう。これらに関する記事の大部 蟾諸、 螻蛄、 柏実、車前実、 また二月に植えて、 柳絮、 蟾諸、 王不留行、 桃花、 粟、 螻蛄、 茜、 菊華、 黍、 栝楼、 八月に 栝楼の 治産婦難生。 小豆、 枳実などがあ 土瓜根、 栽培化にあ 一柳絮上創 児衣 胡 鳥

薬、廿合創薬、諸膏(33) 乱丸、 肝血と白鶏の頭が、少小薬には牛胆が用いられている。 そのほかにこの書は、 少小薬という薬の調製についても触れている。はじめの四種はそれぞれ小草、(12) 諸膏という名称もみられるが、これらは特定の製剤につけられたものではなさそうである。 藍以外の生薬の収穫の記事はないから、これらは購入されたのであろうか。このほかに日煎薬 屠蘇酒の原形と考えられる椒酒のほか、小草続命丸、止利黄連丸、 黄連、 藍丸11 藍、 蜀漆を主要な構成薬とす 蜀漆丸、 法薬には白犬 馬舌下散、 法

# 本草書から見た『四民月令』の薬品

半数近くの芥、 先に挙げた薬品は葵と胡豆以外はすべて『神農本草経』に収録されている。 蘇、 牧宿、 蒜 芋、 粟、 黍、 麦、 蕪菁、 蘘荷は別録品である。 ただし、 これに対して薬用と考えられるものは艾と 食用を主目的としたもののうち、

烏韭 容とよく一致している。 蛄 た よりは見られ の薬効は、 が別録品であるだけで、 『神農本草経』にそれぞれ ない。 これらの薬品がどのような疾患の治療に用 他の薬品についても、 残りはすべて本経品である。 「痂疥悪瘡金瘡」、「癰腫陰瘡疽癘悪瘡」、「産難出肉中刺」とあり、(⑵) このように 1, 『神農本草経』 わゆる三 いられたかは明ら 一品分類 の記載に沿って使われて については、 かにされていないが、 均等に取り入れ い た可能 られて 性 前 か 述の 強 注 て、 0 内 螻 かい

三月 月五日) 菁 麦、 条にも書かれている。 れ はそれぞれ芥子と柏実の、 諸 除 の日 ている。 地黄根、 芥 神農本草経』 四民月令』には、 にかけては艾、 杯にかけては地黄を植えるほかに桃花、 前 行螻蛄を採取するとしているが、 実や、 柏実の項には採薬時期は記載されていず、 そのほ 栝楼根、 八月の烏頭、 採薬時期。 かに 車前実、 烏韭、 農作物だけでなく、薬品についても植え付けとか収穫の適期が指示されている。 八月に 一方これらの 王不留行、 八月八日の項には車前実、 は地 瞿麦、 天雄のように違っているものもあるが、 (正月二月) (夏至) 黄を乾かすとあり、 (三月) 土瓜根、 柳絮を、 生薬乃至農産物についての、 螻蛄、 蕪菁の採取は十月の、 烏頭、 四月には蕪菁、 (立秋) 茜、 (二月) 天雄、 栝楼、 (三月三日) 瞿麦子、 『四民月令』でいう十月の栝楼は根ではなく実であるかもしれない。 鳥頭、 九月には茈薑と蘘荷を貯蔵するとしているし、(33) 土瓜根、 天雄、 芥、 恵耳は七月の条にも書かれている。 (九月) 桃花、 =; 亭歴、 『神農本草経』 王不留行の、 天雄、 三月) 菊花、 艾、烏韭、 おおむねよく一致している。 冬葵、 天門冬の採取の指示がある。 茜根、 生薑、 莨菪子、 九月九日には菊華と枳実の採取が記 での採薬時期の (立夏後) (二、三、七、八月) 天門冬根、 九、 小蒜を、 十月)枳実、 亭歴子、 記載は次の通りで、 なお、 五月五日には恵耳、 また六月と七月の 栝楼の採取 (五月) 莨菪子、 すなわち二月から 三月の三日 本草の (1), 柳 は十 月の 述さ ら上 五 八 瞿 蟾 蕪

33 )

(

## 二、『四民月令』の特色

加工技術の発達していなかった古代にお いては、 農業は現代よりはるかに重要な産業であり、 為政者の最も関心を寄 世

れた。 どの作業の適期を占うといった行為が実施されていたのも、(20) なけれ と解すべきかもしれない。しかし、 などのいわゆる月令記事のなかから窺うことができる。(st) を記述したもので、 引用が大きな部分を占めている。 廷の農事暦のような共通の祖本が存在し、 もこれを示している。 層自然の影響を受けやすかったであろうことは想像に難くない。 それを対象とし、 巫女による祈禱は天子による祭祀となり、卜人による占いは経験の蓄積に基づく農事暦の作成によって取って替えら このような発展の歴史は天野元之助氏の指摘のように、 ばならない 人によって論じられている。 それは前記の各書とは違った系統のものということができる。 問題 農作業そのものにまでは及んでいないのに対して、この書は庶民、 実際面により重点を置いている。これらの点は薬品生産についての最古の記事を含んでいることと しかし、 の一つであった。 現在でも天候に左右されるところの多い農業生産が、 ところが『四民月令』はこれらとは著しく違った内容を持っていて、 いずれにしてもこれらの書では、 それらは島邦男氏によって詳しくまとめられているが、(2) 漢代の中期 それから各書の撰者の見解に従って必要部分を引用し、 に、 既に これらの月令記事には互いに重複があり、その関係については古 そのためである。 『氾勝之書』をはじめとする九種の農書が存在 『夏小正』をはじめ、 殷の時代から、神霊に収穫を祈るとか、 中国の古代の書によくある例のように、 また前記の諸書が為政者の遵守すべき年中 これは時代の経過とともに 『呂氏春秋』、 栽培技術の未熟な古代に といっても地方豪族階級である 天野氏の想定のように、 独自の考えを追加した 『礼記』、 その祖本があっ 次第に形を変 播種、 してい 前代の書 お 淮 収穫 ては 行事 宮

年 この書の撰者、 和帝の永元十五年(一〇三)ごろとも順帝(一二六~一四四)のころともいわれ、(3) 二六 の望族の出身で、 八~一七 崔寔の伝については、 一とあり、 名は実ともされている。 石氏はその三年の前半と推定しているが、 石氏の研究があるから、 しかし、 その伝には不明の部分が多く、没年は『後漢書』 今さら詳しく述べる必要はない。 享年は明らかでない。 定説はない。 彼は 彼は祖父の駆が したがって、 涿郡安平 その生 K 霊帝 「漢

ともに、この書の大きな特色に

なってい

とも 書」 これをまとめた場所が洛陽で、 にまで知られたものがある。 に崔・ の撰者 の班 固と並び称せられ、 『四民月令』 その周辺の農事を述べたものであるという点では意見が一致してい 父の瑗も馬融、 成立の時期については、 張衡と深い交友があったという、文人の家系に生まれ、 『政論』や、 前述のように、 辺韶、 延篤らと撰した 万氏と石氏で見解が異 『東観漢記』 なっているが 自らも蔡邕と などの後世

4 も父の瑗は賓客を厚遇したために家財を残さず、そのうえ父が死んだ時には厚く葬ったため、 3 維持するために行なった彼の経営経験と、 ら得たものだけではないことを示す事実である。 貯えを売って、 という事態になった。 である。 75 -5 いこともあって、 時の実情を十分に反映していると考えられる。 四 民月令』 (今の内蒙古五原県)の太守になった時には、 彼の家は父の伝に たからである。 この書の内容について考える場合に注目すべきことは、 も生産の指示だけでなく、 その金で織師を迎え、 完全とはいえず、 そこで商取引や酒造りを行なうことになり、 ただ残念なことは、 「家貧しくして兄弟同居すること数十人、郷邑と化した」とあるように大家族であっ その全貌がわからないことである。 道具の作りかたと織りかたを教えさせて、 農産物の売買の適期にも言及している。これらは寔の知識が単なる机上の学問 豪邁な父による生活の破綻を幇助した母親の経験とをまとめて作られた書で、 石氏の輯本にしても、 紡織の術を知らないために衣服を持っていなかった民衆を見て、 『斉民要術』や『玉燭宝典』などに引用されたのも、 したがって『四民月令』は伝聞や前代の書の記述だけで 世人のそしりを受けたが、 その最大の拠りどころとした『玉燭宝典』 寔が単なる官吏として生涯を送ったのではない 寒苦を免れさせたと伝えられてい やめなかったという。また 田宅を売り、 当時その はなく、 資産をなくす 価 が完本で 自らの 値 L 族を る かい

35 )

(

# 四、後漢時の医学事情と本草書の成立

武威 の医簡 は、 そのなかに「他人に伝えてはならない」と書いたものがあるように、 医師から医師に伝えられたもので

草。 ろう。 ぞ あり、 8 療薬を取り挙げて、 6 7 る製剤は 以下『本経』とする) 揚 うれている薬品は、大部分が本経品であるという、武威の医簡と同じ傾向を持っているから、(第) またはその祖本である、 子江 ないため、 特定の名称がつ また後漢の中期ごろまでに薬品としては扱われていなかったものまでを含んでい たが 流域とは遠く離れてい それとは異なって、 5 武威 て、 それらの性質と適応症についての当 けられているのも、 その処方は医師だけによって使われる性格を持 の処方の内容とくらべてどのような特長があるか、知ることはできない。 0 成立時期についての推定は誤りでなく、(26・27) ということになると、 る。 家庭常備薬の類と考えられ そこで用いられていた、 つに は一 漢方関係の書でよくいわれている、 般人の使用 一時の説をまとめた書である、 る。 あるいはその地方の薬物知識をまとめた の便のためであろう。 武威の処方に固有名がなか この本草書は後漢の初期から中期ご ったものであった。 と考えられる。 これらの常備薬は原料 本草書の揚子江流域説は無理であ るということを考えると、 四民 ったのに対して、 先に下した、 しかし、 月令』に取り挙げ 武威も洛陽乃至安平 ろに使われ 本草 この書に取り挙げ ここではそれ 書が 構 神農本草 成が示され 7 5 「神農本 いた治 てい

助けを借りようという願望のあらわれで、魔除けに使った鶏の頭を薬に入れるというのも同じ発想に起因するものである。 秩序 崔寡 から常備薬の製造まで、かなりの量の医薬記事を盛り込んでいるのは、彼が医薬を重視していたことを示している。これ 医学に関心を持っていたことは、 を維 では は 専 医 門 持して行くのに必要な、 また常備薬の製造に正月の上除の日とか五月五日といった特定の日が指定されているのは、 薬 0 医 0 で い は ての知識が普及していたことを示すものであるが、 ないい Ļ 医術に通じていたとか、 『政論』 年間 0 一の逸文の 行事を記述した、 なかにも窺うことができるし、 医療行為を行なったということも伝えられていない。 この短い経営指針書の 地 方の医 療体制が不備であっ 『四民月令』という、 なかに、 薬草の植え付け、 たことを示すも 超自然的 地方豪族 収穫 L か 0 0 L 生

活

为

别

録

(以下

『別録』とする)

はもう少しのちの時代の説までも包含した書、

あるい

は別の学派の人たちによってまとめ

n

で は 期 定に 亭磨となっていたのが、 (32) 頭と 後漢の初期まで鳥喙と呼ばれていたことは、 種の薬品の名称 1 から ことを先に指摘しておいた。(26) る名称で呼ば ある。 るから、 抵触するも われるようになっ 馬王 ただし、 この場合は地方名と解すべきであろう。 堆 n 出土 が変っ 0 蟾諸すなわ ではな 11 一の処方中に使われていた薬品には、 る薬品であって、 たの この書では亭歴になっている。 た、 8 あるいは鳥頭の名称が一般化するようになったと考えられる。 ら蟾蜍は以前から蝦蟆とも呼ばれていたし、 (3) 『四民月令』の総数三十ほどの薬品のなかに に著わされたことを示すことになるが、 蟾蜍は以前から蝦蟆とも呼ばれ それ から 漢代の処方集その他の文献から明らかである。 『本 経 薬名で注目すべきものは鳥頭である。 2 特長のある一 この二例は、 『別録』 0 成立年代を推測する手懸りになるので 群がある。 伝写のあいだの改変を考えないならば、 本経 この書でも洛陽では蝦蟆とい も土瓜、 成立の時 それは本草書で別名として挙げら 烏韭、 期が後漢中 この有名な毒薬が先秦時代 蟾諸という三種のこ また葶藶も漢代の 恐らく後漢に 期以後であるという推 われ は はない って この書 処方集では 0 種 たとし かという 世の薬品 か ら鳥 7 から

とめられた時代がかなり近いと推定することも可能であろう。 も三月三日 民月令』 されていて、いつの時代でもそれほど変りはない筈である。 別 神農本草 が最も古く、 に由来するものと考えられている。 とか 経 五月五日とい K 記 少なくともこの時代には採薬の適期について注意が払われるようになっていたと解 載され 5 ている産地と採薬時節 た特別な意味を持っ 草本、 はは、 た日の指定がかなり一致しているから、 特に一年生植物の場合には、 異論 しかし、それをまとめて記 方言 ないい わけではないが、 果実とか根など、 載 墨書されてい L たのは、 この書と本草の採薬時節 現存 採集可 ること 書 か 能 0 てよ 0 5 15 時 カン 期 6 は 般 は 限 L K DU かい 定

## 五、まとめ

四民月令』 は崔寔の経験に裏付けされた書である。 L たがって、 その記述は実際に行なわれた作業の記録そのもので

0 重 ている薬品の大部分が本経品であるという事実は、薬名や採薬時期の問題とともに、 たということを示して、 治療法や薬品がどの程度まで用いられていたか、 はないが、 書は中 主要な手懸りとなるものである。 一国の一 それ 地方の一 に近 い性格を持っている。 当時の医療の実態の一端を伝えている、貴重な書ということができる。さらに、 時期だけに限られてはいるが、一族を維持するためには、医薬に関心を寄せることが必須であ 中国 に限らず本邦にも、 ということになると疑問で、それを示す記録は少ない。 医薬書は数多く残っているが、そこに記載されてい 『本経』成立時期の推定に役立つ、 この書に示され その意味で、

文を参考にさせていただいた。また追手門学院大学名誉教授、天野元之助博士には渡部教諭との仲介の労をとっていただいたうえ、 全般にわたって御指導をいただいた。両先生に厚くお礼を申し上げる。 『四民月令』について検討することになったのは、 訳注稿」を送付され、そのなかの薬物についての意見を求められたのがきっかけとなった。 安田学園の渡部武教諭が同学園研究紀要第十八号 この論文の作成に際しても、 (一九七七) 0 「四民

- 1 『後漢書』巻五二、崔駰伝の末尾に、父の瑗の伝とともに付記されている。
- 2 中国農業遺産研究室編 『中国農学史』 (初稿)上冊 二一五頁、 科学出版社 (一九五九)。
- 3 『四民月令校注』、 中華書局(一九六五)。
- 朱 之意」といっている 書翰の内容は王応驎も知っていて、 卷四五、答楊子直書「四民月令中。亦見当時風俗及其治家斉整。 『困学記聞』巻一三に「崔寔四民月令。 朱文公謂。見当時風俗及其治家整斉。 即以厳致平之意推尋也」。 即以厳致平
- 5 ただ葵とあるだけで、その内容はわからない。
- 6 足の注に「夏葱を小といい、 冬葱を大という」とある。 何物を指すか正確には不明である。
- 音から考えて苜蓿であろう。

- 8 音から考えて藁耳であろう。
- 9 石氏は唐鴻学が彼の輯本『四民月令』中でいっている「苔就は字形が似ているために苦蠪を誤ったのであろう」という説に従 って、苦藍と改めている。
- 10 石氏は厲は蠆の字を誤ったのではないかという。
- 11 『玉燭宝典』、 『初学記』、『太平御覧』ともに藍丸であるが、石氏は意味がとりにくいとし、 『事類集六帖』に従って、
- 12 『本経』の遠志の項に「葉名小草」とあるのに従って、遠志の葉と解する。
- 13 『玉燭宝典』には注薬とあるが、石氏は法薬の誤りであろうとする。
- 14 改め、 るのにも根拠があったのかもしれない。 難いが、膏ではない。したがって石氏の説が正しいであろうが、臘月の猪脂は膏によく用いられているから、 膏であろう。十二月の条に「去豬盍車骨、その注に「後三歳可合創膏」とある。 本とした古逸叢書本の『玉燭宝典』では膏としてある。しかし彼は唐鴻学の、『斉民要術』の引文を是とする説に従って骨に 「作諸日煎薬」とあるから、 『千金方』などに出る牙車骨に相当すると考え、牙牀骨と解した。『玉燭宝典』の前田本では、 日煎薬と総称される薬剤があったのであろう。廿合創薬も内容が不明である。諸膏はもろもろの この骨の字については問題があり、 この字は骨とは断定し 石氏が底
- 15 十二月の条に「東門磔白鶏頭」、その注に「可以合法薬」とある。 れを一月に白犬の肝や血に混ぜて、 法薬を作ったのであろう。 十二月に白い鶏の頭をまじないとして東門に打ちつけ、 7
- 16 胡豆は陳蔵器の『本草拾遺』に初めて取り挙げられている。
- 17 傍線を引いた部文は別録文、 残りは本経文である。
- 18 賦』などにも見え、薑の子であるとか、紫色の薑であるとか、さまざまに解されている 『斉民要術』巻三の、 賈思勰の「生薑謂之茈薑」という注に従って、 生薑と解されている。 しかし 遊藍は 司馬相如の
- 19 『漢書』巻三〇、芸文志
- 20 白川 『甲骨文の世界』、平凡社、 東洋文庫二〇四 (一九七二)。
- 「後漢の崔寔『四民月令』について」、『経済論集(関西大学)』一六巻、四・五号(一九六六)。
- 22 島 邦男 『五行思想と礼記月令の研究』、汲古書院(一九七一)。

- (23) 京都大学人文科学研究所科学史研究室の研究会での発言。
- (24) 守屋美都雄 『中国古歳時記の研究』、帝国書院(一九六三)。

152

- 25 ある。 いかと考え、本経品としておいた。 になる。また桂は別録品であるが、 この処方集での薬名の使いかたからみると、この玄石が、のちの磁石である可能性がある。そうなると玆石とあるものが不明 武威の医簡中に出て来る薬品は九十種で、そのうち二者、欵東、 玄石、蘗米、酥の七種で、残りは本経品である。ただし『神農本草経』には「磁石……一名玄石」とある。 柏実の七種だけであるが、このほかに武威の医簡には門冬というものがあり、 なお『四民月令』に出る薬品で武威の医簡と共通する薬品は少なく、鳥頭、 『本経』にも牡桂、菌桂があり、この医簡での桂は特に厳密な区別はしていないのではな 小椒、 河東の四種は不明である。別録品は豉、 これが天門冬である可能性も したがって、 蚕糞、
- 26 昭 「神農本草経に記載された薬効」、『日本医史学雑誌』、二四巻一号(一九七八)。
- 27 昭 「新出土資料による中国医薬古典の見直し」、『漢方の臨牀』、二五巻一一・一二合併号(一九七八)。
- (22) たとえば石原明『漢方』、中公新書二六(一九六三)など。
- 29 反得蘆菔根」など。傷寒については『四民月令』の五月の条の注でも「夏月飲水時。 「夫熊経鳥伸。 作傷寒矣」といっている。 雖延歷之術。非傷寒之理。呼吸吐納。雖度紀之道。非続骨之膏」、「理世不得真賢。 此二餅得水。 猶治病無真薬。 即強堅難消。 不幸便為宿 当用人参
- 30 蟾蜍については『爾雅』釈魚、 ある。この問題については、石氏も詳しく論じている。 用例がある。 『漢書』巻二七中之下、五行志「武帝元鼎五年秋。蛙与蝦蟆羣鬭」、 ただし、 『淮南子』で蟾蜍と蝦蟇の両方が使われているように、両者が同じと考えられていたかどうかは疑問 「鼁鱦。蟾諸」、『淮南子』精神訓、 『淮南子』主術訓、 「日中有踆鳥。 而月中有蟾蜍」など、 「蝦蟇鳴燕降。而達路除道」などの 蝦蟆 5 7
- 31 『戦国策』巻二九、「人之飢所以不食鳥喙者。以為雖偷充腹而与死同患也」、 良医以活人」。これらの書には烏頭の名は見えない。 『淮南子』繆称訓 「物莫無所不用。 天雄烏喙薬
- 32 馬王堆三号墓、玉門関、 に磨とされたという(羅振玉、王国維『流沙墜簡』)。 武威出土の処方でもすべて亭磨となっている。ただし、古文では歴の字は多くは暦とされ、 伝写の間
- 33 渡辺幸三 「陶弘景の本草に対する文献学的考察」、 『東方学報』(京都)第二十冊(一九五一)。

(塩野義製薬研究所)

#### Medicines in Ssu-min-yüeh-ling

by

#### Akira AKAHORI

Ssu-min-yūeh-ling, a record of annual functions of a powerful family in Northern China, was written by Ts'uei Shih in the middle of the Later Han dynasty (about 160 A.D.). The book suggests that families in the provinces had to prepare medicines by themselves probably due to the lack of physicians.

Harvest times of crops and medical plants and animals recorded in it coincide fairly well with those in Shen-nung-pen-ts'ao-ching, a combined edition of two pharmaceutical books, Shen-nung-pen-ts'ao (so-called Pen-ching) and Ming-i-pieh-lu (Pieh-lu). Most of the crude drugs in Ssu-min-yüeh-ling are found in pen-ching like those used in Han medical formularies excavated in Wu-wei, China. However, only half of the crops in Ssu-min-yüeh-ling are described in pen-ching, the other half being incorporated in Pieh-lu. This supports the assumption that Pen-ching was compiled in the middle of the Later Han dynasty or a little later. Pieh-lu is considered to also contain pharmaceutical knowledge of later periods.

# 小関三英と内科学

Ш

形

敞

#### ま え が き

り多くない。 ~一八三九)については、 天保十年 (一八三九) 五月に起った蛮社遭厄の際に盟友渡辺崋山と高野長英の召喚を知って自殺した 小関三英 (一七八七 岸和田藩医員兼幕府天文方訳員として 多くの著書があったにも拘らず、今日に伝わるものは余 (42)

選 火で大半は焼失した。 小関重孝(三英の甥民之輔の三男)によれば、 小関家に稿本または写本として伝わったものは、(2) 和蘭製薬通論、斯墨児利産科集成、 和蘭産科捷径並図など二百余冊に達したが、明治四十三年(一九一〇)三月の大 格私貌略屈、 泰西瘍 科精

四年)、 一英の著書のうち刊行されて現存するのは、西医原病略(天保三年)、泰西内科集成(天保・嘉永年間)、 厚生新編 (昭和一二年)の四種に過ぎない。 那波列翁伝

範、 私は、これらの諸書を比較検討して、内科学者としての三英について述べようと思う。 牛痘種法が写本として伝えられ、このうち泰西内科集成は三英の死後に米沢の古松庵から刊行された。 かるに、三英の内科学に関する著書としては、西洋内科大成、西洋内科集成、西説内科集成、 泰西内科集成、 泰西医

### 西洋内科大成

は薬剤論

C

ある

から、

,īb

洋

内

朴

大

秀安蔵書 士: III 書の 游(3 西洋内科大成四 江戸時代医書 目 本書の巻之一から巻之三までが西洋内科集成として流布していた可能性がある。 卷 録によれば、 (図1) から 「西洋内科集成 寄贈されている。 後者の 三巻 文政七 巻之一は病気の区別、 年」と記されて いる。 巻之二と巻之三は治療総括 東北大学医学 図 館 K 卷 は

巻之四終」と記されていて、 私 卷之五 0 所 蔵する昆斯内科集成巻之一は西洋内科大成五巻に分れ、 は薬剤論に分けられているが、 西洋 内科大成と西洋内科集成が混用されていたことがわ 幡蔵書本とほとんど同一内容である。ことに巻之四の最後に 卷之一 は原生、 巻之二は原因、 かる。 巻之三と巻之四は治 西洋内科集 療総

下中大了有一个打个 小光~分身 奇 自我なり体感し 卷 ナ生比较のへ覧づ 出度ト兵ッ大 し活用ハルカ松張 走力日了处夕か"流 家走一利地 とり 八街 だい ま 即利ス 町 有常心ノス和ス ララ自天潜于灰ル フ其然ナカ筋多いニ小 テ健ノリアルトー関 走方街心を = 徽微物粉 治人分点指へよう好 体ノ展:最カフノ我 猪力就生合う此王二 飲徒 展り前 推ノ角知路 冬れび党生の 銀少有活金サモ事氷 /身能处胸护 ノ傍テ月港ルノア改生の方方を 建作二 到知物 端し 答人我性 治察幹し等ノル之 "春月丧心荒" ノシモ物タナ電ラ れ多使ノスリ女な 別和型ノダー 建街 智敬气 り食入兵方面不少致領ス相比ノ刺ケ 動ノ 軟ナ支い 悉者 法南 ?

者テレラ糸静心生ん

己二敦茂物方治古

力活クス・転力体

有棒二 心具見紅生

是柳之〇〇スン丝性前枝ニテ〇

· 東沙月與與簡結了一套套

やせい後後り

西洋内科大成(幡秀安旧蔵書) 図 1

> 校外科教授として文政五年(一八二二) かい って開業していたが、 (一七八七~一八二二) (一七七九~一八二四) 着任していた 佐々木中沢(一七九〇~一八四六) 小関三英は文化年間(1・4・5) ら交渉を受け、 た のは文政六年十月であった。 医学校内科教授として仙台に着 より 蘭学を学んで鶴 より蘭方内科、 馬場塾の同僚で仙台藩医 江戸 に遊学 Ļ 馬 三月仙台 吉田 場 岡 佐 長淑 に帰 郎

從 三英は 此 節 事 飜 たが、 訳 仙台藩医学校に着任直後より K 取 文政七年二月二十三日付書 か かり居候物有之、 是は当年 蘭 書 翰 0 中出 飜

から 版 の積 に御 座 候間、 来月中 に漸く草稿出 来上り候事 K 御座候」 と記しているのが、 富士 川游の西洋内科集成三巻の可(3) 能 性

れたか、 幡蔵書 七九〇~一八四六) 筆写した可能性がある。 0 西 一洋内科 大成四 の実弟 巻は昆斯蒲律 で 関で 開 業し 倔内科大成 7 い たか (昆斯内科と略記)とも記されているが、 5 仙台藩医学校退職 後三年間 関に屏 旧蔵者の幡秀安は佐 居 L た佐 マ木中沢 かい 木 5 中 沢 5

事にて御座候」と記しているのは、 文政七年三月十三日付中沢宛大槻玄沢書翰のなかに、(6) 静嘉堂文庫(大槻文庫旧蔵) 0 小小 泰西産科捷径のようである。 関君 頼 候 フ ル ドド コン スト 被訳候 由 冊見度

内科集成を訳述したことになり、 後述するように、 N.C. Meppen が蘭訳したもので、 であるから、 養賢堂蔵書である G.W.C. 三英の飜訳しようとした 泰西内科集成卷之一 Consbruch (一七六四~一八三七) さらに考証が必要になる。 第 には、 一巻は文政七年(一八二四) Consbruch は文化十四年 泰西紀元一千八百二十四年と記されてい 0 (一八一七) 刊の第一版だったとも考えられる。 刊の第二版、 Geneeskundig 第二巻は文政十年 Handbock voor るから、 三英は第二版を用 (一八二七) Praktische 刊の第 Artsten しか て泰 二版 は

ては遺伝病、 区別に などの 蘭語 私加刺屈多ト云フ」と述べ 幡 レスル 蔵書の西洋内科大成では、 術 物垤児福児多蒲廉幾尹倔、 語に 1 7 は、 先天病、 つい 在リ 稽 7 (後略)」と述べ、 解説 留 伝染病、 0 長短 L たのち、 「自然ノ力ヲ以テ疾病ヲ治スルノ次序ヲ左ニ列挙ス」として治療機序を列記したのち、病気 K 病毒 関係するものとしては急過病 初 刺衝物 8 の差別に関係するものとしては胃腸病、 與奮機羅甸心失鞭毘 巻之一では、「凡活体生命 原生と題する緒 羅甸私扶謬律斯 言が あり、 里答斯 蘭語 遷延病、 ラ 「夫医 布栗詰児、 保続 蘭語 ノ職 スルニー 急性病、 屋布物幾羅児託多、 及 抗拒 粘液病、 ル ツ 其 慢性 羅甸 人身二於 ノ主宰アリ之ヲ名ツケテ生活力 蛔虫 病 列亜屈: い病、 病気 ル必ス其常ヲ保 再生機羅甸 扶鵠 病勢の差別に関係するもの 0 起 原に関 蘭語 **勝斯布刺私扶** 的學 係するも 全 律倔物児京倔 ス 12 原名利 1 のとし 其 加力

病、 としては稽留病、 運営を自ら変化し或は是を斡旋する療法、 巻之二と巻之三では治療総括について述べ、 の分類としては一 ては小児諸病、 に巻之四は薬剤論 各処病、 物質減損療法、 全身病、 男女諸病、 往来病、 般流行病、 で、 病気の始終に関係するものとして 薬剤と食物を区別し、さらに薬剤の効能と分量を述べている。 身体物質の調和を理る療法を分け、それぞれについて薬剤の適応症と禁忌症を述べている。 貴賤病、 間 以歇病、 狭雑病とに分け、 産業病、 焮衝病、 病毒の所在を移させる療法を分けているが、 第一は無形に係るもので、 病気の単複に関係するものとしては単病、 腐敗病、 病気の原因を遠因と近因に別ち、 神経病、 は本病、 病毒の所在及び患部に関係するものとしては元源病、 継発病、 衝動療法、 転移病、 遠因を誘因と素癖に分けて 鎮止療法、 患者の年齢、 第二は 合病、 併病、 有形に係るもので、 強壮療法、 人品に 治療家に必要な病気 関 減袪療法、 る。 次い 物質增 身体 で

六病毒 之五では薬剤論について述べ、その内容は幡蔵書の西洋内科大成と殆んど同一である。 述 第 私の所蔵する昆斯内科集成巻之一は西洋内科大成の巻之一から巻之五までを包含しており、 衝動 和蘭 ノ処在ヲ 療法、 滅辺 . 飜訳并補註、日本小関好義三栄訳述と記され、巻之一では原生、巻之二では原因、 移 第 サ 一鎮止療法、 2 ムル療法、 第三強壮療法、 巻之四では第七物質増益療法、 第四減袪療法、第五身体運営ヲシテ自ラ変化シ或ハ之ヲ斡旋ス 第八物質減損療法、 第九身体物質 独乙都 巻之三では治療総括 ノ調和 蘭 土 ラ理 昆斯 ル療法、 ル 療法、 第 卷

たものとも考えられる。 たが って、 後年昆斯内科集成として増訳されたとき文政七年に訳述された西洋内科大成はその一部に組 み込まれて

之ニ酬ス」と記 七 ス 処 1 のことは天保三年(一八三二) ノ内科書ラ 本編巻帙浩瀚ナルヲ以テ剖厥未タ功ヲ竣ヘス 翻訳 その解説は幡蔵書並に著者蔵の西洋内科大成の内容とよく照応してい シ題シテ西洋内科 刊の西医原病略の 大成ト云フ (中略) 題言からも明らかである。 近比及門 余因テ原病 ノ徒往々原病ノ学ヲ問 1 略 説 ヲ作テ之カ附録トナシ すなわち、「余嘗テ西哲工私蒲略淈氏 る フ者アリ 乃チ 将 右 併 ノ附録ヲ出 テ家塾 刻



図 2 泰西内科集成(1)

同

内容である。

私の所蔵する昆斯内科集成十

五

けに西洋内科集成凡例巻之四終と記されている。

たがっ

三英が訳述したときは西洋内科

冊も巻之一が西洋内科大成五巻に分れ、

巻之四だ

冊は、

西説内科集成上編、

編

集 成 K

該当し、

また

大滝紀雄博士蔵書の内科集

九

冊は後述の泰西内科集成外篇巻之十八~二十

か るに、

関場不二彦蔵書の西洋内科大成下篇(8)

編

薬剤篇に分れ、

前者は 下

西洋内科大成 泰西内科

淑 にならって泰西内科集成と改称されたと考えられる。

て西説内科集成、 過程で、 成と名付けていたが、 西洋内科集成または宇 さらに昆斯内科集成から吉田 補訳して内容が充実され 田 川玄随に なら 長

#### 泰西 内科集成

十年 目録には る昆斯内科集成巻之四だけに記されているが、 穂亭主 (二八三九) 人が嘉永五年 「小関篤斉 から嘉永五年 西医原病略 (一八五二) (一八五二) の間に出版されたものである。 十二月に蒐輯 西洋内科集成活版」と記されている。 米沢古松庵活板 i 安政元年 の泰西内科 (一八五四) 桐園先生の序文を得て出版され 本書は篤斉小関 集成に相当するとすれば、 出版されたという西洋内科集成は私の所蔵す 二英訳内科集成 三英 の自殺した天保 た西洋学 (図2) と題さ 家訳述

麽 7 石 4

頭だけに工私貌爾觚の名が記されている

(図3)。

れているが、序文も凡例も印刷されず、巻之一の巻

しかし、巻之二十六の巻頭だけに削除し忘れたよ

(一八三五)

四月 に従

4

道 遽

泰西内科集成(2)

畿 図 3 うに小関三栄訳行と印刷されている (図4)。三栄 天保六年以前のことであり、 事することになった時のことであるから、 幕府天文方訳員に任命されて厚生新編の訳出 が三英と改称したのは天保六年

y

9

擂

de

A 4

址

塘

a. 旋

身体 癞

斯 名

V

2 繺 1 ij

110 110

种

歐神

之 4

魏 礼 二世

2

總

A

かい

余り時をへだてて いない 時点では

なかっ

た

ろう

出版は蛮社遭厄

か

訳

述

)

80 000

L

ある。 乙都 千八百二十四年独乙都 西洋内科大成凡例巻之一にも同様に記されていることは既に述べたが、 者書法一字ョ下ゲ〇ヲ記シテ以テ本文ニ別ツ」と記されている。 蘭 なお、 土 昆私貌爾觚著述、 富士川文庫本の泰西医範上篇巻上の熱病総論も本書の巻之一とほぼ同 昆斯貌爾觚著述、 和蘭 滅辺飜訳補註、 和蘭 訳述并補註 日本 小関好義三栄訳述と記され、 (図3参照)と記され、 本書巻之三には泰西内科集成巻之三、 大滝博士蔵書の西説内科集成巻之一凡例に、 一内容で、 内容は米沢古松庵活板と全く同 私の所蔵する昆斯内科集成巻之一 「凡篇中墨本氏 泰西紀元 ノ附説 二係 で 0 独

Geneeskundig Handboek voor Praktische Artsten P' したがって、小関三英が泰西内科集成の原書として用いたものは Allgemeine Encyklopädie für praktischen Aerzte und Wundärzte ( 1 ≺○11) 第一版は文化十四年(一八一七)、 Georg Wilhelm Christoph Consbruch (| 中长国 第一巻第二版は文政七年(一八二 を N.C. Meppen か 蘭 訳 た

12

述したものである。 第二巻第二版は文政十年(一八二七)Amsterdam で 出版されているから、 文政七年 (一八二四) の第 巻第二版を訳

と書かれているから、 板ニ鎸ム」という自敍があり、 は米沢古松庵活板の泰西内科集成のことかと思う。 三英と高野長英の後援者)の 自写本で、「此書ヤ平躰ヨリ説テ疾病ヲ生ズル所以ト薬剤ヲ用フルコト等ヲ載詳ニス 訳述したことを記している。 大槻如電の新撰洋学年表には、天保三年(一八三二)三月小関三英が(9) 大槻家蔵本の写本かとも考えられる。 大槻家蔵本は 如電は末尾に、「本書は刊行を果さず、後に至りて木活字を以て板行す」と記しているの 神崎屋源蔵 なお、 (名は周、 大滝博士所蔵の泰西工私貌爾觚の薬剤論には神崎屋周蔵周筆記 通称は周蔵また源蔵、 泰西内科集成十六巻 浴蘭堂と号す。 (凡例、 奥州水沢出身の薬種商 薬剤篇、 外篇) 故二桜 を

٨ 此 内 戏 \*\*\*\*\* 宋 2 譯行 X + ķ, A ð Ąŝ (6) TO

図 4 泰西内科集成(3)

後 Herford に生れ、一七八七年 Halle 大学を卒 buch と記されている。Georg Wilhelm Christoph G.W. Consbruch in J.C. 巻第二版(一八二七)があり、 Consbruch は一七六四年ドイツ国 Westphalen Encyclopedie. Tweede Deel. Klinisches Meppen の第一巻第二増訂版(一八二四)と 第二 Consbruch naar het Hoogduitsch 仙台藩学養賢堂蔵書 Herford VOOr に開業し、のち Bielefeld に移り、 Praktische 0) Ebermaier, Algemeene 75 かい Artsten 第二巻の巻末に、 以' Geneeskundig door door Taschen-N.C. 業

蘭訳本である。 八三七年同地で歿した。 本書は彼の主著 Allgemeine Encyklopädie für praktischen Aerzte und Wundärzte ( | < ( ) 1) 0

書の出版を妨げたものかと思われる。 薬能識、 の業を卒へたり(中略)。今之を帳中に秘せず、梓に上せ西洋医術の一変して不易の法と為ることを同好の士に告ぐ」と記 予に授けて曰く、 高良斉の西医新書の題言に、 文政十年 (一八二七) 医薬誤用論、 予崎港に遊び、 吾医法渾て此書中に在り。汝謹で之を読めと。予受て之を読み、先生に就て疑を質し、 駆梅要方だけで、 西医シーボルト先生に従学すること弦に五年なり。丙戌の歳、 訳述を終へたが、 「此書は千八百二十四年 天保九年(一八三八)出版の駆梅要方が同十二年発売禁止になったことが西医新 出版されなかった。高良斉の著訳書三○余種のうち出版されたのは蘭法内用 (我文政甲申七年)和蘭ゲーウェ 蘭舶此書を齎らし来る。 ・コンスブルック氏著はす所なり 年所にして訳述

科集成四二巻は良斉の西医新書四三巻に匹敵するものである。 英のコンスブリング氏内科書一四冊、江馬蘭斉・青地林宗の公私貌爾觚内科書一八冊が訳述されているが、三英の泰西内(1) りはるかに膨大なものである。 西医新書は内篇二三巻、 外篇二〇巻、 しかし、シーボルトが賞讃しただけあって、本書は小関三英、高良斉のほかにも、 計四三巻で、 神崎屋源蔵自写本の泰西内科集成の凡例、 薬剤篇、 高野長 計 (49)

米沢古松庵活板の泰西内科集成には鶴岡市郷土資料館蔵書 (鮎貝村回春堂主人小池氏旧蔵書)と米沢市近知義氏所蔵 (花沢

玄庵旧蔵書)とがある

[~二十九以外は手写本、 前者は内篇十七巻のうち巻十四は欠本で、巻十三から巻十七まで手写本、また外篇二十三巻のうち巻十八、十九、二十 ·薬剤篇二巻が木活字本であるが、外篇のうち巻三十~四十が欠本である。 薬剤篇二巻は木活字本であるのに対して、後者は内篇十七巻全部、外篇二十三巻のうち巻十八

本書の目録は次の通りである。すなわち、巻之一は熱病総括、 熱病品種、巻之二は単熱之部 全身抗拒症第一種刺衝熱

器失常総論 椎水腫、 風 之十三 疹、 児分泌増進症総括、 単 括 焮 第二 瘡 十八は血 十六は血 癲 七 衝 液及瓦私多利熱等、 は間 脚 癎 利 蕁麻熱、 亜格 睾丸 膀胱 病 痛、 瓦私多利熱、 肺 歇 一は牛痘 焮 純 心悸等、巻之二十三は痱、 咽喉焮衝第 列斯 焮衝 粋焮 連垤 腫 熱 衝 巻之三十二は粘液分泌諸器病総論 閉総論、 運営失常編 巻之二十外篇は面痛、 水 便 種法、 脇痛、 般 巻之十八外篇は神経 衝 心臟失常、 ルセ 熱 打烏縛児謨 屈 毒 子宮焮衝、 月経不 巻之九は シイン熱、 包茎、 乳熱総括、 巻之十五は複熱之部 貯牛痘毒法、 内伏胸焮衝、 種気管焮衝、 第二 皮膚水腫 失血 種 巻之三十四は喘息、 通及閉塞、 総論 巻之八は第二種分泌増息熱 亀頭牽攣、 腐敗熱、 2 黙児幾格児私多、 P 流涎熱、 恐水病、 1 頭痛、 粘液吉利児分泌增息症総括、 卒中 病総論、 偽牛痘、 衂 トホンク、 隔膜焮衝 膜様咽喉焮衝 悪露閉 血 巻之三は第四 卷之三十 風、 胃 胸水、 喀 乳熱、 痛 昏睡病等、 焮衝性失加児刺倹熱、 塞、 血 総覚病、 巻之十四は第四種総知覚増進熱総括、 麻疹、 腹膜 咳嗽、 冒寒、 巻之二十一は 水泡 巻之十は第三種発疹熱総括、 は水脈 子宮水腫、 巻之二十七は吐血、 血分病総論、 種神 網膜腸間膜焮衝、 第二種咽頭焮衝 粟疹、 消化栄養諸器病総論 疹、 粘液痔、 慢性傷冷毒、 巻之二十四は恐水、 経 諸病総論 縮髮病、 熱、 甲 巻之十二は泡腫熱、 卵巢水腫、 疝 良性淋、 敗血病、 巻之四 胆液道并二 単症聖京倔熱、 神識失常総論、 岩 腰 焮衝性痘瘡等、 刺設厲點刺都 痔疾、 痛 瘡 は 肝臟焮衝、 第三種気食両道及口内諸部焮 白帯下、 陰囊水腫、 萎黄病等、 部抗 胯痛、 徽瘡潰瘍、 巻之二十五は依卜昆姪里、 第 咀 子宮失血総論、 羅斯、 嚼諸器病、 拒 斑熱、 皮病総論 巻之十九外篇は神経 道症総括、 巻之七は脾臓焮衝、 症第 粘液熱、 欝憂失心、 巻之二十九は 歇乙 頭水、 巻之十六は消削衰耗熱、 列烏麻多熱、 全身黴 我児姪児羅斯 天然痘、 度 種兼焮衝熱、 飲食翻反、 外部頭水、 虫症熱、 屈 毒 月水過度、 瓦私多利熱総括 湿 卷之二十二 略 瘡 水脈 痢熱、 幾里 単症真痘、 斯 答泄尔 巻之三十三は天泡 内部 (丙) 衝 吐涎、 元病 病篇 部胯 胃焮衝 巻之五 卷之十 悪露過泄等、 歇以私的里、 一は健忘、 複 必及諾 唾吉利 巻之六は胸焮衝 痛 熱之部 類痘、 嚥下妨碍 水、 水脈諸 産後熱、 は は失加 単 腸焮衝 痛 脳 撒 脳 児及乳吉利 症 焮 風 痙攣諸病 病総論 種痘、 水 焮 衝 謄 卷之一 腫 卷之一 変形 衝 児刺 液 胸 瘡 ーは 胃之 腎焮 内諸 脊髄 性 頭 痛 胆 卷 険 脊

(50)

162

保護、 溺死、 温布罨 諸 部焮衝、 篇巻之二は第一 七十依蘭苔煎、 酸乳清剤から第十七硝石清 尿道病総論 病、小児消削病、 悪 凍死、 貼法、 初生死状、 瘡疹、 心 中 小便閉、 嘔 刺絡法、 没薬糖から第九十九小児結核労散である。 吐、 収斂剤が第七十一 百日咳、 粘液労、 窒咳肺痹、 雷擊、 下痢、 小便失禁、 用気嘘入口内法、 巻之四十は急救法総論 膿労総論 中毒、 涼飲 巻之三十五は餐泄、 慢脾風、 尿崩、 明礬乳清から第七十八収斂飲剤、 薬剤篇巻之一は緩和剤部が第一緩和煎から第十一和毒塗擦剤、 鎮静剤部包摂剤が第十八護謨乳剤から第四十五竜脳散、 粘液労、 牙肉緊急、 結石、 煙草薫腸法、 肺労、 霍乱、 陰器病総論 察死法、 眼瞼潰瘍、 巻之三十七は肝労、 吐法、 灰白利、 察生法、 嚏法、 鵞口瘡、 遺精、 大便閉、 卒死救護法、 陰茎勃起、 強心剤が第七十九解毒飲から第八十六神経 冷水灌溉法、 吃逆嘔吐、 鼓脹、 脾労、 蛔 花風病、 腎労、 下利、 小児圧死、 摩擦法、 巻之三十六は羸痩病、労症、 子宮労、 搐搦、 巻之三十八は小児養育総論 濡巾摩擦法、 利 墜下卒死、 尿剤が第四十六利尿飲から第 歯牙新生、 胆液病総論 鎮静剤部清涼剤が第十二 縊死、 灰慰法、 巻之三十九は内 黄 軟膏、 嚥下哽喉 温浴法 胆 消削 薬剤 石

+ 七、 内科集成の巻之一一三、 後者の方が精細となってい 私の所蔵する昆斯内科集成の巻之一は西洋内科大成巻之一から巻之四、 巻之十三は巻之三十一一三十二、巻之十四は巻之三十二一三十五、巻之十五は巻之三十六一四十とほぼ一致し、しか 巻之九は巻之十八一 十九、 巻之四は巻之四 巻之十は巻之二十一二十四、巻之十一は巻之二十五一二十七、巻之十二は巻之二十七一三 一七、 巻之五は巻之七一九、 巻之六は巻之十一一十三、 巻之二は泰西内科集成の薬剤論、 巻之七八は巻之十四 巻之三は 泰西

頭牽攣までは大滝博士 一十九 なお、 幡蔵書の昆斯蒲律倔抜萃 部 から 致して 一所蔵 0 西説 内科集成下編卷之三、 (東北大医学図書館蔵) には 私の所蔵する昆斯内科集成巻之十二、 昆斯メツペン巻之五後篇と別記され、 泰西内科集成卷之二十八 目次の月水不通 から亀

\$

る。

たがって、 既述の西洋内科大成から泰西内科集成と改称する迄に、 西洋内科集成、 西説内科集成、 昆斯内科集成など

泰西 泰西 内科 熱病論 集 成の特徴は内篇十七巻が焮衝熱を含むすべての熱病に (文化十一年刊) を拡充していることで、 治療のなかでは ついて L ば 詳 しば刺絡を推 説 L 一英の 奨して 師 吉田 1, 長淑 七七九~一八 二四

九年 其 伝染シ る。 ることとあわ 争 は x ス ス さら ス ル ル V 年 悠々 また、 病 此 者 七 1 世 世 " 或 病 其術自ラ練熟シテ常ニー 1 ノ伝 然上 総テ峻 チ 4 医 八外気 病 7 = (染毒 毒分 依 若 依 1 梓 痘 工 「天然の 7 書名 行 種 1 世 1 1 ク 1 利 昆 法 3 加 テ E 意細思 1 於テ 地名 IJ 自 ラ施 姪里 7 得 1 種定類 コラ治 ニ於テ 12 シテ伝染ス」 コ 毎 ナシ 力能ク医 西比 補 牛痘 2 1 1 日之有リ日ヲ定 ノ人ニ 洋ツ イホコンテリ 説 其後他 スブ 任医祖ノ名 スルヲ待ツ 争 出 = 種 1 ノ性 日牛 -略)、 板 ル 者 宜 法 1 良医ヲ得、 七 アリテ ッ シ、 ノ誤治 ノ少年数輩 痘種 と記 ネ 医 ホ クが経験を重んずる達識の医師であっ 12 殊ニ胃 毎 12 ル ノ遺教ト称シテ尊奉スル 1 歇以私的里 1 法 月記 常 患者 ス L X 丰 1 来 テ ナ 病 1 濫 ニ於テ 1 巻之十三の牛痘種法につ 亜 即 世 1 ノ焮 二試三遂二此 ル 12 ノ劇 觴は ン国名 人始テ牛 弗 理 間 ノ理ナシ チ能ク万全 利 = ノ学 甚ト 衝 ヘイステリ 独乙都 明 加 (中略) ノ土人已ニ 1 カニシ 流 州 如 = 痘 治 ノ内 牛、 勝 ハ時 国 種法 カナリー 療 法要用欠り 4 功ヲ収 地 テ人事 の治法について、 代二 如 リス ノ乳汁ラ 其人痘 従事 ヲ以 所ノ分利定日ハ 是キ ヲ 発明 連レテ とか、 テ 人二 ス 12 及ヒ天事ニ 千七百六十五年二 い 其 ル + ノ預防法ナ 七 搾取 ては、 本地ト 非レ 移 カラサ IJ E リ」と記し、 たことを示している。 1 実 ル (中略)、 12 E 業ヲナ i ス。 須ク此 今之ヲ歴験スルニ 属スル治療ヲ久用シテ速 之ヲ診 旧 一語 「凡ソ ノナレバ ル 7 染 1 吾州 コ 厄 ノ習 ス 干 ヲ 利 病ヲ療ス 鏤板 ことに、 1 = 1 決定シ 固泥 婢 謬ラ 七 ヲ 亜 = 拠 僻 僕 百 0 於テ 知 1 ヲ セ 九 サ ス 離 ス ル 4 泰西医 ルニ 侯国 ル IJ + ル ル 千七百 痘 六 此 さらに、 其期ニ合 1 丰 コ = コ 只 ラ其 年 医 記 ユ 病 - 1 b 足ラス」 自 コ 莫 範 IJ ノ第五 口 1 実ニ 1然ヲ 直 セ 身 九十 ルベ カ IJ 2 ウ チ 患者ト明 0 難シ」、 熱病 天然痘 師 = 七 = セ = 伝染シテ是ニ シ 又 月十 ザ 効 とか、 ス 其 刀 年 テ ス 患 ル 総 有 シ だつい ル と記 と述べ 識堪 1 兀 ル 論 テ E 七 於 7 中 コ 0 実 凡 1 百六十 テ初 して 忍 1 to 1 多 7 セ 始 て 力 ヲ ヲ ソ 曲 求 要

牛痘種法ヲ施シ X 1 遂 テ 痘 厄 セ ラ免 利亜国次ニ ラ ス リト テ良効ヲ収メタリト 其功今ニ至テ遂 独乙都国近今ニ 又一千七 百 九 一六六 十一 至テハ諸国諸州ニ 心を見ることができる。 1 IJ 年 ネ = 於テ 然レ 1 ル 1 E フ -於テ此 帰シ 此時代ニハ猶是等 V " テ不朽 1 法ヲ試験 + ル ノ名ト 人 七 IJ 丰 1 1 ナリ 発明ヲ忽ニシテ意ヲ注ケス 1 (中略) ル 名人 ヌ 1 (中略) 今ニ至テ大率是ニ 1 七 = 1 、ン 1 ŋ ネ ラル名官 ル 近キ 此 法ヲ アル 故ヲ以テ其名湮滅 チニ 成説 発見シテ後始 ヲ定ル

至

IJ

と記

して

お

り、

著者

の愛国

ると、 三栄時代に 内 衝 軒、 素堂と号す) \$ IJ ヲ E 板として刊行された所以 以 四 本書 科集成巻之十三の牛痘 則 1 については訳名出於小関篤斉、 を解説 高野長英、 テ人皆之ヲ用フト 都大学図書館富士川 Ł ラント諸大家 工私貌爾觚が挟歇蘭 7 0 幼幼精 処 ラン 訳述し X してい の存在が考えられる。 K 義 小関三英、 1 E るが、 た泰西内科集成巻之十三を三英の死後に筆写するとき、 其自ラ質験ス 一巻を刊行 ノ説ヲ参考スへ 雖モ ラントの説を引用している。 種法、 は明 本に牛痘種法という写本が そのうち刺衝物につい 或ハ 行したが、 杉田 土と誤記される可能性もあり得たのではないかと思われる。 5 ル 其創傷広蔓スル 貯牛痘毒、 成卿らと交友があり、 かで 所ニ由テ斯法 忠亮は江戸に出て 1 知覚機については訳名同上、 ないい (中略) が、 れは蘭方小児科書の嚆矢である。 偽牛痘と全く同一である。 米沢藩医員堀内忠亮 種 7 = ノ利害ト是ヲ用フヘキ症ト 痘 由 は ノ法 あり、 牛痘種法は嘉永五年三月小室友篤主人の筆写したものであるが、 テ 漢学を古賀穀堂、 訳名出於小関篤斉原病略、 扶歇蘭度の 1 儘悪症ヲ発スル 遠西扶歇蘭土著 数種アリ 抗力、 原本 (一八〇一~一八五四、 泰西内科集成巻之十二の を薩窟設の E 感伝、 コ ユ 蘭方医学を杉田立卿、 1 ヲ定ム 幼 小関三英訳述と誤記したことなどを考えあ ラン アル 小関三 々精義 吸収力についても説拠同上と記してお 説拠同 カ故ニ近今此 1 翻訳した児科書を重訳して弘化 ルコト次条 英訳行と記され 0 巻末に名称義略が 次 名は忠寛のち忠竜、 なお泰西内科集成が米沢古松庵蔵 上 ノ法ヲ用 感受につ ノ如シ」と述べ、 種痘 法ノ是非得失ヲ論 青地林宗に学び、 (中略) には、 ているが、 い ては あ 此法甚 説 凡ソ 原病 そのほ 内容は 拠同 字は君栗 簡便 種痘 ス 二年 ル 以下十 井誠 者ア 小関 泰西 ナ わ 力 法

大半が もなく米沢で刊行したものと思われるが、 蔵板と印刷) 堀内先生訳米沢日渉園蔵青藜閣発兌と印刷され、 小関 三英の西医原病略を引用 という印刷様式に酷似している。 Ļ 三英の学力に対する傾到 古松庵については未攷である。 したがって、 内科集成巻之一の扉の、 小関三英の学識を高く評価した米沢の古松庵が三英の死後間 ぶりが知られ 篤斉小関三英訳米沢古松庵活板 る。 しか P 幼幼精義巻之一 の扉に は

#### 総括

門人加賀藩医官藤井方亭(~一八四五、名は俊、字は士徳)が増訳して文政五年(一八二二) 幕府医官桂川甫周の校閲を経て出版された。玄随は本書の改訂を試みているうちに寛政九年(一七九七) L 養嗣子玄真 0 四 た 年 (一七九二) 国における (一七六九~一八三四、名は璘、榛斉と号す。本姓は安岡氏)が Gorter(一六八九~一七六二、Herman Boerhaave の門人) 脱稿し、 蘭方内科書の嚆矢は 津山藩医員宇田川玄随 寛政五年から 文化七年(一八一〇)にかけて刊行した 西説内科撰要十八巻である。 (一七五五~一七九七、名は晋、字は明卿、 Gorter の Gezuiverde Geneeskonst (| 七四四) の安永二年 増補重訂内科撰要十八巻を出! (一七七三)版について校註 槐園と号す) 逝去したので、 本書は を飜訳 から 和蘭 寛政

保六年までに四十二巻に拡充したと考えられる。本書前半の内篇十七巻は熱病を対象としているのは吉田長淑が文化十二 大成と名付けたが、 科撰要を学び、 頃江戸に出 宇田川玄真の義弟である吉田長淑(8) 英国の John Huxham (一六九四~一七六八、Boerhaave の門人) て吉田長淑に 文化七年 増訳 の過程で西洋内科集成と改称し、 蘭方内科学を学んだ小関三英は 二八〇 (一七七八~一八二四、名は成徳、 加賀藩医官となったが、 Consbruch 天保三年 文化九年蘭方内科医を標榜して開業し、 の蘭訳書を飜訳して泰西熱病論六巻を出版した。 字は直心、 0 〇八三二 蘭訳書を 飜訳し、 駒谷と号す。 泰西内科集成十六巻としたが、 文政七年 (一八二四) 本姓は馬場氏) 文化十一年(二八一 は 玄随 西洋内科 西説内 この

とではあるまい。 年(一八一五)に刊行した泰西熱病論六巻に照応するもので、本書が泰西医範(写本)として流布されたのも理由 の学統によって蘭方内科学がわが国に定着することになった。 玄随、 長淑、三英の蘭方内科書を比較検討してみると、 師伝相承を思わしめるものがあり、 これら三者 ないこ

にとって大きい損失だったと考えられる。 それにしても、 天保十年(一八三九)五月の蛮社遭厄に際して小関三英が自殺したことは、 わが国の蘭方内科学の発展

雄博士に深謝する。なお、本論文の要旨は第八十回日本医史学会総会において講演した。) 、付記米沢出身の蘭方医花沢玄庵旧蔵、米沢古松庵活板の泰西内科集成および西説内科集成の借覧を許された近知義氏および大滝紀

#### 引用文献

- (1) 山形敞一 小関三英覚書 日本医史学雑誌 昭54
- (2) 杉本つとむ 小関三英伝 昭45
- (3) 富士川游 日本医学史 明37
- (4) 山川章太郎 小関三英とその書翰 文化昭12、中外医事新報 昭13-14
- (6) 山形敞一 佐々木中沢と大槻玄沢 日本医史学雑誌 昭52

仙台藩に於ける医学及蘭学の発達

仙台市史4巻別篇2

昭26

5

Ш

形敞

- (7) 山形敞一 仙台藩と独逸医学 日本医史学雑誌 昭16
- (8) 関場不二彦 西医学東漸史話並余譚 昭8
- (9) 大槻如電 新撰洋学年表 昭4
- (10) 高於兎三 高良斉 昭14
- 11) 長田偶得 高野長英先生伝 明32

(東北大学名誉教授)

#### Sanei Koseki and Internal Medicine

by

#### Shōichi YAMAGATA

Only four books have been published among the many translations of Sanei Koseki. (1783–1839). These are Seiigenbyoryaku, (1832), Taiseinaika Shusei, (1839–1852), the Life of Napoleon Bonaparte (1857) and Koseishimpen. (1937). The Taiseinaika Shusei is a translated book of internal medicine. The book is an indirect translation of Allgemeine Encyklopedie für praktischen Aerzte und Wundeaerzte (1802) of G.W.C. Consbruch (1764–1837) through a Dutch translation by Meppen, Geneeskundig Handboek voor praktische Artsten in 2 volumes. (1824–1827).

Sanei Koseki studied Dutch medicine under Choshuku Yoshida (1779–1824) and Dutch science under Sajuro Baba (1787–1822) in Edo in the period 1815–1817, and he was a professor of medicine in Sendai in the period 1823–1825. Therefore it seems that the above mentioned book's translation was initiated in Sendai.

Sanei Koseki went to Edo in 1827, became a member of the medical staff of the Kishiwada clan in 1832, then nominated as the official translator of the shogunal department of astrology in 1835.

During this period, he completed a translation of Consbruch's textbook of medicine into 42 volumes of Taiseinaika Shusei. These volumes were published in Yonezawa in the period 1839–1852, long after his death. Naihen, 17 volumes, discusses febril diseases, Gaihen, 23 volumes, deals with general medical diseases and Yakuzaihen, 2 volumes handles prescriptions.

Seisetsu Naikasenyo, a translation of Gezuiverde Geneeskonst (1744) of Johannes de Gorter, done by Genzui Utagawa (1755-1797) and published in 1793-1810 is the first Dutch medical textbook ever published in Japan. Genshin Utagawa, adapted heir of Genzui, has re-edited and Hotei Fujii had done additional translation and in 1822 the work was re-published as Zoho-Jutei-Naikasenyo in 18 volumes. Choshuku Yoshida, a brother-in-law of Genshin Utagawa, studied Seisetsu Naikasenyo

and opened a private office and practiced Dutch medicine. He published Taisei Netsubyoron in 6 volumes, a Japanese translation of the Dutch translation of the book of John Huxham, an Englishman (1694-1768), in 1814.

Sanei Koseki had learned medicine from Choshuku Yoshida who had just published Taisei Netsubyoron and published Seiyo Naika Taisei, a translation of Consbuch's book of medicine in 1824. Added translation was included in Taisei Naikashusei, 42 volumes, in 1832. In these volumes, the first 17 volumes deal with febril diseases, the same as Taisei Netsubyoron, and the last 23 volumes describe general medical diseases.

With the efforts of the school of Utagawa, Yoshida and Koseki, the Dutch internal medicine was fully established in Japan.

# 作品をとおしてみる松沢病院一〇〇年史

岡田靖雄

# 一、一〇〇年史の概略

大学榊俶教授が医長に就任 月東京府と帝国大学とのあいだで、癲狂院における治療は大学側が担当するとの協定がむすばれ、 中井常次郎院長。さらに一八八六年六月小石川区巣鴨駕籠町 四日 ○○年前のことである。 術大学美術学部の一部の地) 二二年)三月東京府巣鴨病院と改称。 [日には東京府病院長であった長谷川泰が東京府癲狂院の長をかねるにいたって、 で一八八一年八月本郷区東片町(現東京大学農学部の地)に新築移転(当時、 現在の東京都立松沢病院の最前身東京府癲狂院が上野公園内護国院境内にあった養育院の癲狂室(狂人室) 同年一〇月一〇日には養育院が神田和泉町へ移転して東京府癲狂院は独立の形になり、一〇月二 をもって 発足したのは、一八七九年 (院長制を廃し、 医長 -事務長制)、 医科大学精神病学教室も院内におかれた。一八八九年 (現在の理研科学および都立小石川高等学校の地) (明治一二年) の七月二五日で、 これに隣接した北側に東京府脚気病院があった)、 東京府癲狂院の形式がととのった。 一九七九年からちょうど 四月より帝国大学医科 に移転。翌年三

も兼担)をへて、一九〇一年より呉秀三医長 八九七年榊医長急逝により片山國嘉医長 (一九〇四年より院長制に復して院長)。 (帝国大学医科大学教授で法医学を担任、 一九一九年(大正八年)一一月府下松沢 榊教授急逝により呉教授就任まで精神病学

村 に移転して、 東京府立松沢病院。 一九二五年六月三宅鑛 一院長、一九三六年六月より内村祐之院長。

に、 年より病院の全面改築はじまる。こののち江副勉、 九七九年一一月より秋元波留夫院長 一九四 九四九年 「五年五月に梅ヶ丘分院 (昭和二四年) 二月、 公務員法により 東京大学教授の院長兼任は不可能となって林暲専任院長。 (村松常雄分院長) (非常勤!)。 一九七九年一一月七日に創立一〇〇年記念式典。 詫摩武元、 が開設されていたが、 岡田敬蔵の各院長ののち、二年有余の院長不在期間をへて 一九五二年に梅ヶ丘病院は独立した。 またこの間 一九六二

精神医学担当の教授となった人はほぼ五〇名に達する。 院 はわが国の代表的精神科病院であり、 巣鴨病院内に医科大学精神病学教室がおかれていたことと呉秀三院長の熱烈な経営努力とによって、 精神医学のメッカとされていた。いま松沢病院医局同窓会名簿をみると、 巣鴨病院 各地の -松沢病

発行する予定であるので、それをみていただきたい。ただここでは、 この一〇〇年史の詳細は、 この点だけ検討しておきたい。 近刊を予想される公的な歴史のほかに、わたし個人が「私説松沢病院史」 最初の東京府癲狂院発足の目を、 を一九八〇年中に 何月何日とか

#### 東京府 癲 狂院は いつ発足したか

とする。 る 病 九○三年一○月当時の呉医長の筆になる『明治三十五年東京府巣鴨病院年報』(東京府巣鴨病院、 まいくつかの文書・記録・論文をみると、 |院創立以来ノ沿車大略」は「本院ハ明治十二年六月始メテ上野ナル旧養育院内病室ノ一部ニ開設セラレ」 として おなじく呉が東京医学会創立二五年祝賀論文第二輯にかいた『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』(一九一三 「十二年七月其恩賜金 『呉教授在職 二十五年記念文集』第三部(一九二八年)にのっている、 一ノ一部 (中略) ヲ以テ当時、 東京府癲狂院発足の日がきわめてまちまちになっていることに気づく。 上野公園ノ傍ニ在リシ養育院 東京府立松沢病院医局同人による「東京 ノ病室ヲ画分シテ癲狂院トナシ H 0

府 立松沢病院 ノ歴 史 お よびおなじく樫田 五郎 「日本に於ける精神病学の日乗」は、 明治 一二年六月に癲狂院が設立され

棟 医学部百年史』(東京大学出版会、一九六七年)中の「東京大学伝染病研究所・関連病院など」の部に「東京都立松沢病院. を Ŧi. P 名を収容して同月〔十月〕十日に癲狂院を開設した」とし、 創立 東京府癲狂院は、 かいた当時 年略史』 明治十二年十月東京市下谷区上野公園内ニ東京癲狂院ト称スル病院ヲ開設」とかいている。 ○○年記念式典にあたり東京都立松沢病院が発行した『松沢病院百年のあゆみと現況』は、 を東京府癲狂院に貸与したが、 (松沢病院、 の江 『東京府史』 副院長は 明治 一九五四年) 二二年 「明治 (行政篇第六卷) (一八七九年) 一〇月一〇日、 一二年一〇月養育院は で当時の林院長は、 これが 東京府癲狂院 (東京府、一九三七年)は、「依って先づ養育院に預けて置いた瘋癲病患者五十 一八七九年七月をもって設立の時としている。 上野東円院境内から神田和泉町へ移転に当って 上野公園内に発足した」としてい 『昭和十三年東京府立松沢病院年報』 (松沢病院の前身) の発足である」とかいている。 『東京都立松沢病院七十 (松沢病院、 ついで『東京大学 沿革」のところに (中略) 九四 また今回 狂人室七

病院 九六五年)中の「精神障害者処遇の歴史」でわたしは 八七九年 厚生省公衆衛生局監修『わが国における精神障害の現状 『松沢病院九〇年略史稿』 の前身である東京府癲狂院はここにはじまる」とかき、 (明治一二年)七月二五日に、 (精神医療史研究会、 養育院の癲狂室をかり費用は東京府病院でみることになった 一九七二年)も七月二五日説をとった。 「精神障害者は府病院にひきとることにしたが、 こののち吉岡真二・長谷川源助およびわたしの共同執筆によ -昭和三八年精神衛生実態調査報告-(中略) 病室は (大蔵省印刷局、 ないい 現都立松沢 ので、

うに他説をかきならべたとき、 ってみよう。 のように、 この経過は基本的には『養育院六十年史』 東京府癲狂院発足の日としては、 わたしは自分の七月二五日説が誤りではなかったか、とうたがった)。 六月、七月、七月二五日、一〇月一〇日の諸説があるのである (東京市養育院、 一九三三年) があきらかにしているが、 そこで 発足当時 0 (このよ

京都公文書館所蔵の府衛生課関係、 八七四年 (明治七年) 一月一四 日 養育院関係、 東京府より会議所付属養育院 府病院関係、 脚気病院関係および癲狂関係の文書によっておぎなった。 府下病院 (愛宕下病院、 のち東京府病院と称する

ができたら養育院医師は府下病院付属としてあつからことにする、 20

八七五年一〇月二日 会議所は府の要請により、 養育院の盲人室を修繕して狂人を収容することにきめる。

八七六年五月二六日 養育院は東京府直営となる。

八七九年(明治一二年)六月二一日 六月三〇日)に、 癲狂院費八、〇七〇円がくまれている。 庶務課より 東京府病院 へ通知の 明治一二年度予算 (当時の予算年度は七月一 日より

六月三〇日 府知事より養育院にたいし、 癲狂人は本月かぎり本府病院へひきわたすよう指令。

七月七日 り当院にしはらうようにするしかあるまいが、 九日、 そのとおりにせよとの指令。 養育院事務長澁澤榮一より、府病院に癲狂室ができるまで当院で癲狂人をあずかってその費用を府 それでよいか、 と府知事にあて上申、 これにたい 1 府知事 より I

七月二五日 担し、 衣食・看護人諸費は七月から病院付属癲狂院費中より支弁するむねの文書を交換 府病院と府養育院とのあいだで、 府病院の癲狂室落成までは養育院の癲狂室をかりて治療は府病院、 が負

〇月一〇日 養育院移転にともない 狂人室 (癲狂室) などを病院 へ貸与。

〇月二四日 府病院長長谷川泰東京府癲狂院長を兼務。

ここでもうすこし関係文書をさぐると、瘋癲人入院願いに関する一八七九年 「養育院内癲狂室」 の語とが両方つ かい われ 7 VI る、 つまりこの段階で癲狂院としての扱 九月の 庶務課 いがはじまってい の文書には、 る。 癲狂 また一〇 の語

〇月一五日引き渡しとしているものが二通あった。 他方、 翌年二月の書類には、 「十二年一月二十日養育院入院七月中 月末東京府癲

狂院より退院

の患者の届けに「本年十月十五日同院

〔養育院〕

ョリ引渡相成癲狂者ニ候処」とあるなど、

当 〇日である。 助 東京府 大西榮之助 継 病院書 ノ癲 などの名はもちいられていない)が、 また、 東京府南 0 狂 就職は 記 者 トナリ癲狂院 内務省衛生局よりの公私立病院についての照会にたいする一八八〇年一二月六日づけ といった文章もみられ 癲狂院の名でだされてい 一八七九年七月 ノ事務ヲ行ヒ」 一九日、 る。 翌年七月五日癲狂院門番についての書類は、 る文書の とか 呉の 医員の山田謙哉・ 1, 『我邦ニ於ケル精神病 ている。 最初の ものは 「東京府立松沢病院 高橋武 一〇月二〇日である (薬局員兼任)・太田原孝敬 = 関スル最近 ノ歴史」に付録 ノ施設』は、 東京府病院長長谷川 (正式の名として の就職 0 職 「養育院掛 員 0 は同 録 「仮癲狂院」、 府よりの K 泰の名でだ 年 

VC

は

明治十二年十月十日当所へ仮設」とある。

カン 月 七 四 するものとしてつ 0 養育院内 院にひきわたして府病院から養育院があずかったことにする、 月 八 日 日 K 本郷区 のようにみてくると、 九日、 は院 府 病 の癲狂室をかりて府病院が治療をおこならという医療面の責任が七月二五日からはっきりし 東片 長 専任医師がきまったのは一〇月二〇日である。 もきまっ 止 府病院から養育院へ派出の医師がその業務の一環として癲狂室もみたのだろう)、 か に新築移転し、 にともなって府病院医 われだし、一〇月一〇日に養育院移転にともなって癲狂院が養育院をはなれたものとなり、 て癲狂 一八七九年七月一日から 院 0 ここに癲狂院は府病院からも分離してその形式は完全にととの 病院としての形式がととの 師であっ た中井常次郎が専任院長となり、 癲狂院の予算がついた という形があとから確認された) そして院長はなお府病院長の ったのである。 (そして、 職 員の 面では、 同八月三〇日に癲 七月一 から この 兼務であっ 癲狂院はもうけられ 日にさかのぼって、 事 のち 務 の専 癲 たのである たが、 狂院 狂院 任者がきまっ (ただし、 は従来の借り家 のことば 癲狂者は府病 八 たの 〇月 年 から

から から 誤りで この日をもって仮設としていることからも、 は あることは このようにすこしずつできていった東京府癲狂院の発足をい たし かである。 〇月 一〇日説 それなりの根拠をもって は、 この 日 が養育院 V. か つの日ときるのがもっとも適当かである。 る。 らのの おそらく、 分離のときであり、 その後の一〇月 翌年 0 衛生局 〇日説 あて回 六月説 この

なく、 病院が患者・ 最終的移転完了は一○月一五日かそのあとであったのだろう。一○月一○日に癲狂院の開院式をおこなったという証拠も 文書にもとづくものであろう。だが、 衛生局あて回答文書の一〇月一〇日説の根拠は、 一〇月一〇日には、 建て物・ 院長をもって成立するとすれば、 責任者である院長もいないのである。国家が国民・領土・元首をもって成立すると同様に、 養育院より一〇月一五日に患者がひきわたされたとあるところをみると、 一〇月二四日をもって設立の時とするほうが妥当であろう。 養育院主体の移転という、 癲狂院からみれば消極的な事実だけで 養育院の

にか きだろう。 7 表及ヒ精神病原因 迄」としており、 そこで、 予算の関係でみると、 んがえるなら、 同年一二月二五日癲狂院より東京府衛生掛にあてられた患者統計は 形式的には長谷川泰院長就任の一〇月二四日をもって設立の日とすべきであろう。 また『東京医学会雑誌』第二巻第一七一二二号(一八八八年)にのった ノ追加」も、 府病院の責任で養育院内癲狂室の医療をおこなうことになった七月二五日を実質的発足の日をみるべ この七月とはおそらく七月一日であろうが、一〇月からでなく七月から患者統計表もつくられ 「東京府癲狂院ニ於テ初テ患者ノ統計表ヲ調整セシハ即チ明治十二年七月ナリ」として 「明治十二年七月養育院 榊俶 だが、 「東京府癲狂院 病院を医療面を中 ョリ交付後十二月 ノ患者統計

とを主張するものである。 それが こうしてわたしは、 いつから か創立記念日とされた。 一八七九年七月二五日をもって東京府癲狂院の実質的発足の日とすることがもっとも適当であるこ なお、 松沢病院となってから戦前は、一一月七日は移転記念日としていわわれていたが、 今回の記念式典もこの一一月七日におこなわれたわけである。

さて、 「来事もおこっている。 この東京府癲狂院 そこで、 ─巣鴨病院―松沢病院の一○○年にはおおくの有名人も入院し、またこの病院に関係して重要 この一〇〇年を作品によってたどってみよう。

# 三、東京府癲狂院—巣鴨病院

りつづけたことからくる人工的二次的なものと、 り が または 的言動で新聞をにぎわせており、 で計五〇年をこす入院生活をおくっている。 ことから、 病名については、 芦原金次郎の病像を解明しつくすことはいまとなっては不可能であろう。 身のまわりに無頓着であったこと、 勅 「葦原」とかかれることがおおいが、 語」をかい 芦原金次郎 わたしは妄想痴呆であったろうとかんがえている。 慢性躁病説と妄想痴呆 ていることにもみられるように、 (一八五〇~一九三七) その後新聞記者は種がなくなると将軍訪問記をかいたといわれる。 また躁病であればいくらかでも軽うつ病相があるはずなの (妄想型分裂病)説とがあるが、かれの誇大妄想がしばしば荒唐無稽のものであ は「将軍」と称された誇大妄想患者で、 戸籍でみても「芦原」がただしい。また、 芦原将軍はジャーナリズムの寵児で、 晩年には当然の年齢的なものとが、 みずからはむしろ 同時にかれの病像には、 「芦原帝」と称していることがおおか 入院前の一八八〇年からその 一八八二年の第一 かなりくわわっていたことはたしか かれは一般に「将軍」でしられる 長年ジャ ーナリズ にそれが か n 回入院より死亡ま の姓は は ムの寵児であ った。 っきりし 誇大妄想 一蘆原 芦 15 原

が 軍部 みした風格をただよわせていた。 榎本滋民作・演出により 森繁劇団が 一九六八年五月明治座で公演した 「葦原将軍」は 芦原をモデルにしたもので その主人公葭原真次郎は、 の宣伝 K 利用された人として芦原がかかれている、 平和主義の民権運動家とされており、 一方、 筒井康隆『将軍が目醒めた時』 ーこの ほうが実態にち 森繁久弥の演じる葭原は、 (河出書房新社、 かい かい ったろう。 一九七二年) 堂堂とし では、 軍国 しか 主義者で

## 精神科医療藤茂吉は

われ医となりて親しみたりし蘆原も身まかりぬればあはれひそけし入れかはり立ちかはりつつ諸人は誇大妄想をなぐさみにけり

年 などの歌をかれの死をいたんでつくっている 0 連作 世 田 谷 (『石泉』、一九五一年、 新版全集第二巻所載) (歌集 『寒雲』、 一九四〇年、 で、 そのなかの 新版全集第三巻所載)。 「松沢病院」で おもし ろい 0 は

おそるべきものさへもなく老いゆきて蘆原金次郎はひじりとぞおもふ

とうたった数首後に、「青山脳病院」に

茂吉われ院長となりいそしむを世のもろびとよ知りてくだされよ

の」なき芦原と院長としていそしむ齋藤茂吉との対照は、 とよんでいる。 当時齋藤は、 養父紀一から院長職を継承した青山脳 なか なか 病院 K 1 ーモラスである。 0 経営に腐心していたところで、 一おそるべきも

谷川泰、 らぬすみだし、その夜を誠胤は、 院 診 のばすなどのことがあって、 なった年の翌年一八 のだと、 ねらった誠胤の義母・義弟・家令志賀直道 の巣鴨移転にさいしては相馬家の費用で相馬病室がとくにつくられた。 断すれば周 その二 くりかえし相馬家を告訴し、またさまざまな実力行使におよんだ。 中井常次郎 相馬事件は、 期性緊張病とおもわれる病像をしめして、一八八四~八五年、八六~八七年と東京府癲狂院に入院 九三年には、 (後半より死亡にいたる主治医)、 旧 相馬藩主相 この事件はとくに有名になった。 毒殺としての告訴があっ 錦織に肩入れしていた内務省衛生局技師後藤新平の家ですごした。 馬誠胤 (作家志賀直哉の祖父) (一八五二~九二) 榊俶、 て、 佐々木政吉、 また黒岩涙香の『万朝報』がこの事件をかきたてて部数を 相馬誠胤を診察した医師としては、 の精神疾患をめぐるお家騒動である。 などが、 岩佐純、 病気でない主君を病気にしたてて不法監禁し 旧相馬藩士の錦織剛清は、 一八八七年には錦織が誠 片山國嘉、 青山胤通などなど、 ~ 相 ル 誠胤が糖尿病でなく 胤を東京府癲 相馬は、 ツ 馬家 スク の財 今日 おおく リバ、 産 狂院 横 0 領 癲 目 長 犴 0

九〇〇年 そしてこの事件は、 (明治三三年) 精神疾患患者の監禁手続きについても全国的な の精神病者監護法制定のきっかけの一つとなった。 (部分的には海外にもおよぶ) わが国の精神科医療史上、 関心をあおり、 ライシャ ワ事件 n

著名医があった。

をもしのぐ重大な意義をもつ事件であった。 後藤新平はこの事件に連座したことがきっかけで、 医政家から政治家

ていく。

ぐらいは相馬事件のことがかかれているようである。 お ほりだされ 相馬事件にふれている。 が錦織の立場からかいたものである。こののち矢田挿雲が『相馬事件の真相』(春陽堂、 八~一〇月にはこの事件についての本が、わたしがあつめているだけでも二〇冊をこすほどに出版された、このほとんど が一八九三年八月に 「憶ひ出した事」 この事件については おきくあつかっている。 た誠胤の遺体を解剖した江口襄の息子江口渙の『少年時代』(光和堂・東京、一九七五年) (一九一二年一月執筆、二月『白樺』掲載)および「祖父」(『文藝春秋』第三四巻第一―三号、一九五六年)で はいってどんどん版をかさね、 錦織が誠胤の死後間もない一八九二年一〇月にだした『神も仏もなき闇の世の中』(春陽堂・東京) 後藤新平をえがいた杉森久英『大風呂敷』(毎日新聞社、 最近では三好徹、 井出孫六などもその作品に相馬事件をとりあげるなど、 初版後ほぼ一年で二〇版ちかくに達したようである。 だが、 それらの内容が実相をかなりはなれていることもおお 一九六五年)、死後一年半で青山墓地から 一九二四年) も相馬事件をかなり おそらく年間に一 をかき、 また一八九三年 66)

死に近き狂人を守るはかなさに己が身すらを愛しとなげけり

齋藤茂吉 (一八八二~一九五三) は、一九一一~一七と 巣鴨病院医員であった。

第一巻所載)

その三

(一九一一年、折に触れて

『赤光』(一九一三年、新版全集

が 歌における茂吉の最初の巣鴨体験であろうか。一九一二年の 折 なの歌 中 0

屈まりて脳の切片を染めながら通草のはなをおもふなりけり

は の花とを紫の色をもってむすびつけているもので、 呉秀三がドイツからもちかえった最新の脳研究法である 精神科医齋藤茂吉の代表的な歌としてわたしはこれをおしたい。 Nissl 染色と、 茂吉にとって故郷金瓶 の山 の象徴である通草 「短

冰函にこほり絶ゆれば山羊の血は腐らむとしてこゑするらしも

は

14

時

の大問

題で

あっ

た麻痺性痴呆のワセ

ルマン反応にとりくんでの歌である。

原 巣鴨病院に関するものであろうし、 いずれをよんだか区別しにくい歌もおおい。 「巣鴨医局時代」、『アララギ』齋藤茂吉追悼号、一九五三年)ので、 へ移転前) 鴨病院にとなりして岩崎邸 は青山墓地に接していた。 (元柳澤吉保邸、 また巣鴨病院にはヒ またともに煉瓦造りの病棟があった。 だが茂吉は「養家の青山脳病院の診察も決して手伝」わなかった 現六義園)があり、 丰 ガ 工 入院患者をうたったもの、 ルが 院内にもかなりひろい庭があったし、 おおか ったので、 両病院の環境にはかなりにた面が 七十 宿直をうたったものはほとんど ガ 工 ル のでるものは、巣鴨病院に 青山脳病院 あって、 (下田光造 (松

赤光』中の連作「おひろ」の

(67)

関するものだろう。

狂院の煉瓦のうへに朝日子のあかきを見つつなげきけるかな

から、 の男女関係がきびしくとりしまられていたことからみても、 おひ ろのモデル は巣鴨病院の看護婦でなかったかとの説もでたことがあるときくが、 この煉瓦造りが巣鴨病院のそれであ 当時 るとは 0 巣鴨病院 か 2 から K お 文 い 6 て院内 n 15

漆の木」、一九一六年の 一巻所載)では、一九一三年の「宿直 赤光』では、 九二 年の 「折々の歌」、 「折 なの 「蜩」 歌 回の日、 」、「狂人守」、 には巣鴨病院のことをうたったものがおおい。それらからいくつかひろう 九一四年の「とのゐ」、「蝌蚪」、一 九一三年の 「みなづき嵐」、 九一五年の「折にふれ」、「雉子」、 『あらたま』 (一九二一年、 新版全

狂院に寝てをれば夜は温るし我がまぢかくに蟾蜍は啼きたり

Ł

(折々の歌)

ダアリヤは 黒し笑ひて去りゆける狂 人は 終にか へり見ずけり

夜の床に笑ひころげてゐる女わがとほれどもかか は りもな

よりい ろ一様の著物きてものぐるひの 群外共に

お のづか らなる我がこころ呆けし女にもの 1, 2 K

狂院に宿りに来つつうつうつと汗かきをれば蜩鳴けり

ひさびさに はや近からし目の下につくづくと狂者のいのち終る

九一二年の「黄涙余録」の連作は、 青山脳病院にあずかった患者の自殺をうたったとされるが、 患者の死に 面した医

主 たすでにあげた『石泉』 中の連作 「世田谷」 のなかの 「松沢病院」 0) もう一首は 患者

の死亡率は年間在籍者

の る。

○%にちかく、

宿直医が患者の死をみとることもおお

カン

0 た。

茂吉の歌には患者

死

がお 院

現在精神科病院入院患者の死亡率

は

般

人 口口

のそれとほぼおなじいが、

业 時

0

巣 0

鴨

おくうたわれてい

者の

悲痛をうたいあげてい

松沢病院歌ヲ選ブ」、「九月二十五日 である。 またのちに茂吉は松沢病院歌をつくっている。 ものぐるひここに起臥しうつせみに似ぬありさまもありとこそい 木旺 一九四一年の日記 争 略 午後三時、 松沢病院副院長村松氏来ル、 (新版全集第三一巻)

に「九月二十二日

月旺

V

選歌ノ礼ナリ。」

とあ

東京府立松沢病院 々歌

がそれである。

全四

一番の第

一番だけあげておこう、

処をし ושעו [季の草木も色はゆる むる城西に 聖はいし の光が ルり輝きて ここ松沢の麗

、みなづき嵐

、折にふれ

(雉子 (雉子

、折々の歌

開

これ には湯淺永年が作曲した。 またこの松沢病院歌は全集にのっていない(あるいは他人の作をえらんだだけなのか)。

## 四、松沢病院

り、 る たたかい。 を演じた)を主人公にして、病院の内部、 国内で上映されてあたらしい 感銘をよんだ 衣笠貞之助監督(一八九六~)の 「狂った一頁」は、 そ 当時新感覚派映画の代表作とされた。この映画は、 匹 また映画にでてくる病院の雰囲気は、松沢病院の旧病棟をおもわせるところがおおい。 映画 狂った一頁」 焼失していたとおもわれていたフィルムが一九七一年に発見され、そののち海外および その患者たちの姿をえがきだしているが、この映画の患者をみる目は新鮮にあ 精神科病院の小使いになっている一人の老人(名優井上正夫がこれ 一九二六年の作品 それもそのはずであ であ

ずねるとき駅頭 肉付けしたのだろう) てドラマのおおきな要素となることをかんがえて、紹介状もなしに松沢病院をたずねて、医長にくまなく案内してもら 衣笠貞之助『わが映画の青春――日本映画史の一側面 このときのシナリオは撮影終了後に衣笠・犬塚稔・沢田晩紅でかきあげたもの(たぶん、 に川端康成 には川端単独の名で収録されている)。 精神病にかかっているときこえたある高貴なお方の一行をみた、そのとき狂気の人が劇的な成因とな (一八九九~一九七二)が目をとおし加筆したものがのこっている 一」(中公新書、一九七七年)によれば、衣笠が横光利 最初に川端がつくった大筋を (『川端康成全集』第一巻 一宅をた

から 九年に短期間松沢病院に入院した。千家の病いについては、 『野村章恒教授定年退職記念論文集』、東京慈恵会医科大学精神神経科教室、 その五 詩をよむと人格はおかされておらず、やはりうつ病だったろう、 千家元麿(一八八八~一九四八) は白樺派に属し肯定的に素朴に生をうたいあげた詩人である。 当時うけもったことのある野村章恒(わが精神医学ノート抄 一九六七年)は、被害妄想があったので破瓜病とした という。 詩集『霰』(やぼんな書房・東京、 この人は一九二

年初版) 赴任につづいて、一九一六年ボルチモアに留学したが、 位その部屋にゐるのだ」とあるが、 をうたっている。なかでも「老狂人」には、「此の老人はもと病院の副院長までして、洋行して帰ると発狂してもう五年 ものの約五分の二をのせているというから、 九六四年) 一九四〇)のことのようである。 には、 無期懲役となっていたが、一九二五年に帰国をゆるされて松沢病院に入院、一九四〇年にここでその生涯をおえた。 散歩」、「おやつ」、「入浴」、「或る室」、「老狂人」、「若き狂人」、「若き狂人」などは精神科病院生活その にのっている「拾遺詩集」にも入院生活をうたった 二篇がある。 「(M病院で)」と付記されている詩が三〇ちかくあり、 わが国ではじめてクレペリンの体系によった教科書で、つぎつぎに版をかさねた。 石田は呉門下の最秀才で、文才にもめぐまれていた。その著『新撰精神病学』(一九〇六 これはどうも長崎医学専門学校教授(斎藤茂吉の前任者) 松沢病院に題材をとった詩はおそらくほかにもあるだろう。 間もなく分裂病を 発し被害妄想からアメリカ人の ほかに『千家元麿全集』(上下二巻、 「拾遺詩集」には生前刊行の詩集に未採録の であった石田昇 石田は一九〇七年の長崎 弥生書房・東京、 同僚を殺害し これらのなか

若き狂人

ここでは千家の詩

から比較的みじかい

篇をあげておこう、

その昔秀才なりしと云ふ若き狂人が

瓢逸な姿で

廊下をパタン人へ飛んでゐる

看護人の誌す、患者の挙措録に

「○様は御室を出て脱兎のごとく廊下を御飛びになります」とかいてあって笑はした。

病院に入院した。 作家 ・詩人の平野威馬雄 『癊者の告白』 (話の特集・東京、一九七六年) (一九〇〇~) は抱水クロラルおよび 0 四分の一 コカイン ほどがこの入院生活にあてられていて、 の中毒で、 九三〇年に三か月間 回診

脱院したことがかかれている。 院長を院長としている(もっとも、 とはなかったようである。 な記録しかないだけに、 など、いくらか不正確であったり、話しがおもしろくなりすぎているところもみられる。 前記の石田昇のこと、 杉田 博士の論文のフランス語訳を手つだっているときに薬局から抱水クロラルとコカインとをぬすみだして 貴重な記載である。ただここには、 ラジオ病のこと、芦原将軍のこと、 当時のメモもあったようであるが、 東京帝国大学教授の三宅院長が松沢にくるのは週二回で、院務の実質的責任者は副院長であった) 「医局の若い医者も同調し」とあるが、 四六年前の体験をかいているので、 看護人が待遇改善を要求してサボタージしたこと、 看護人サボタージの件は断片的 表だってそういうこ 当時の杉田直樹

不眠、 とめによると、「病前性格 しているが、 もらうことにして一〇月一五日に保釈がゆるされて退院してい る。 ち受刑しているが、 にいる家で検挙され、 一二二一一八九、一九三七年)は、 の七 拘禁反応の作家 そのうち二六例が治安維持法違反とされた人である。 二二例が作家中本たか子(一九〇三~)で、 発揚、 このときは精神変調はきたさずにたえた。 市谷刑務所にいるあいだに拘禁反応になり、 誇大妄想、乱書症 勝気・堅忍・快活 野村章恒「心因性精神病、 一九二五年から一九三五年にかけて松沢病院に入院した拘禁精神病患者三〇例を記載 初期拘禁ノ心理及身体病 入院後ノ主症状 かのじょは一九三〇年七月一四日、 殊ニ拘禁性精神病ニ関スル臨床的知見」 る。 不安、幻覚、誇大妄想出没、 第二二例は乖離性反応型の女性で、 翌年二月五日に松沢病院に入院、 この のち中本は非合法活動に復帰しまた逮捕されたの 人工流産、 心悸発作 共産党の田中清玄といっしょ 錯乱状 刑務所ニ於ケル精神症は (精神神経学雑誌、 菊池寛にひきとっ 転帰 論文中症例表のま 全治」とあ

(白石書房・東京、 中本は自分の体験を『職場』(教材社・東京、一九四一 獄をこえて』 一九七三年) にかなりくわしくかいている。 (五月書房・東京、 一九五〇年)、 『わが生は苦悩に灼かれて 年 ここでとくに興味ふかいのは、 中 0 「白壁の牢獄 脳病院と刑務所の生 わが若き日の生きが 持続浴の様子が かかれて 活 を る

好意で食糧にもめぐまれていたことをのべてい されて特別待遇をうけていた。 に暮らせる」 7 0 にあたった内村祐之が 機のはげ頭をたたくというはでな形で発症し、 療法後に痴呆をのこさなかったことは、 精神疾患は進行麻痺で、 その八 ラコン クリー 右翼思想家大川周明 の章が松沢病院入院中のことにあてられ、 トづくりの準狂躁病棟に入院していたが、 『わが歩みし精神医学の道』(みすず書房・東京・一九六八年)であきらかにしているとおり、 マラリア療法によってかれの精神疾患は全治した。 かれ (一八八六~一九五七) は、一九四六年五月三日東京裁判第一日目の公判廷で前列の東條英 の回想記『安楽の門』 入院中に大川がコーランの和訳を完了したことがしめている。 精神鑑定ののち一九四六~四八年と松沢病院に入院した。 る コ ーラン和訳のこと、 (出雲書房・東京、 そこで一二畳の一室をあてられて、 九五一年) 当時食糧のとぼしいときであったが友人の かれの病気はごくごく初期であってマ 中 0 「人間 医者・看護者からも尊敬 は精神病院でも安楽 カン 大川の精神鑑定 n は西 Ŧi. 、ラリ 大川 病 棟

ら田 K は芹香院でも松沢病院でもない病院とされているが、「蛇と狂人」はK病院とM病院とにわけてかかれてい その九 病院内の様子やそこの患者、 中は 毒で神奈川県立芹香院に入院し、同年アドルム酩酊中の愛人刺傷事件のために松沢病院に鑑定入院した。 月光癲狂院 作家田中英光 (新潮、 (一九一三~四九)は、 一九四九年一〇月号)、 ことに躁病や進行麻痺などの患者の姿がいきいきとえがきだされてい 太宰治門下で、 「蛇と狂人」 最後は太宰の墓前で自殺した。 (小説新潮、 同年一〇月号) をか かれは い た。 九四 一月光癲 九年 る この体験 它 両 編とも アドル カン

った。 なった。 院精神神経科 010 加賀 加賀の の作品には では新る 九七九年に『宣告』の大作をものにした作家加賀乙彦は、 頭医者事始』 入局のものが交代で半年間松沢病院に留学する慣習があり、 東京大学の小川鼎三教授や吉益脩夫助教授などの姿もえがかれている。 (毎日新聞社、一九七六年) に梅沢病院としておもしろおかしくかかれているのが、 本名小木貞孝 小 木は (一九二九~)、 九五四 当 年に松沢病院 一時東京大学医学部付属病 の研 であ

院のことである。 ときあたかも松沢病院の創立七五周年で、 医者たちによって「白浪五人男稲瀬川勢揃の場」が上演され

た。

反映を如実によみとれることは、たいへんに興味ふか このようにあげてくると、作品によってこの一○○年史の概略がたどれること、またそこに一○○年間の時代の

びて、ひどく明るい建物にみえたが、玄関のとっつきから、ずっと一直線に奥深く長い長い廊下が果てもなく続いていた れて働く気になったのだ」とあるように、 のブタ小屋ではたらいた。 入院させまいという気を再確認してかえったのは、 るぐらいなものである。 殊に自然としては、 さらにつけくわえると、 だがここでは、 ガランとしてひとけがなく、 松沢病院をたずねたときのことを、 「東京郊外とばかり、 此の辺の郊外のそれは実にいる また坂口安吾夫人坂口三千代は、夫を東京大学医学部付属病院神経科に再入院させようとしてこ 作家藤森成吉(一八九二~)は一九二五年に 労働体験のために 一か月半松沢病院作業科畜産班 このことは『狼へ!(わが労働)』(春秋社・東京、一九二六年)の「豚飼ひ」の章にか 明るい光を受けて変に静寂であった」などかいている。三千代夫人が松沢病院 ブタ飼育の労働体験だけの形でかかれていて、 労働場所さへ書けない(中略)ふとある人の話から、 『クラクラ日記』(文芸春秋、 一九四九年のことである。 (中略) 大武蔵野の心臓の鼓動を聞かされたやうな気がした」とあ 一九六七年)に 松沢病院をおもわせる 「松沢病院は真夏の陽 その場所の珍奇に惹かさ かれ 描写は をあ へは

る』のなかで巣鴨病院のことがどんなふうに話題にされているか、 のように比較的こまかい描写をとりあげていけば、まだまだあるようである。 ひろってみるのもおもしろい。 たとえば夏目漱石の『吾が輩は猫であ

洛陽堂・東京、 岡 崎 (児玉) 昌は、 一九一九年)がある。 一九一八~一九、二三~三二年と巣鴨病院 このなかには、患者の死に医者が次第に無感動になっていくことや、 -松沢病院につとめた。 岡崎には随筆集

どがかかれている。ここでは、 みじかい詩を一つあげておこう、

癲狂院より

或は泣き、 或は立ち、 或は罵り 将たらづくまり

物凄き、 笑浮べり。 小暗き隅に

夕闇の、

魂は、とく朽ち果て」、 骸のみ、生ける人々。 世の花と、もてはやされ 位ある、 富める、才ある

このように巣鴨病院 一松沢病院に勤務した人がこの病院のことを随筆風にかいたものは、 ほかにもいくつかあるが、 ٢

こではそれらにはふれずにおこう。

養院であったこともつけくわえておく必要があろう。 最後に、 『地上』の作家島田清次郎が巣鴨病院に入院したかにしばしば誤解されるが、 島田が入院したのは (巣鴨) 保

とはすべきでない、つねづねこうかんがえているからである。 などがしばしば引用されるが、医者の守秘義務をかんがえると、 なお、本論文執筆にあたっては入院患者の病床日誌などは 一切参照しなかった。 他の医者が記録したものであれ病床日誌を参照にするこ 最近病跡学的研究にあたって病 床日誌

- 1 院九〇年略史稿』(松沢病院内精神医療史研究会、一九七二年)がある。 既刊のもので松沢病院の歴史をまとめているものとしては、精神医療史研究会(吉岡真二・岡田靖雄・長谷川源助)
- 2 芦原金次郎の問題は、岡田靖雄ほか編集『精神科症例集』(上巻)(岩崎学術出版社・東京、一九七五年)にわたしがかいた 「芦原金次郎考」および 『6号線』(いわき市平、尼子会)第6号(一九七七年)所載のおなじく「芦原金次郎 一あっとも
- 3 相馬事件については、精神医療史研究会『精神衛生法をめぐる諸問題』(松沢病院医局病院問題研究会、一九六四年) 有名だった将軍の一人――」(その人たちの横顔・三)にまとめてある。 『松沢病院九〇年略史稿』に要領よくまとめられている。また、相馬誠胤について、岩佐純、 榊俶・ベルツ・佐々木政吉、中井常次郎・榊俶がそれぞれかいた診断書は、『精神科症例集』 中井常次郎・長谷川泰、 (上巻) および

三宅秀・原田豐、

4 精神科医としての齋藤茂吉は、 に解明されていない。 中の「相馬事件における診断書」にわたしが紹介した。 九六八年)および「齋藤茂吉の肖像 は、この面を解明しようとしたものである。 わたしの「戦前の私立精神病院長の日記から――精神科医斎藤茂吉の苦悩」(医学史研究、 最近加藤淑子『斎藤茂吉と医学』(みすず書房、一九七八年)がでたとはいえ、まだまだ充分 ――ある精神病院長の苦悩――」(その人たちの横顔・二)(6号線、 第五号、一九七七 (75)

吉岡真二氏の好意によりみることができた。記して同氏への謝意を表したい。 本論文の要旨は、一九七九年四月五日、 第八〇回日本医史学会総会 (大鳥蘭三郎会長)において発表した。また『癲狂院より』は

、峡田診療所・東京

#### One Hundred Years of Matsuzawa Hospital, as Described in Literary works

by

#### Yasuo OKADA

The Tokyo Prefectural Asylum was founded on 25th July, 1879. It was removed thrice, and its present name is the Mertopolitan Matsuzawa (mental) Hospital. In the period of Sugamo Hospital, the psychiatric department of the Tokyo Imperial University School of Medicine was placed in the hospital, and so many professors of psychiatry had started their lives as psychiatrists in the hospital. Sugamo-Matsuzawa Hospital had once been the Mecca of psychiatry in Japan.

In the hospital worked as psychiatrists several famous writers, including Saito Mokichi, one of the most famous national poets. Other writers and Baron Soma were treated in the hospital. The Sōma Incident was very popular in 1880's, and 1890's, and influenced much on the enactment of the Law of Protection and Confinement of the Mentally Ill. (1900).

The author follows the history of the hospital in several literary works.

## 物語りの史実について のわが子豚痘接種実験

加藤四郎

はじめに

私が、たまたま日本で入手した英米発行二冊の Jenner 伝記(表一の一・二)によると、Jenner は、 が国発行の Jenner 伝にも、表一の四の茶木滋著のものは、わが子に豚のほうそうのうみをうえたことになっている。前 以前に長男 Edward に、豚痘材料を接種し、しかも、その後痘瘡による攻撃実験までしている記述に接した。 また、 み、成功したことは、多くの英米の Jenner 伝記の伝えるところである。この史実に関する考察は、 with swine-pox matter." (Vol. 1, p. 130). 述を見出した。"In November 1789, he inoculated his eldest son Edward, who was then about one year and a half old の二つの伝記には、 (表一の三) があげられていること を 知 り、 英国 Bristol 大学医学部図書館で同書 (一八三八年版) に接し、次のような記 Edward Jenner が、 引用文献として、いずれも John Baron 著の"The Life of Edward Jenner, M.D." (初版一八二七年) 一七九六年五月十四日に、James Phipps という 八歳ぐらいの 少年に、 最初の 上述の 実験を行なう 他の論文にゆずる。 牛痘接種実験を試

一に対比したように、豚痘材料を接種した年齢が異なっているのも気になるが、 さらに、 単に swine-pox matter と、

表 1 各 Jenner 伝記による長男 Edward に対する豚痘実験に関する比較

著者	書名, 出版社, 発行年	接種時の長男 Edward の年齢	接種年月日
1. Greer Williams <sup>2)</sup>	Virus Hunters, Alfred A.	about ten	Later 1789
	Knopf, New York, 1959	months old	
2. I.E. Levine <sup>3)</sup>	Edward Jenner, Blackie,	ten months	November, 1789
	London and Glasgow,		
	1962		
3. Jone Baron <sup>5)</sup>	The Life of Edward Jen-	one year and	November, 1789
	ner, M.D., Henry Colburn,	a half old	
	London, 1838		
4. 茶 木 滋4)	いじんものがたり、美しい	1年6カ月	?
	話2年生, ちちしぼりとお		
	いしゃさん,金の星社,1977		
J.H. Hicks	An old manuscript record	about ten mon-	the 17th of
	of Gloucestershire Medical	ths	December, 1789
	Society, 1790		

長男 が、 bibliography of Edward Jenner 1749—1823, 録の原文の追求を試みた。 よって、公式に記された最も確かな記録であると考え、 Edward に対する豚痘接種実験の、 れてある(一二九七頁)。この記録の原文こそ、Jenner の 豚痘と称する病気が、 七月二八日の Edward 以' 同医師会の Hicks Gloucester その患者材料を接種したことなどが紹介さ 人々の間に流行したことや、Jenner が 医師によって、 州医師会の例会の 記録の 要約である その結果、 最初の、 W.R. 一七八九年の末頃から LeFanu 著 1951 しかも医師会員に の一七頁 A その記 長 男

取した豚の飼育者の名まで記されている。後二者の伝記は、おの伝記も、豚に生じた豚痘と明記し、特に後者では、豚痘を採めとの本に記されているのに、Williams の伝記も、また Levine

そらく Baron 伝記から話を大きくしたものと考えら

Baron 伝記には、

この物語りの根拠は述べられてい

15

n

る。

このような伝記ものとは別に、

たまたま British Medical

の一二九六頁より

年不詳

poxという小題の論文のあることを見出した。それは、

scripts of Edward Jenner という項目があり、

その中に

manu-Swine-

Records of an old medical society: Some unpublished

Jenner Centenary Number 1896

Journal 8

との結論に達したので報告する。 書館を訪れ ことを見出 に、 るとともに、内容を検討した結果、Jenner が長男 Edward に接種した材料は、ヒトの小痘瘡材料とするのが妥当である この記 録が現在 同記録に接 私は同大学図書館に依頼し、その医師会の記録のコピーを入手するとともに、一九七八年十 London Othe Royal College of Physicians に存在することと、そこに至る経過などが記されている し、同時に関係資料も入手することができた。この記録を石井道子さんの協力のもとに完訳

内容から、この論文こそ Brit. Med. J. のいう記録そのものであることが確認できた。 提供者が Royal College of Physicians に遺贈されたとなっている。 十月に、Dr. Carter より Sir William Osler に売却され、 前述の ' London © The Royal College of Physicians Brit, Med. J. の Records of an old medical society というのは、Gloucester 州の医師会の記録であるが、 Birmingham の Dr. Alfred Henry Carter となっている。Le Fanu の 著書の一七頁に、この記録が一九 私が同大学図書館で手にした論文の表題や、記録者およびその さらに Sir Osler より一九二八年十月四日 London の の図書館蔵の Hicks 医師 の論文資料に 四年 資料

される。奇妙なことに、この内容は、一七八九年十一月後半の患者発生から始まり、一七九○年の十一月の患者のことま 論文の十一頁目が、上四行しか書かれておらず、十二頁から改めて一七九○年八月十日のでき事が記載されているので、 りであろうか。それにしては、一七九○年の暮から、翌年の七月二八日まで、間隔が開きすぎることになる。また、この でが記されている。 思われる。この論文は、 1790 と付箋が付したあるが、この字体は、本文の字体と異なるので、Hicks 医師以外の人が、後から付したものと 論文には、 この図書館の整理番号である RCP MS-736 が付されている。 左上欄に Paper by Dr. Hicks read July すなわち、付箋の日付より後のことまでが記されていることになる。付箋の日付は、 一七頁にわたって記されているが、終始、 筆跡は同一人、すなわち Hicks 医師の手書きと見な 一七九一年の誤

る表題に関して、前半、 日が水曜日であること、 それ以下の論文は、 七九〇年七月二八日 州 の医師会の例会は、 後で追加されたとも考えられる。事実 (水) に提出されたものであると見なすのが妥当であろう。 後半を問わず、終始一貫した内容となっている。 また、 六月、 別の資料から、この日に例会が行なわれていることが確認できたので、 七月、九月のそれぞれ、 Brit. Med. J. 第一、最後、 の Jenner Centenary Number 以よねむ、 第二水曜日となっており、 いずれにせよ、この論文は、 一七九〇年七月二八 少くとも、

## 一、Hicks 医師の論文の内容について

観察や、 局 文には、 の病気の診断名に関して、 である。 痘が登場するのである。 が診察した時、 appeared in several parts of Gloucestershire in the latter end of the year 1789" の人々の間に、 九年十一月後半、Gloucester 病院に、 Bisley 教区の Edward Wright なる患者が、 リウマチのため入院したこと、 この論文の表題は、 人体 そして、人々がこの病気を豚痘と呼んだ理由はもとより、終始豚に関する病気の話は、全く出てこない。この論 かの以、"……the disease was called by the common people the swine-pox." と述べている。 リルヤイ 類似の人の病気の症例報告(表二)と、 は、この論文を通じて、 多数の同様な患者が発生しているが、死亡者もなければ、特に医療を必要とする者もなかったことを述 痘瘡様の発疹を示しているのに驚いたこと、に始まっている。 の記録の内容をまとめると、 "Observations and Experiments made upon persons labouring under an eruptive fever, すなわち、人間の間の流行性の発疹性熱病に対して、一般の人々が、 痘瘡であるとするものもいたが、 この病気を豚痘と呼んでいる。 このいわゆる豚痘 およそ表四のようになる。 その病巣材料による人体接種実験例 そうでないとするものも多く、Hicks, Jenner を含めて、断定 この論文には、 問診により、 となっている。 (以下 "豚痘" とする) に (表三) 何人かの医師が出てくるが、 Wright H などが続くのであるが、 豚痘と呼んでいたというの 本文の冒頭は 彼の出 関する臨 初めて豚

表 2 Hicks 論文に記載された, Gloucester 州において出現した 豚痘と呼ばれる発疹性疾患の症例報告 (1789 年 11 月~1790 年 11 月)

症例番号	前病歷	前駆症状	発疹期の症状	潜伏期間		
1. E.W. 男, 37歳	豚痘(-)	軽度悪寒, 背痛, 頭痛, 悪心	痘瘡様(3日)*	4.0		
2. J.S.男		軽度悪寒, 頭痛, 背痛	痘瘡様(3日)	2週間		
3. G.H.男		軽度悪寒, 頭痛, 背痛, 悪心	痘瘡様(3日)	2週間		
4. J.M.男, 25歳	痘瘡(-), 水痘(-)	軽度悪寒, 頭痛, 背痛,四肢痛,悪心	痘瘡様(2日)	約3週間		
5. C.P.男, 18歳	痘瘡(-), 水痘(-)	軽度悪寒, 頭痛, 背痛,四肢痛,悪心	痘瘡様(2日)	約3週間		
6. G. L. 男, 53歳			痘瘡様	約3週間		
7. 少女		悪寒, 頭痛, 背痛, 四 肢痛, 悪心, 熱	痘瘡様(6日)			
8. M. 女, 30歳		悪寒,背痛,激しい頭痛	痘瘡様(3日)			
9. R. 女, 60歳		悪寒, 頭痛, 背痛, 四 肢痛	痘瘡様(3日)			
10. T.C.男	痘瘡(-), 発疹性熱病 (-)	悪寒,頭痛,背痛,四 肢痛,悪心	発疹(3日)			
11. M. C. 女, 16歳	痘瘡(-), 発疹性熱病 (-)	軽度頭痛, 背痛	発 疹(3日)			
12. C. 女,	痘瘡(-), 発疹性熱病 (-)	頭痛,背痛,四肢痛,熱	痘瘡様(2日)			

症例  $2 \sim 6$  は、症例 1 からの院内感染によると思われるもので、いずれも Gloucester 病院の入院患者である。

状は、 七日に、 なわち、 いては、 Edward(十ヵ月)と二人の少 決 行 女を選び、上述の患者材料を 医 ったのが Jenner である。 表三の三・四・五の三人に接種 ようにみえる。 の痘瘡様疾患であることに "豚痘"であるか、どうか 人の 、表二の七の少女の患者材料を、 師 3 2 か Jenner である。 かねた。そのうちの の受診に来た。 た ね 痘瘡によく似ていた。 T 医師にも見せたが、 意見は "豚痘" 人の少女が、 七八九年十二月十 る。 人体実験を行な 表四 L の流行地に 致している かい 彼は長男 彼女の症 一の第四 L Hicks 軽 す 項

<sup>\*</sup> 前駆症状の発現後発疹の出現までの日数。

表 3 Hicks 論文における人体接種実験例

1	被接種者症例番号	前病歷	接種材料	結	果	痘瘡材料 による攻 撃 実 験	結 果	実験した 医師名
	小児, 10歳 小児, 10歳	痘瘡(+) 痘瘡(+)	豚痘(#3)* 豚痘(#3)					Trye
3.	E. J. 男, 10ヵ月**	痘瘡(-), 水痘(-) 発疹性 熱病(-)	豚痘(#7)*	痘瘡	様+)	+数回	発疹(-)	
4.	若い女性	痘瘡(-), 水痘(-)	豚痘(#7)	痘瘡	様+)	+	発疹(-)	E. Jenner
5.	若い女性	痘瘡(-), 水痘(-)	豚痘(#7)	痘瘡	様+)	+	発疹(-)	
6.	E.W. 男, 37歳	豚痘(+)				+	発疹(-)	
7.	J.M.男, 25歳	豚痘(+)				+	発疹(-)	THERS
8.	少年	豚痘(+), 痘瘡(-)				+	発疹(-)	
9.		豚痘(+)				+	発疹(-)	Carter
10.		豚痘(+)				+	発疹(-)	Carter

<sup>\*</sup>この欄の()内の番号は、表2の患者症例番号を示す。

#### 表 4 "豚痘"の特徴

- 1. グロスター州の各地で人に流行性に起こった発疹性熱性疾患である。
- 2. 一般に痘瘡にかつてかかった人は"豚痘"にかかっていない。
- 3. 痘瘡にかかったことのある 2人に、"豚痘"材料の接種実験をしても発痘しなかった。
- 4. 痘瘡および"豚痘"にかかったことのない3人に"豚痘"材料を接種すると、いずれも発痘した。さらに彼らに痘瘡材料を接種したが発痘しなかった。
- 5. "豚痘"にかかったことのある5人に痘瘡材料を接種しても発痘しなかった。
- 6. 潜伏期は2週か3週以内。
- 7. 前駆症状は,一般に悪寒,頭痛,背痛,手足痛,悪心。
- 8. 前駆症状発現の日より,多くは3日後に発疹が出た。
- 9. 発疹の性状や進行は、一般に軽症の痘瘡様であった。
- 10. 一般に軽症なので、特に医療手当を必要としなかった。
- 11. 死亡例はなかった。

(82)

<sup>\*\*</sup> Edward Jenner の長男 Edward である。

Jennerも痘瘡とは言いかねている。 ずけるものである。 の年齢 触 のくだりは、 して、それがつかないことを確めている。 り水痘にもか んな発疹性の熱にもかかったことがないこと、二人の少女についても、 接種するのである。 が十ヵ月となっているが、 いない。 Jenner かったことがないことが述べられている。三人とも感染して、 Hicks この際、 自身の言葉の引用があり、 論文には、 彼らの既往歴は重要であるが、 Jenner の豚痘接種実験の日が 一七八九年十二月十七日であり、 この長男の生年月日が、 不思議なことに、 特に、 「豚痘材料を、二人の少女に接種した。」と述べている。 長男 Edward には、 彼自身では、 一七八九年一月二十四日 長男 Edward は、 長男 Edward 反覆して痘瘡材料を接種している。 痘瘡にかかったことがなく、彼らの記憶するかぎ 発病するが、 それまで痘瘡にも水痘にも、 (Baron 著の伝記など)とすれば、 へ"豚痘」を接種したことは、 治癒した後に、 その時の長男 Edward この時点では、 痘瘡材料を接種 Hicks また他 論文のこ うな

# 、Hicks 論文の"豚痘」が小痘瘡であるとする理由

は著しく低い)であると考える。 この論文で述べられている"豚痘」 以下、 その理由を述べる。 とは、 現代ウイルス学でいう小痘瘡(Alastrim ともいう。 軽症の痘瘡で、 死亡率

virus) 認 vaccinia virus と抗原的に、きわめて類似性の高い痘瘡の感染を予防することは考え難いし、そもそも、 ル められ ウサギ、 いずれも 0 理由は、ウイルス学的な根拠によるものである。現代ウイルス学でいう豚痘なる病気は、豚痘ウイルス 種痘に マウス、 ル内沈降反応で一部交叉が認められるのみである。swinepox virus Poxviridae(ポックスウイルス科) 用い られるワクシニアウイルス (Vaccinia virus) トリ、 ヒトなどに接種しても に属するウイルスであるが、 病巣を作らない。 の、 いずれかの感染によっておこる豚の発痘性の疾患で すなわち、 両者は、 swinepox virus 0 宿主域 中和試験や感染防御試験で交叉が は狭く、 から 感染したとしても、 ウマ、 人の間に伝染性 仔ウシ、 +

から virus, vaccinia virus のいずれの感染症であることも否定できる。 hybrid のようなものと 推定する考えもある。 そのようなウイルスが、一七八九年頃に、 豚の間に流行したとも考え難 ル ウ K イル 比がるようなものではないのである。 ス学の示すところでは、 仮りにそうとしても、 ス学の謎とされている。一九四八年までは、少くとも 0 本来の宿主も不明であり、 vaccinia virus が、人々の間に全身病として流行することは有り得ない。 両者には、 ウイルス学的性状に では、vaccinia 実験室内で偶然に得られた、 virus おいい vaccinia U cowpox H, の可能性はどうであろうか。vaccinia て、 明瞭な差異のあることが示されている。 たとえば cowpox virus A variola virus 同義語とされてきたが、(10) したがって、swinepox virus 0 由来は、 そもそも

載は、 た \* 記載した疾患と同様のものであると報告した。その後、 する報告であった。 記載されたのは、一九〇四年 W.E. de Korte によるもので、 おいては、 5 ている。 われる。 第三の理由は、 "豚痘" amaas と呼ばず、 すべて小痘瘡のそれであり、"豚痘" de Korte そもそも、 死亡率の高い場合が多いが、時として、死亡率の著しく低い場合のあることが、古くから気付かれていたと思 の流行以前にはない。すなわち、 からぬことである。 "豚痘" 間接的なものであるが、Jenner 自身も、後年、 以前にも、 次で 田. 小痘瘡が死亡率の低いことと、若干の臨床的な差異から、 二番目の報告者の記載した alastrim と呼び、この病原ウイルスも alastrim virus と呼ばれるに至 の臨床症状、 . Ribas 軽症痘瘡の報告がないわけではないが、私の知る限り、一七八九年の むしろ、 が、一九一〇年にブラジルで流行した alastrim と呼ばれる軽症痘瘡が、 臨床経過、 Hicks の個所に小痘瘡と書き換えると、全く矛盾なく受け入れられる。 初めて出くわした死亡者のない軽症の痘瘡様疾患に、Hicks 医師のこの記載こそ、 疫学および人体実験の結果に基づくものである。 類似の軽症痘瘡の報告は続くのであるが、なぜか人々はこの病気 南アフリカで流行した amaas と呼ばれる 痘瘡様疾患に関 あの時の"豚痘" 小痘瘡の最初の報告といえる。 従来の痘瘡(大痘瘡) が軽症 の痘瘡であったと考えていた と別個の疾患として Hicks すなわち、 医師達がとまど 医師 痘瘡の流行に 表 の記載し 四

(84)

死亡 年前に で る 思えるのである。 が行なった長男 Edward 論文の流行病を示すことは明らかである。しかも、 〇年十一月に至るものであるので、 七九八年の始めか、 辞があるが することになっている。」と述べている。 と考えている。」と結んでいる。しかも、 せられているが、 ことを裏付ける資料を見出したことである。Jenner の 流行の期間 Gloucester に住んでおり、 あったと考えていたことになる。 「例はほとんどなかった。云々」と述べ、その項の最後に、「私は、それ(この時の病気)を、 Gloucester 州のこの辺りの多くの町や村にわたって、 決 でも全く触れていない。 この病気が見られた)、この病気について、多数の観察をする機会をもった。 Hicks 医師は、それに関して、公表 最も有力な実験的根拠を示すと思われるのに奇妙なことに、Jennerは、その時の実験 (第二版と第三版の献辞は、 したがって、本の完成もこの頃と考えられる。 かねていたとしても、 その中に、 しかし、いずれにせよ、Jenner が一七八九年に長男 それ以前に書かれていると想像される。Hicks を含む三人に対する人体接種実験と、 Jenner は痘瘡について、 Jenner は、どうも長男 Edward への接種実験については、触れたがらないようにさえ Jenner 論文のいう約七年前の さらに、 "An Inquiry..." 国王宛になっている)、その後に、一七九八年六月二十一日 Gloucester 州 "An Inquiry..." その文に対する脚註を付して、「Bristol そこの病院の医師であったが(この地域における、 このことは、Jenner の書いた手紙の文から Jenner 自身の言葉によっても、 脚註で述べた内容も、全く Hicks 論文を裏付けるものである。Jenner 執筆の時点では、 通常の病型以外に、 有名な一七八九年の の初版には、 当時の出版に要する日数は、 痘瘡のある型が伝播した。その病気は、 その後の痘瘡攻撃実験こそ、この病気が、 論文の Gloucester 州の痘瘡の変型の流行とは、 Jenner 自身その時 Edward に接種した時点では、 最初に、 "豚痘" いくつかの病型があると述べ、 "An Inquiry..." Bath の記録が、 の私の友人 の友人の医師 測りかねるが、この原稿 の接種材料 最初の病気の発生後、 0 一七八九年の末から一七九 論文には、 Hicks 痘瘡の一変型 につ 軽症であったので、 C.H. Parry \ 医師は、 その 1 軽 7 次いで「約七 軽 まさに 症 症痘 間もなくそ から 瘡であ 85 )

Edward と長女 痘材料が入手できなかったので、 の記述の前に、 の返事の この疑問 接種をしているので、これこそ牛痘接種に対する Jenner の 分の息子(次男の Robert のことで"An Inquiry…"論文には、 性を疑うものが 裏付けられることになった。 は痘瘡にかかり得る状態のままであった。その後たまたま痘瘡患者に接触する機会があった。 牛痘種痘法が、必ずしも一般に容易に受け入れられたわけではないようである。いや、 を明らかにするため、 に痘瘡材料を接種したのは、"An Inquiry…"論文で述べているように、 手紙(一八一〇年十一月六日 Chellenham)の全文のあることを見出した(第二巻四七頁~四九頁)。 to inoculate for the cow-pox." あり、 次のような重要な一文が認められてある。"My two eldest children were inoculated 批判の声は尾を引くのであるが、その批判の一つとして、 始めに述べた John Baron Baron が Jenner に自分の息子に 痘瘡接種したいきさつを問合せ、 やむなく Cother つまり、この手紙の中で、はからずも Jenner は自分自身の言葉で、 医師に依頼して、直ちに痘瘡材料を接種した。」というのである。 著の Jenner 伝記によると、Jenner の 牛痘材料を接種したがつかなかったと述べられている。)には、 自信のないことを示すものであろう。」というのがあった。 「Jenner は牛痘接種法の発見後も、 牛痘材料がその時つかなかったので、 むしろ一部に、 "An Inquiry..." それに対する Jenner for the smallpox しかし、 それによると、 その時牛 その有効 論 文 自 0 86)

#### 考察と結

Catherine に対しても、

はっきりと痘瘡を接種したと述べているのである。

て、 りの ス学の知識で検討するかぎり、 英米のいくつかの伝記と、 その中に記されている Jenner による長男 Edward に対する接種材料も、 最初の根拠は、 おそらく Gloucester わが国の一伝記に見られた Jenner の長男 Edward に対する、 いわゆる豚痘と呼ぶ人の病気は、 州医師会の Hicks 論文によるものと考える。Hicks 小痘瘡 (alastrim ともいう) 小痘瘡材料に他ならない。 とみなすべきである。 いわゆる豚痘接種実験 論文の内容を、 Jenner 現代ウイル

載とみなすことができよう。 "An Inquiry..." 安全なことを確かめた上でというような道徳譚でないことは 確かである。 種した動機は何であろうか。 自ら自分の上の二人の子供 であると述べておけば、 を紹介しており、 れにせよ Jenner のない 痘瘡の軽症のものではないかとの 疑念を持っていたに違いない。 (variolation) 痘 者をあえて選んで、 瘡材料による接種実験を行って、いわゆる豚痘と痘瘡の関係を明らかにしようと、考えたのではあるまい 自身によっても裏付けされることになった。Jenner が長男 Edward に、 は、 論文の考察において、一七八九年頃 これが は 当時かなり広汎に行われていた時代であり、Jenner は、 わが子三人に痘瘡材料を接種すること (variolation) により、 伝記作家の誤解は免れ得たと思われる。 Hicks 論文の病気を指すことは明らかである。 死亡例のまだないこの病気の材料を接種することにより、 (長男 Edward と長女 Catherine) に痘瘡材料を接種したとの文を見出し、 ここで、Jenner が長男 Edward ら三人に対する接種実験を紹介し、これが 彼はこの時、 二人の若い女性にも同時に接種実験を行っており、 Gloucester 私は、さらに Baron 宛の Jenner 州に痘瘡の一変型としての軽症痘瘡 とすれば、 おそらく、 おそらく彼は、 わが子を含めて、 痘瘡材料接種により、 これこそ文献的な小痘瘡の最初 痘瘡を 予防したことになったのであ 感染の有無を調べ、 いわゆる豚痘といわれた材料を接 このいわゆる豚痘なる病気が 三人の痘瘡 まず自分の子に接種して、 の私信の中に、 私の推測は、 の流 痘瘡を予防する方法 軽 感染の成立し にか 行があっ 症の痘 かったこと かる 瘡 はから 材料 7 た

87)

#### 謝辞

る

医師会の記録の入手はできなかった。特に、同教授には、 激励の言葉を賜わった。 〈重な資料の入手に協力して戴いた。また、大阪大学名誉教授藤野恒三郎先生には、 大学医学部 深甚の謝意を表する次第である。 M.A. Epstein 1 教授、 および同図書館員 Jones 氏の誠意あるご協力なしには、 二度にわたって自ら車を駆って、 難解な手書きの英文古文書である Hicks 医師の 論文の完訳に協力して戴 終始この研究に深い関心を寄せられ Jenner ゆかりの地を案内して戴き、 最も重要な Gloucester 州

#### 文旗

- 1 加藤四郎 わが国における Jenner のわが子牛痘接種物語りの由来について。日本医史学会雑誌二六巻一号一~一〇頁一九八
- (2) Williams, Greer, Virus Hunters. Alfred A. Knopf, New York, 1959.
- 3 Levine, I.E. Edward Jenner. Conqueror of Smallpox, Blackie, London and Glasgow, 1962
- 4 滋 いじんものがたり、美しい話二年生、ちちしぼりとおいしゃさん、久保喬編 金の星社
- 5 Baron, John, The Life of Edward Jenner, M.D. Henry Colburn, London, 1838.
- 6 The British Medical Journal: Jenner Centenary Number. London, May 23,

88)

- 7 Le Fanu, W.R. A bio-bibliography of Edward Jenner 1749-1823. Harvey and Blythe, London, 1951.
- (∞) Lübke, A. Dtsch. Tierärztl. Wschr. 67, 113-118, 1960.
- (๑) Datt, N.S. J. Comp. Path. 74, 70-80, 1964.
- 10 Smadel, J.E. Smallpox and vaccinia, Viral and rickettsial infections of man. 314-332. Ed. T.M. Rivers, J.B. Lippincott, Philadelphia, London, Montreal, 1948
- 11 Kato, S., Hara, J., Ogawa, M., Miyamoto, H. and Kamahora, J. Inclusion markers of cowpox virus and alastrim virus. Biken J. 6, 233-235, 1963
- 12 Ikuta, K., Miyamoto, H. and Kato, S. Studies on the polypeptides of poxvirus I. Comparison of structural polypeptides in vaccinia, cowpox and Shope fibroma viruses. Biken J. 21, 51-61, 1978.
- 13 ptides in cells infected with vaccinia, cowpox and Shope fibroma viruses. Biken J. 21, 77-94, 1978 Ikuta, K., Miyamoto, H. and Kato, S. Studies on the polypeptides of poxvirus II. Comparison of virus-induced polype-
- 14 Ikuta, K., Miyamoto, H. and Kato, S. Comparative studies on LS antigens induced by vaccinia and cowpox viruses.

- (th) de Korte, W.E. Amaas, or Kaffir milk-pox. Lancet I, 1273-1276, 1904.
- (2) Ribas, Emilio, Rev. Med. Cir. S. Paulo, 13, 323, 1910.
- (E) Jenner, Edward, An Inquiry into the Causes and Effects of the Variolae Vaccinae, a Disease discoverd in some of the western counties of England, particulary Gloucestershire, and known by the name of The Cow Pox. London, 1798.

(大阪大学徴生物病研究所)

#### on the Story of Jenner's experiment on inoculation of his son with Swine pox matter

by

#### Shiro KATO

I found that Edward Jenner had inoculated his eldest son Edward with swine pox matter, before he began to inoculate people with cow pox matter, in biographies of Edward Jenner written by Greer Williams<sup>2</sup>), I.E. Levine<sup>3</sup>) and John Baron<sup>5</sup>), respectively. Furthermore, I also found that the Jenner Centenary Number of the British Medical Journal<sup>6</sup>) introduced an abstract of a curious story that Jenner inoculated his son Edward with swine pox matter that had been derived from a patient suffering from swine pox. This story I found in an old record of the Gloucestershire Medical Society. Thus, this old record seems to be the source of the swine pox story in the biographies of Jenner. Thanks to the great kindness and help of Professor M.A. Epstein and the librarian, Mr. B.P. Jones, of Bristol University Medical School, England, I obtained a copy

of a part of "A bio-bibliography of Edward Jenner 1749-1823" written by W.R. Le Fanu7), which revealed that the old record of the Gloucestershire Medical Society is now in the library of the Royal College of Physicians, London. There I found it and made a copy of it. The old record was hand-written by Dr. Hicks and was entitled "Observations and experiments upon persons labouring under an eruptive fever, which appeared in several parts of Gloucestershire in the latter end of the year 1789." Dr. Hicks wrote clinical records of several cases of a common eruptive fever which resembled small pox but which was not fatal. Curiously enough, the eruptive fever was called "swine pox" by medical men including Hicks and Jenner, probably partly because that was the name used by the country folk for this disease, and partly because these doctors were uncertain whether the disease was actually small pox or not. Dr. Hicks also reported the following clinical experiments: 1) Two children who had had small pox before, were inoculated with "swine pox" matter. No eruptions appeared on either of them. 2) Three people who had never had either small pox or chicken pox, were inoculated with "swine pox" matter. Eruptions similar to those of small pox appeared on three of them and then disappeared. Later these people were inoculated with true small-pox matter, but none of them developed small pox. Edward Jenner took charge of this 2nd experiment, and his eldest son Edward was one of the three recipients of "swine pox" matter. 3) Five people who had had "swine pox" were inoculated with true small pox matter, but no eruptions appeared on any of them.

From our current knowledge of virology, the human disease of generalized eruptions cannot have been swine pox, because swine pox is now known to be caused by either swine pox virus or vaccinia virus<sup>8</sup>), and neither of these viruses can cause epidemics of an eruptive disease in humans. Moreover swine pox virus is not effective as a vaccine against small pox in man, because the swine pox virus cannot infect humans, and the swine pox virus does no cross react with vaccinia virus in the neutralization test or in the protection test against vaccinia virus infection<sup>9</sup>). From these facts, I conclude that the eruptive

mortality, and quite different from swine pox. Thus the true story is that Jenner inoculated his eldest son Edward with alastrim matter, not swine pox matter.

fever described by Dr. Hicks must have been caused by variola minor (alastrim), which is a mild variety of variola with low

### 「千金方」 関する史的考察 と其の作者孫思邈に

趙 有 臣

と認 2 乃祖述農黄之旨……上極文字之初、 到底どの位の後の事であるか、 るようである。 は 新修本草』 0 『千金方』 められ 中から林氏等は 貞観」年間の後の使い方である。 武徳」「貞観」 宋代の林億等の『新校備急千金要方』の序言に「有唐真人孫思邈……当太宗治平之際、 る。 はもとより貞観年間の後の顕慶四年成立したのである。 は唐代の名医孫思邈の著書である。 説の二は この説 の年号はあるが、 『千金方』の成立は太宗貞観年間と認めている事が分かる。 は多くの人が合理的であると認める。 『千金方』の中に「貞観中」および「貞観年間」というような用語がある。 「永徽」年間か、「顕慶」 下迄有隋之世、 後の高宗の「永徽」「顕慶」等の年号はない。 例えば『新修本草』巻四 その成立年代は普通二つの説がある。 集諸家之所秘要、 年間 筆者もこの説を賛成する。 か 「雄黄」 或はこれよりもっと後であるかについて、 よって『千金方』 去衆説之所未至、 下の蘇敬の註語中に 今『千金方』を取り調べて見ると、 これを見れば林氏等の説 しかし「貞観以後」 \$ 成書 説の一 「貞観」 「貞観年中」 は 部 思所以佐廼后庇民之事 『貞 年間 総三十巻。」とある。 こんな用語は明ら (観) ののち成立したの の用語 末年成立し と言っても 根拠ある断定 は証 から ある、 中に たと あ

(92)

版 機会で蘇敬氏引用の『千金方』は確に孫思邈の『千金方』である事を発見した。 0 ٢ を下すにはまた困難である。幸いに『新修本草』は「烏芋」の条の蘇敬の註語に「千金方云、下石淋」という引用がある。 状態で人々は蘇敬氏引用する『千金方』は范世英『千金方』と認定するのも道理の当然であろう。 千金方』は今の孫思邈『千金方』では見当らない。その上に『隋書・経籍志』に范世英の三巻の『千金方』 の引用は真に『千金方』に合うなら、 『新校備急千金要方』には見当らない。 『千金方』の成立年代を断定するに非常に有用である。 であるから人々の疑問を惹起することも無理はない。 しかしこの引用は今の宋 即ち蘇敬氏の引用する 筆者は読書 から ある。 の偶然の

淋 即 もその中にある事を発見した。今次に対照して列出する。 ち『医心方』を読んだ時、 その第三十巻「食治」を論述する薬物中に八カ所 『千金方』 の引用 があり、 「烏芋、 下石

作麵、 りがあるだろう。 温無毒、 小麦「千金方云、 不能消熱上 作麵消熱止 正 煩、 旗、 不可多食、 不可多食、 長宿癖。」に当る。 長宿癖。」この条は『千金方』巻二十六「食治」中 字句の間に少し違う所があるが、 恐らく互に書き誤 0 日 3 93)

令人悪心。」に相当する 胡桃人「千金方云、 不可多食、 令人悪心。」今の『千金方』巻二十六「食治」中の曰く「胡桃…不可多食、 動痰飲

三、烏芋「千金方云、 下石淋。」これだけは今の 『千金方』では見当らな

是故能制毒散諸薬故也。」である。 も今の『千金方』巻二十六「食治」 四 鹿肉 「千金方云、 凡餌薬之人、 中の曰く「凡餌薬之人、不可食鹿肉、 不可食鹿肉、 服薬必不得力、 所以然者、 服薬必不得力、 鹿恒食解毒之草、 所以然者、 是故能散諸薬也。」 以鹿常食解毒之草、

人少子精、発宿病。」である。 Ŧī. 猪肉 「千金方云、 不可久食、 令人少精、 発宿病。」これも同上「食治」中に見える。 曰く「凡猪肉…不可久食、

令

字句も同じ、 葵菜 「千金方云、 只「十日」の上に 十日一食葵、 「毎」 葵滑、 の字がある。 所以通五蔵擁気。」この条は今の『千金方』巻二十七「道林養性」 に見える。

「千金方云、 黄帝曰蓼食過多有毒、 発心痛」 この条も 『千金方』巻二十六「食治」 の中にある。 字句も 『医心

と同じ。只「面色無」は 葫 「千金方云、 多食生葫行房、 「面無色」とする。 傷肝気、 令人面色無。」これも同上「食治」中に見える。 字句も『医心方』 引 < 0

は、 ると確認する事が出 でなければならない。若しそれは外の『千金方』なら、『医心方』の作者丹波康頼氏は必ず区別して標出するのであろう。 よって『新修本草』 して決して混乱はな 経』と名付ける書物を引用した。 5 馬琬云」、 た一条は今の『千金方』では見付からないでも、 以上の様に『医心方』 凡そ同名の書を引く時には 『七巻食経』は「七巻経云」とある。『盧宗食経』はそのまま「盧宗食経云」と標題するように、 田来る 中蘇敬の註 いい だから上述「烏芋」条の引用が今の『千金方』に見当らないでも、 巻三十の中に八カ所 語 必ず別の用語を使って 混乱させないようにする。 例えば その第三十巻の中に数種の で引用した 即ち『崔禹錫食経』は「崔禹錫云」、『朱思簡食経』は「朱思簡云」、 「鳥芋、千金方云、下石淋」 『千金方』を引用しているが、その七ヵ所は孫思邈の『千金方』と合う。 外の『千金方』を指すはずはないと思う。 の論述は即ち孫思邈『千金方』の固 孫思邈『千金方』 況んや『医心方』の 『馬琬食経 の固 有内容であ 全て 区別 『食 体 残

前の宋初刻本『千金方』を架蔵していた。 校正する時、 『千金方』と対照すると、 然らば現存 の宋版 数多くの改訂があったからであろう。 『新校備 直ぐに多くの削除と増加があることを発見する。 急千金要方』ではどうしてこの条文はないのであろうか、 これについて陸氏はその『儀顧堂題跋』の中に 日本に伝っている『真本千金方』巻第一の一巻だけをもって今の宋版 また、清代の陸心源氏は嘗って林億等校 蓋し『千金方』は宋代の林億等が 「校以日本覆宋治平本、 不但編 正以

「烏芋、 次先後逈然不同、 以上により、 公私旧本、 洵為孫真人之真本、 下石淋。」の記載がないのは奇怪とはいえないであろう。 現存の『新校備急千金要方』は 孫思邈の 原書と相違があるのは意外ではない。 捜訪幾遍、 即字句方薬、 得以正其訛謬、 非林億既校以後刊本所可同日而語 幾于篇鮮同章、字尠同句、唯与『治平本校勘記』所称唐本 補其遺佚、文之重複者削之、事之不倫者緝之……方雖是旧、 也。」という。 更に林億等 0 (按ずるに『真本千金方』 『新校備急千金要方』 だから今の『千金方』中 用之維新。」という。

年 だ ~六五五)でなければならない。 議を提出してから人員を徴集して書き始め、顕慶四年 から孫思邈『千金方』は決して引用された二、三年前の顕慶年間に成立したのではなく、 它 種の書物として引用するには、 ...おいては既に数年間世の中で流布されて、人々がよく熟知したものでなければ引用書として用いられない筈である。 千金方』を引用したことから、 且 一『新修本草』が孫思邈の『千金方』を引用した事を確認した上で、『新修本草』が その書物は必らず人達が熟知の者でなければならない。 孫思邈の『千金方』は顕慶四年以前に成立したことが明らかである。 (六五九)正月十七日撰成したものであることと、この書中に孫思 即 顕慶二年 顕慶以前の永徽年間 ち孫氏の『千金方』 (六五七) 蘇敬氏が倡 進んで言えば 顕慶四

ず、 千金前方時、 言 は三十年間とするのは、 『千金翼方』は孫思邈の絶筆著書である事は既に周知の事である。但し『千金翼方』は決して孫氏卒年の永淳元年(六八 に始めて成立したのではないと思う。 故 宋の葉夢得 れについては後文でまた論述する。 不敢深論 已百余歳。」は『旧唐書』孫思邈伝の部分材料を根拠としていても、史実に合わないから、信ずることはでき 『避暑録話』に 後三十年作千金翼、 私は必らず文献的に根拠があったと思う。只これに関する文献は今すでに佚失したのであろう。 「思邈作千金前方時、 論傷寒者居半、 ここでは先ず葉夢得氏は『千金方』と『千金翼方』両書の成立年分のへだたり 蓋しこの書の巻前に孫思邈が『千金翼方』三十巻書き上げた序言がある。 盖始得之、 已百余歳、 其用心精審不苟如此。」とある。 固已妙尽古今方書之要、 独傷寒未之及、 この中でいう 似未通仲景之 「思邈作 これ

50 成立年となる。 から見ると孫氏は『千金翼方』を作り上げた時は、健康である。 六八一年から三十年前へ戻ると永徽二年 は出出 来 なかっただろう。 だから『千金翼方』 (六五一) の成立は になり。 永淳元年の前の開耀 上述葉夢得氏の説に従えば、 永淳元年は思邈の卒年であるから、 元年 (六八一) この年は即ち を 老人病でゆったり著 定めるのが 『千金方』 0

十七日までは已に八年間経つ。 の人達に周知され て引用される事が出来たのであろう。 私はこの説 は史実によく合うと思う。 ないと思う。 印刷術のない唐代初期は『千金方』のような名著でもこれ位の流布期間を掛けないと多く 『千金方』 何となれば、 は既に世の中で八年間流行したから『新修本草』に初めて一 永徽二年 (六五二) から『新修本草』撰成の顕慶四 種の公認の書物と 年 (六五

。根拠がある。 『千金方』の書き初めは、 私はやはり貞観二十年(六四六) 前後でなければならないと思う。 これで見れば林億等の説

\_

歳 経験があるはずである。 しかしこれは史実に徴する所がない。 以前で已に成年となっている。 思邈以王室多故、 その次は孫思邈の年齢に関する事である。『旧唐書・孫思邈伝』に両種の説を載せている。その一は「周宣帝時 の年号だけあり、その前の「開皇」(五八一~六〇〇)「仁寿」(六〇一~六〇四)の両年号は触れていない。 位から始めている。 乃隠居太白山、隋文帝輔政(五八一)徵為国子博士、 しかし『千金方』 若しこれが確実ならば思邈は『千金方』を撰写する時、 若し思邈は隋代の前で既に成人になったいたなら、 即ち『千金方』で言えば、思邈『千金方』の序言によると、彼の医学の研究は十五 の中では思邈が自分の経験を紹介する時に、 称疾不起。」という。 隋代の初年には必らず多少の医学 隋代では唯 素より百歳以上の人であっ これによれば、 「大業」(六〇五~六 思邈は隋代 (五七九) これ

な は屹度思邈はその時にまだ幼学の年であったからである。故に隋代以前で思邈は既に成年となった説は信ずることはでき 葉夢得氏がそれによって 「思邈作千金前方時、 年已百余歳。」と断定するのは好奇心から生じた誤りである。

誤りであろう。 孫思邈の生まれた年である。しかしこれによれば思邈の生年は辛丑歳であり、 ある。 成する。 説の二は盧照鄰氏記録の「癸酉之歳 これに対して『四庫全書提要』は「照鄰乃思邈之弟子、 したがって咸亨四年(六七三) 永淳元年(六八二)に歿し、 これも『四庫全書提要』の説で、 年齢は百二歳である。 から前へ九十三年を戻ると、 (咸亨四年・西紀六七三) ……思邈自云、 正確で信ずべきである。 これを孫思邈の実存年齢と信じる。 記其師言、必不妄。」といっている。 丁度開皇元年辛丑歳(五八一)である。この 以上で見れば、 開皇辛酉歲生、 『旧唐書』が「辛酉歳」とするのは伝写の 孫思邈は開皇 至今年九十三矣。」 私も頗るこの 元年(五八一) 年 0 は即 説 に賛 K 5 で

#### =

7 は 旧 同旧 唐書・ 唐書 孫思邈伝』によれば孫氏は唐に入ってから曽って二回当時の首都長安まで招かれている。 K は何も述べられていないが、 但し私は両回とも目的と理由を考察する事が出来ると思う。 招かれた理由 K 0

見して「将授以爵位、 邈が漢陽王の水腫を治療する事、 ていた時であろう。その時間は恐らく貞観八~九年(六三四~六三五)頃である。『千金方』巻二十一に掲載する貞観九年思 れた事を言う。 孫思邈伝』 太宗の時に招 正月二十日までである。 かれ 『唐会要・巻六十三』によると太宗時代に 一初魏徵等受詔、 たのは、 固辞不受」に至っては、 朝廷は周隋等五代史を撰修する為、 即ちこの度孫氏が長安に来た時の治療であろう。 修齐梁陳周隋五代史、 よって思邈が招かれてきた時期は恐らく撰修の大体ができて、 即ち五朝史を撰成した後に思邈の功績を褒賞する時の事で、 恐有遺漏、 周隋等五代史を撰修したのは貞観三年 孫思邈に或方面の史実を尋ねるためである。 屢訪之、 思邈口以伝授、 『旧唐書』本伝に所謂太宗が思邈を召 有如目 (六二九) なお幾多の疑問を残 観 は即 盖し貞観十年 から貞観十年 ちと 旧 0 時 かい

廃府、 ある。 思邈至、 実は孫思邈は顕慶三年 顕慶三年詔徵太白山隠士孫思邈、 居于鄱陽公主廃府」とある。 目に招かれたの は 同旧 (六五八)に 長安まで 店書』 また『太平広記』巻二一八『譚賓録』を引用して曰く「 本伝によれば 亦居此府」とある。 招かれていた。 顕慶四年である。 これ等の記事で孫思邈は確に顕慶三年に長安まで招かれてい 『唐会要・巻八十二』 但しこれはただ高宗の 心 「顕慶三年、 照鄰寓于於京都鄱 召見を指 詔徵太白山 て言 ったも 0

た事が分かる。

修撰は 廷が 宗は召見して「諫議大夫」という官職を授けようとした。しかし孫氏はまた固く辞して受けなかった。 で十五年留居して在職した。 の志に合わないからであろう。 のは屹度その仕事に参加させる為に違いない。 尚薬局」に勤務している。 れは何の理由 『新修本草』を撰修する為、 頭 慶二年から着手して顕慶四年正月に完成した。 「で孫氏を詔徴したのであろうか。 上元元年 (六七四) 『太平広記』も『譚賓録』を引用して同じように言っている。 但し『唐会要』巻八十二によれば、 孫氏に医薬経験の聴取と質問点を問う為と考える。 故に顕慶四年『新修本草』が完成した後、 に始めて老衰で辞表を提出して郷里に帰り、 文献には掲載していないが、 顕慶三年はまさに撰修の繁忙時期である。 孫氏は顕慶四年に「承務郎」という官職を授けられ 私はその時孫氏 上文で述べたように 孫思邈の功績を褒める為に、 思邈はこの承務郎の職で長安 その後、 な招い この時に孫氏を招 これは恐らく孫氏 た理 八年間経 『新修本草 由 はは、 って歿し 即 5 朝

#### むすび

いる

認した。 新修本草の成立は孫思邈『千金方』 文は顕慶四年 (六五九) 成立の 『新修本草』に引用する所の の成立との隔たる期間は僅か数年間の事であるから、 『千金方』 は即ち孫思邈の『千金方』である事を確 故にこの確認は 『千金

方 であると推定した。 の成立絶対年代の確定に対しては非常に有用である。 本文はこれに従って『千金方』 の成立年代は永徽 车 (六五二)

- 方 别 よったものである。 0 中の年号を引用して検討を加え、 説 孫思邈は開皇元年 の説を確認した。 に対して 弁駁の理 これは既に多くの人が認めているが、 (五八一) に生まれ、 由が不足の為、 孫思邈は隋代以前に成年であったとの説を徹底的に否定した。そして更に また孫思邈は 永淳元年 (六八二) 隋代以前既に成年であった説を信ずる人がある。 然し『旧唐書』に掲載する孫思邈は隋代以前既に成年であっ に歿した、 となっているが、 これは 『四庫全書 本文は 提 要。 四 全 た K
- 本草』を編修する為である。 をした。考察の結果は、 及び関係ある文献によって考察して提出し、 本 文は孫思邈は曽って二回当時の首都長安まで招かれて、 太宗時に長安まで招かれたのは五朝史を編修する為であり、 この二つの重要歴史事実は現存の歴史書や書籍にはどれにも書いてないので、 以って御参考に供する。 また召見されているが、 高宗時に長安に招かれたのは その原因に対して文献的 こことに 二日 考察 新 99 ) (
- 思邈 は 述 載 歴 の文献を見なかっ L 太平広記』 なか はその 史唯物論に合わないと思う。 思邈 5 た 時 0 官職にないなら、 に皆掲載がある。 は みである。 顕慶四年 たためなのか、 (六五九) 今の医学史に関する書物がどれも孫思邈が曽 何故 -旧 から上元元年 II唐書』 或は何かを回避して故意に言わなかったの 「辞疾請帰」を要するのか、 では明確な記載はないけれども「上元元年、 (六七四) まで曽って 明らかに官職にあったためである。 承務郎という 官職に任じた事 って承務郎に任職した事に触 か。 私は歴 辞疾請帰」 史の事実を回避して言わない の記載がある。 只官職名を明 は n 7 い な 唐会要』 0 若し 確 及び K Ŀ 記 0

(中国 遼寧中医学院)

## 阿波漢方受難

井上肇堂とその時代

福 島

義

#### は ľ 8 K

案がわずか二十七票の差をもって否決せられ、 る 治医制 [明治七年(一八七四)] 示達にはじまり、 以後漢方を医師開業試験科目に加えることは否決せられて現在にい 明治二十八年第八帝国議会(一 八九五) にお 1, て、 医師 免許 規則 た って 改正

古屋 わ この明治前期二十年ほどの期間に、 一の愛知博愛社以外は、その興亡史を深く探査した業績は認められないようである。 方言 明治医学史においては、 この漢方医存続運動展開 漢方医たちが興した漢方医存続運動の歴史は、 の歴史は、 重要な史域であるにも 実に かかわらず、 種の受難史とも考えられ 東京の温知社・名

庵 阴 (一八一四~一八九〇)が述べた祝辞の中に 5治十六年(一八八三)三月東京日本橋区本町一(注(1):(2) 丁目 (当時) に開設せられた温知社温知医黌開講式にあたって、 今村了

と説くところの阿波の済生に就いても、 愛 前略、 越後の小 継いで起る者に如春来蘇好生あり、之を府下に建てた。 小如春、 加賀の集聖及び小博済、 よく判っていなかった。このたび、注(3)・(10) 陸奥の天真、 陸続饗応駸 其他、 浪華の広済、 マ乎として再興 肥後の春雨、 の勢あ り 以下 阿波の済生、 略 尾張の 博

四国における漢方医存続運動史料を調

(100)

徳島県における漢方受難史の大要を述べる。 係史料が子孫井上家 元阿波藩医井上肇堂(一八〇四~一八八一)こそこの (徳島市幸町三丁目井上千歳氏) K 運動の中心人物であったことが判り、 保存されていることが判明したので、 幸い戦災をまぬがれて多数の関 是等の史料によって主として

## 二、井上肇堂略伝

肇堂は、文化元年(一八〇四、注(4)・(8)・(9) る名家である。 DU 1国八十八ヶ所第五番札所羅漢地蔵寺の近郊にあたり、 生月日不詳 徳島県板野郡板野町字矢武鏡松 井上家は十八世紀初頭の頃から十四代にわたって医業を嗣 (当時、 松坂村大字矢武) に生れた。 この地 は

肇堂は第九代医師井上周伯 (天保十三年没) の長男として生れたが、幼名は虎源太、後に春瑞と称したが、 後年郷医 かい

ら藩医に登用せられた以後は肇堂と称した。

家には青洲の肖像画とその遺墨が保存されているが、学成って師門を去るにあたって記念として青洲から贈られたもので家には青洲の肖像画とその遺墨が保存されているが、学成って師門を去るにあたって記念として青洲から贈られたもので 3 板野郡籃住町勝瑞の 医家橋春庵(一七七六~一八四七、元景・遊仙とも称した、京都の儒医橋南谿の門人)に 入門して 医学を修 あろう。 やがて彼の夢が実現して華岡青洲に入門したのは文政六年(一八二三)三月二十一日と門人録に記載されている。 少年時代漢学を徳島城下で家塾をひらいていた鈌 更らに、 青年に達した虎源太は当時天下に名声を博していた紀州の華岡外科、 復堂(一七七七~一八四三、古賀精里の門人)に就いて学び、 京都の賀川産科の修学を熱望した。 更らに、

更らに、 京都にいたって賀川家高弟奥 劣斎(一七八〇~一八三五)に入門して産科を学んで帰郷した。

学における親試実験的思索法とか医師に必要な高遠な倫理観を植えられたことは、彼の人生にとって最大の収穫であった 一堂が藩外遊学した期間は長くなかったようであるが、 橋春庵の儒教的医育をうけた上に、 更らに、 青洲や劣斎から医

ものと考えられる。

退職 から 的とした漢方専門医学校 非凡とによって藩医に登用せられた。戊辰戦争に参加し、 なくその名声藩内外に知られ、門弟も百名に達したという。 阿波漢方受難の医人は世を去った、享年七十八。 **肇堂が学成って帰郷して、父のあとを嗣いで生地矢武で開業したのは天保の初め、** 未刊本であっが、 洋医に転向した藩医たちに対抗して、漢方医学の振興と漢方医存続運動のために晩年を送った。 写本として藩内でひろく流布した。 (仮称) 開設の夢は実現することなく、 帰藩後藩医学校教授に任ぜられたが、 文久元年(一八六一) この頃、 明治十四年(一八八一)四月二十三日不満を抱きながらこ 門弟に対して教程録として「少徴新説注(子) 五十八歳の頃、 彼三十歳前後の頃と思われる。 後述の理由 その医 術 **肇堂が終生の目** の優秀と徳 によってすぐ を著わ 間も した 行

を開設した。近代日本眼科学の開拓者として知られる。明治二十八年七月十日落馬事故によって没、 四男井上達也は大学東校を卒業して後に眼科学を専攻し、 肇堂の二男井上源貞は大学東校に学んで十一代医家を嗣ぎ、 医学部別課教授嘱託 (明治十四年)となって 眼科学を教授し、 東京医学校眼科掛 阿波医師組合会頭となり、 明治十五年退官して東京都駿河台に済明堂眼 (明治九年)、 明治二十一年没している。 医学部別課生教授兼勤 享年四十八。

## 一、阿波漢方医存続運動史

らに、 を与えて医師学問所を開設して医育をはじめた。 阿波 天保十四年 (一八四三) (徳島) 藩では、 寛政七年 (一七九五) 城下街塀裏丁 京都から小原春造(一七六二~一八二二) (徳島市幸町三丁目)に新築移転した。 この施設は、 文化四年(一八〇七)安宅町天文台構地付近に移転 を招いて 徳島市沖洲町舟戸 戸南に宅地 更

登用して藩首脳に当時の海外事情を解説せしめ、 九世紀中葉頃までの本藩医育は 漢方のみであったが、 更らに、 安政五年 嘉永五年 (一八五八) にいたって 彼を医師学問所洋学教授肝煎 (一八五二) 高畠耕斎 (一八一三~一八五九) を藩医

に任用した。 ども含まれている。 教授となったが、 主として医学 応元年(一八六五)には徳島市寺島に洋学校、 この頃から藩医育は漢方・洋方二系統に分れて行われるようになった。更らに、 (西洋医学)、 その中には枢密顧問官となった芳川顕正 語学 (蘭語・英語)を修得する目的を以て長崎に留学せしめた。 明治三年(一八七〇)洋学伝習所を開設した。 (旧姓高橋)、 日本薬学の開祖となった東大名誉教授長井長義な 彼等の多くは帰藩後、 また、 藩は洋学採用をすすめ、慶 藩内秀才を選抜して、 藩学校の

藩制末期には、 藩首脳は漢方・洋方両医家の協調を説いたようである。 例えば

御改革思召御書付之揮写(森敬介氏旧蔵文書)には、

医師之儀は漢蘭両流各学所に僻し薬製療方の実験を措置私見を主張いたし候事無用之事と可申候以来蘭書は漢医之方 をも斟酌し漢医も西洋之薬製療法も修行有之度事

とある。

九一三)であるが、特に寛斎 この頃 西洋医学を修めて藩医に採用せられて活躍した人物は、 (明治三年寛ゆたかと改名)は戊辰戦争で武勲を立て、帰藩後は藩首脳に重用せられ、 井出三洋(一八三三~一九〇七)と関寛斎(一八三〇~

校(巽浜医学校)の創設を命ぜられ藩洋方医として活躍した。

学校職員録には記載せられていない。 ることを拒否したのが事実であった。 たのは洋医のみで、 藩は論功行賞の意味において、戊辰戦争に出征した殆んどすべての藩医を医学校教授に任命したが、実際医育に関係し 大部分の漢医はすぐに退職した。 他藩出身の若い洋医寛斎が実際上の校長兼病院長であった医学校に対しては協力す 井上肇堂も医学校教授に任命された記録 (井上家規) はあるが 医

上の理由として、 「時藩の漢方医学頭は多賀荘順で、 漢洋両医は、はげしく対立し、阿波藩の医界は分裂していた。藩医、 司療洋方医学頭は武田玄礼であったが、医学校の運営と教授選任の不満 町医、 郷医を通じて、漢医は絶対

視の施策をすすめて行った。 多数を占め ってい たが、 洋医は明治新政府の示達によって、 次第に医制上重要な職務に就任し、 支配的権力を強め、 漢方無

た。 のような洋医養成の失敗をひそかに微笑みを以てみていたようである。 医学校教授兼治療所長関寛斎は、 その後、 学制改革によって医学校は殆んど成果をあげることなく明治五年(一八七二) 藩庁に対して批難される 行動があったので、 自らその職をしりぞき 徳島の地を去っ 廃校となった。 漢医側は、 ح

~一八八八)を開設するにいたった。 ることに成功し、 置されるとその御用掛となり、更らに、 医生講習所 洋医に転じた 元医学校教授藤本文策 (一八三九~一八九四) 明治十三年(一八八〇)三浦医学士を校長として 徳島県立徳島医学校 高知県立徳島病院を開設して、 医務取締に就任し、 その院長に日本最初の医学士三浦浩一(一八四九~一九三四) 医学校廃止後の洋医養成を目的として好生社 は、 明治六年 (一八七三) 〇乙種、 後に甲種、 徳島県に 存続期間一八八〇 医 師総轄 (はじめ好生義 を招聘す 所が設

この頃の本県漢洋両派医師の割合をみると次のようであった。

明治十四年 漢医三九二名、洋医七五名。明治十三年 漢医四〇八名、洋医七五名。

#### (県統計資料)

を後輩興津にゆずって医職を離れて政治家に転向し、 代県属衛生課長に就任して、 絶近きことを高言する有様であった。明治十三年(一八八〇)県に 期本県厚生行政の主体は伝染病(主として、痘瘡、コレラ、赤痢) 藤本文策らは洋医の養成を急いだが、県下医師の分布は右の状態で、県民医療の実際は漢方であった。しかし、 その後長く本県厚生行政に尽力した。 名東勝浦郡長、 0 藤本文策は念願の医学校開設の目的を達し、 衛生課が設置され 撲滅、 蜂須家々令など歴任して東京で没した。 予防対策に在ったので、 興津春機 (一八四三~一九〇二) 文策は漢方医 医務行政 明治前 療の廃

浅井国幹 東京に で、 学校開設近きことに刺戟せられて、 はじめ、 実に二十有余年の長きにわたって漢方医存続運動に献身した。 お いては温知社の創立 (一八四八~一九〇三) 明 治医 制 の影響に就いては、 (初代社長山田業広)、 が興した愛知博愛社で、 いよいよ 余り関心を抱かなかった漢方医たちも、 漢方医廃絶近しとの危惧を自覚するようになった。 つづいて各地に分社設置運動が興った。 後に彼は温知社々長に就任して 議会請願団体帝国医会の 解散ま 西洋医学に拠る厚生行政の強化と県立医 その代表的なものは名古屋に 明治十二年 (一八七九)

展開 徳島 の井 上肇堂は温知社創立に刺戟を受け、 愛知博愛社々長浅井国幹の指導をうけて、 四国における漢方医存続運動を

方医療の普及と研 等が医長格として活躍したもので、 える」 職業集団を興し、 円を寄付し、 (徳島市元町付近) 目 下明確 に開設した。この漢方専門診療機関は井上肇堂が院長、 な史料を見出し得ないが、 書籍機械類を無償で貸与し、更らに、 これを済生舎、 修を目的として、 説には徳島市藍場町というが、 後に済生社と名づけ、 次ぎのような内則によって運営せられた。 済生社々員合資 恐らく、 明治十一、 一ケ年間無給で奉仕したという によって 私立徳島済生医院 此処は病院開設以前の済生社事務所の在ったところではな 自らその社長に就任した。 二年頃から県下在住四百名に近い漢方医家を集結して漢方医 筒井珉岱が副院長、 なお、 (時に、 そ (井上家規)。 明治十三年(一八七九)一月十八 本院開設にあたって、 0 他寺沢道栄、 病院とも称した)を徳島市 近藤康斎、 肇堂は 馬 かと考 金 島 西 [横町 日 春 二百

資料1

徳島私立漢法済生病院内則

第壱条

病 ス 院 1 モ入社ハ許サズ正義改心スル 庶人保護 ノ為 創立 1 及 ル トキハ事情ヲ熟視シ入社ヲ許スモ苦シカラズ ナ IJ 無学ニテ薬方妄投シ言辞巧飾ヲ以 テ愚民ヲ欺クモ ノハ生民ニ害アル ヲ以テ懇願

ス

資本金ハ入社金壱株ヲ壱円ト定メ而シテ壱株壱円ヲ出スモノハー ケ月拾銭ヲ以テ醵金トシ各月廿日ニ収納スルモ ノト

但在住医ノ如キハ五月、十一月ニ半年宛ノ金ヲ収ムベシ

第三条

、診察時間ハ毎日午前八時ヨリ十二時マデトス

但急症ハ此限ニアラズ

第四条

院長講義ハ各月三八ノ日ト定メ此日ヲ以テ社員総出頭トス

第五条

講究ノ書ハ傷寒卒病金匱要略素問霊枢ヲ以テ其他泰西医書等通読ノ義 ハ適宜 及 ル ~ 2

第六条

担当外診へ此例ニアラズ

第七条

薬価ハ煎薬一貼壱銭五厘丸薬散薬膏薬ノ類各壱銭五厘宛トス

第八条

純益金ノ内、 凡ソ二分程院中へ備置キ予備トシ残リ八分ヲ以テ株敷ノ多寡ニ応ジ六月、 十二月二期ニ分賦ス可

第九条

一、凡入社スルモノハ社中約定書ニ連印致スベキ事

第十条

凡入社ノ輩ハ六ヶ月ョー期ト定メ其期中死亡破産 ノ外ハ退社ヲ許サズ仮令ヒ一月、 六月退社申出ル ト雖モ期月六 二月月

非ラザレバ入社金ハ割戻サザル可シ

第十一条

、期日以前退社申出ルモノハ純益金ハ賦算セザルベシ

第十二条

、医員毎日総出頭一日ニー名宛休暇スベシ

第十三条

若シ事故アッテ解社 スル 1 キハ 現在社有ノ金員並ニ器械等売却 ノ上該金員ヲ以テ入社金員ノ多寡ニ応ジ割戻スベシ

右之条件確守致スベキ事

明治十三年庚辰一月

漢法済生病院

(原文のまま転載)

この病院は肇堂の指導経営の妙を得て、 患者謂集し、 漢方修学の医学生も多く参集したが、 明治十三年九月五日次ぎの

勧告書を県下漢方医たちに発送した。

資料2

市ヲ成シ以テ治療頗ル隆盛旺昌ナルニ至ルハ乃チ我徒同志者ノ奮励勉強ノ労力ニ因ルモノナレドモ抑モ亦斯道ノ未ダ地 本年一月十八 日ヲ以管庁 ノ許可ヲ得テ本社ヲ開設 セシャ爾来日尚浅シト雖モ診ヲ仰ギ薬ヲ乞フ者常ニ絡繹トシテ恰モ門前

教育 徒 諸 7 生 7 墜 教 州 12 翁 制 釣 チ 育 度ニ 幸 # 1) 延上 謀 同 E 福 或 ル 一適合 事 志 リ之レ ヲ 者 テ斯 ラズ。 7 保 治 政 1 七 全 班 療 道ヲ 府 ヲ +15 セ ヲ 政府 由 盛 力 12 1 看 之治 願 2 保 ヲ 1 大 12 請 温 以 存 欲 = スル 歎願哀 知 セ 療 テ ス 1 足 1 会ヲ ヲ盛 猥リ ル テ V 1 コ = 而 IJ 欲 建 1 大 7 贵二 訴 = シ 設 之レ ス ヲ セ IJ テ 得 12 2 1 1 1 徒 喜バ テ其 h ノ旨ヲ以会員ニ N 且 ヲ 雖 授業ス 独 = 草 ス。 モ、 シ 至ルベ 治 カラ IJ 根 患者 術 奈何 翁 木皮 ヲ討 3 12 ズ 1 IJ ヲ販 す。 1 コ セ 111 論淬磨 ノ云 E 1 1 列スベ 現今生 ナ 近来我 然リ 能 売 ラ 大 ス ズ ヲ 1 ズ ル 而 報ゼ 丰 或 上下 徒ヲ 実 徒 ノ意 我 ノ云 徒 1 ラレ 教育 往 其 開 同 = X 般 遺 1 業施 アラ 志者 等 全 憾 且. = ス 彼此 玉 翁 其 ル 衛 ズ。 実益ア 懐 自ラ率先シ 協 ヲ得ザレ ス 同 素ト生 川 心戮 抱 12 嚀 志輩 コ ス ノ皷舞奨励 ル ル 力 1 ヲ コ F. ヲ 徒 ヲ 義募シ テ h 111 得 以 七 府下其 教育 ヲ 素 也。 12 此 熟 モ、 社 日 該 於是過 知 IJ 1 IJ 他 斯 生徒教育 以テ セ 開 会員数百名 尾張、 道 及 シ 設 IJ ラ俄 4 般 斯 ス 丰。 東 V ル 道 京府 1 然廃 上二 ラ永久 加 + 故二 賀 則 敢 連署ヲ 博済 至テ 自 絶 テ 本 スル 越 然 社 中 保 ハ則 病 時 以 4: ノ栄誉 テ生 肥 制 今日 IJ 徒 長浅 1 E (108)

乃チ 荷モ 之レ 於テ 同 将 抑 業 今般諸 志気ア 其隆替 E 7 其 我 諸 挽 羽 同 彦 檄 業者 彦 12 盛 1 ス 者 ヲ 12 衰 共 響 招集会 ノ無気 ヲ 応 斯 得 12 該 セ 道 # 1 会二 1 無 同 1 七 ル 1 力 衰運 2 1 加 ス テ親 7  $\exists$ 入 V 2 シ ラ 1) 1. 一属ス テ ズ。 2 世 第 E 豈 ク之レ 間 社 = 12 4 員 或 慨歎 走授 日 僅少 通 ヲ = 其 情 当リ 協 衰 且. 業ヲ始 ニシ ナ 替 痛 議 V 孰 テ抑 恨 ス ノ極 1 12 V 未ダ其 メ斯 堪 力振, 度 モ 亦気運 所 道 = +15 作奮 以 至 ノ永 素志ヲ ラ ナ ル 起シ 久保 り。 1 ノ然ラシ 達ス ヤ 丰 以テ其 鳴 ハ則 存 諸 呼 スベ 12 意果シ 数千 必 4 7 保存 1 ズ 丰 1 年. 再 雖モ ・ヲ方法 能 テ我徒 間 燃 1 伝来 其事業 ズ 方法ヲ深謀 兆 荏苒 企 候 図 1 セ 其 1 7 = セ 1 斯道 志 従 12 1 2 遠慮 事関涉 テ今 7 F 同 亦自 ヲ 欲 2 フ セ 七 日 り。 ンスル セ テ ザ 然 = バ 至 ル ノ勢 朝烏 則 E 者 且 V 各 IJ 1 ナ ノ精 夫 其 有 7 IJ ラン 所 矣。 神勉 凡 是ヲ以我 至ラ 見ヲ吐 百 ヤ 然ラバ 力 2 ヲ 事 露 以 斯 県下 4 ル 則

明 十三年 九月五 ラ其

方法等

ラ討

論

審

議

セ

ラレ

1

コ

1

是レ

我徒

ノ深ク諸彦ニ希望ス

ル所

ナ

院長井上肇堂

副

院

長

筒

井

民

泰

阿波国各郡

御中

原文のまま転載

肇堂の提起した済生社設立の最終目的 の件に就いては、 常に名古屋の浅井国幹と協調してその実現をはかった。 は漢方医学の廃絶を避けるために、 漢方医を養成する医育機関 その資料として井上家に所蔵されている肇 の設置 K 在 5 た

## 資料3

堂宛国幹の書簡を掲げる。

之ヲ聞 聞ヲ承リ 12 願 1 東京ニ発セ ヲ設立シ生徒教育 所 シ若シ 月十七日賜書二月五日達シ欣然捧読貴境之現況ヲ審ニス既ニ漢方病院御開院之由所謂ル天未ダ斯文ヲ袭サヾル所 決スソノ際景況ヲ迅報スベシ貴院ニ於テモ同様出願有之度既ニ集誠病院モ出 ナリ請フ之ヲ忖度セヨ今回貴邦産スル所 クモ 実二 許 可 2 ヲ得 メ同 愕然トシテ失望之至遺憾無限哽噎 誰カ我ガ道ヲ維持スル 府 ザ 允可 ル ノ名洲哲道ニ = 於テ ヲ得ル 1 戮力 コ 1 我腑ヲ示シ明治十二年 ラ協議 1 ノカヲ層進 テ 閣下 セ ント ノ芳帋壱筐ヲ辱ス余曽テ見ザル所感謝何罄シ因テ御開院ヲ祝シ併テ鄙 = ニ不絶候陳ハ生徒教育ノ事件日夜苦心焦慮 セ ザラ 奉 欲 願 ス故ヲ以テ本月十三日発程ヲ期ス帰県ノ上別紙 ンヤヤ 七 1 九月廿九日御頒布 仍チ ト慾ス然ル 中 国九州地方陸続設立相成居樣御尽力奉仰候干時 1 丰 ノ太政官第四十号教育令ヲ奉ジ専門皇漢医学校 愈々其力ヲ層加 原ノ意ニ決シ候ニ付三院各自ソ ノ際我ガ社員決議シ小生ヲシテ ス ル = 至ラン是小生が企望ス ノ如ク県官ニ哀願 ノ県官ニ哀 岡 1 ヲ呈 七 計 テ

ス

頓首九拝

博愛病院社長

浅 井 篤太郎 印

印世博愛病院

済生病院社長

井上肇堂殿

願書、 んで掲示してみよう。 晩年の肇堂は老軀をおして漢方医存続と漢方医学校設置認可のために、 陳情書、 歎願書、 建白書などを提出した。 是等の原稿が井上家に多数保存せられているが、 再参藩庁に出頭してその必要を説き、 その代表的なものを選 また、 請

資料4

漢方医存置陳情書(覚

仕り候べく存じ奉り候。 て御座候、 て御座候、 付られ有難く在じ奉り候。 名医も秀出つかまつり候べし、 は天明 此 華岡随賢の外科皆万国称用す可きの新発明にて御座候、 0 度御国 文化 其内にも名古屋玄意の発行攻下、後藤艮山の灸治温泉、 神代の御方術は格別の霊妙もこれ有るべく存じ奉り候、 に至り、 民御救生の為病院御盛建仰付られ候 大に關け当今に至り、 此の皇国の医術と申すは少彦名命、 然る処能々愚考仕り候へば、只今の掛り何れも西洋学一途に赴走仕り候ては、 欣々仰行仕り候、 又益々精密熟成仕候、 私伜も両人共微力ながら西洋学修業仕り兄は病院御官員の端 に付、 若年の医生奮然興起西洋学一 其の余の諸家も意上の療方御座候て、 大己貴命の御神伝より始まり、 其の後世々の発明も皆名苦心の経験病者活身の良方に 数千年来皇国発明仕候方術当今に至り滅絶仕 吉益東洞の万病 毒、 途競力勉強仕り候、 賀川玄悦 当今迄世々発明仕 皇国 0 産 術 の医術天正慶長よ 皇国の医学滅 必境碩学巨 橘 り候方術 K 南 も御 眼 用 仰 0

私儀故何分にも皇国遠祖の陋習去り難く、

温故知新の旧聞

一洗仕り兼ねて深く感泣愁惜仕候、

何卒御医師

の内

一家にて

皇国 も皇国医学御立置下され候御道は有り候まじきや此の段願いたてまつり度存じ奉り候、 る可く有難く存じ奉り候。 の医術徴に成り共、 相伝えつかまつるべく、 上は二神御恵済の尊意にそむき奉らず、下は人民体質習慣の薬服用に仕 願いの通り仰せ付けられ候えば、

恐れながら御評議御差図成され下さるべく候

十二月十五日

上 肇 堂

井

漢方医存続陳情書 覚

テ成リ、 ズ E リ、 IJ ノハ土壌 ルモ シ、 其物生活 虚耗シタル自己 凡天地之間 肉 呼 ヲ食フ ノアリ、 支那日本人其体○穀ニテ成ル、其性質異ナルヲ以テ其好ム処モ亦異ナルナリ、 穀肉菓菜食セルモノ無シト雖モ、 吸八 ノ異 ス 葉ョ 12 E ナ 動物植物 ヲ得 其 ル アル リスト言フ、 アリ、 性風土二 ノ体中具有スルモノニ非ザレ ザ 物 12 = ナリ、 因 野菜土壌枯木桑葉ヲ食フモ ノ生活セザル地ナシ、 ルナラン乎、 従テ異ナルアルヲ以テナリ、 故ニ南地ノ産北地ニ 是其体中穀肉ョ 動物植物ト各風気ト食物トラ以テ其体ラ養 西洋ハ肉ヲ好テ常食トス、 而シテ其性ニ於ケル異同アラザルナシ、 ハ養補スルニ足ラザレハナリ、 IJ 成ルモ 1 移スベカラス、 アリ、 盖シ南北異ナルモ ノ無ケレバナリ、 鱗介ハ 大ナルモノ其小ナルモノヲ食物トス、 西土ノ産 支那 ノハ多ク風気 万国其類同ジキモノ 日本 故二穀肉 東土ニ遷スベカラザルナリ、 ハ穀ヲ好テ常食トス、 ハサ ルモ 其病ヲ受ケ薬ヲ服スルニ当テ其不 南地ニ生ズルモノアリ、 ノ美味ヲ以テ、 ノ異 ナ ノナ 12 大小異同ナキ ケレバ = 因リ東西異 桑葉ノ鹿薄 是西洋 ナリ、 然ラザレ 穀ヲ食フ ヲ得 人其体肉 植 ナ 物 ル 東夷ニ生 7 其体 者ア 换 根 12 12 ナ E ル 3

以 上

(111)

土 ٢, 足 12 12 食シ ~ ヲ 移 馬牛ヲ シ 補 ケン乎。 ス 皮膚枯白色ト支那日本人ノ黒毛ニテ尺ケ短ク腹太ク穀ヲ食イ皮膚紅白色ノ者ト其体中 E 我輩 有余 12 = 餇 類以 フニ ラ〇損 医 邦人漢薬ヲ好ミ洋薬ヲ嫌フ其体作為 事 セザ 虚狼ノ食ヲ与フル ヲ知ラズ ス ト言法方ア ルヲ得ンヤ、 ト雖モ、 IJ 所謂壁 ガ如シ、 10 因テ医薬モ亦之ニ 人質 ノ繕ニ 異ニシ 不害者少ナカラザラン、 ハ土ナリ、 ス ル処 テ治 類似ス 方同 ノ物品洋人 性質 ジキ ノ異 時 1 ラン乎ト言 同 馬 南地二産 ナ ル 3 4 カラザ = = 同 肉 ラ ス 一ノ薬物 餇 ル 12 故乎、 E イ鷺ニ采ヲ与ル 1 北地二移 ヲ施 西 具有ス ス、 人紅毛 譬 シ、 12 ノ弊 赤眼尺ヶ長 西土 壁 処 無キ ヲ 物品 作 = 産 ニシ ル ス ク腹 = ル 木石 ジ E E 力 7 細 ラ 7 ラ 東 用 + 肉 +15

ルモ

1

ナ

フ。

議案

生徒 教 育 セ ザ V 1 漢医 以滅絶 ス ル コ 1

第 一条 漢方医 生 漢医検査シ 医学治療共 相 応 ナレ バ 開業被免候事

原文のまま転載

方医存置 嘆願

帰

何

崇を増 洋学の奇妙 無きこと免許を得ずとの御趣意医学を熟知せしめ治療法にあやまり無からしめんとの御趣意とも恐察仕るの 力する場合、 廃藩置 n 依する宗に従はしむ。 カン 感載 加 県以来旧 L あるは衆よく知る処なり。 せざらんや。 断然右御布達の御規則に基きては、たちまち右功労も消滅仕るのみならず、遠郡至りては洋学に熟知の医 儒者経史又生徒の好むに従って教授し、 弊 を解 然るに、 その他万民皆意のおもむくにまかしめ、 かい れ 文明 衰愍すべき一事 開 然る処、 化自主自立の権を与えられ、 漢法医学に於いても数千年 件あり、 仏は諸宗とも以前並立す。 医術開 未練をのぞき勧業を許さるるは、 業願の儀漢法医生に於ける洋学第何 農工 商 の久しきにゆき渡り、 は己の欲する所に従がい 僧は己 の尊 ぶ処の 数十年のその業に辛苦労 教 実は公明正 就業し、 に従 種 の課 神道は みならず、 目 大の御 衆生 を修学これ は 生数 層 政 己 西 令 尊

間 無 P 何分の御指令あおぎ奉候。 医業免許 実際行なわれ難き次第と左に記載上申に及び候、 これ 有る様御酌量 これ有る様仕りたく候。 この条御洞察の上漢法医学熟知の人も、 我輩斉生之れ無く候へども、 即今生計の状況傍観に耐えず懇願候 洋学修業行き届かざれど

1111

### 第一条

不幸少からずその為種々苦情をとなへ申すべき事 僻地に於てはまだ洋学熟知の者数なからんとす、 右の如き官許してたちまち一身職業消滅するのみならず、 村民の

以

上

### 第二条

る時官許なし。 化を祭し薬物の精能主治もつまびらかにし病症相対する治療を施すに精洋を習熟するに及んで家に帰り業を開かんと慾す 以って日に次ぎ塾に帰りなば診察の錯置有らんことを恐れ、 医 法医生の儀、 嗚呼、 師を選んで昼夜苦学す、 数年の難苦 一時消滅し旧来の志願長く灰燼となる、その情実如何これ有るべき哉の事 診察の際に在りては僻地の医生は夏は震雷を恐れず、冬は氷雪をさけず、 終夜寝ること能はざることあり、 勉強十余年ようやく病の変 夜を

### 第三条

業に至らずとす。 なかるべきと存ぜられ候、 汎 そ何事も学書に通達するとも実際に至って大いに違いあり、 僅かの年数を以って、 或は病の変化或る時種々心術を尽くす、これ最も専用ならん、 洋学開業は実際行なわれ難き事 医療の如きも、 例え、学祥しくも実見足らざれば病に益 右の通り治療方修業すらなお熟

# 第四条

にも漢法一基治療施行の之れ有る由伝承候、 人命の大切なる場合に於て薬品の高下を申し是非すと云えども漢法治療方もその効無きに非ず、 もとより漢法御廃止の御布令これ無し、 しかるに漢法医の薬品国産多し、 相見る東京始めその他 舶

来は無数とす、 益少なしとせず、 えども、 治療をよくする時は生民に益あり、 治療医は無きにあらず、 国財を外国へ輸する少きを知るべし漢学やすしとせずと云えども医療は習慣久し、 皇国に利有ること少なしとせず、 金銭ついやす事少なくして 師につかえて学ぶべし、 もし学資無き者は治療のみ学ぶべ 国産の薬諸々に出る時は挙従少なしとせず、薬物製出して家を興すもの多し、 利益大にして損害なく数千年来の万民のその沢をこうむらざる事なき 僻地も学医は無しと云 玉

226

## 第五条

しまざる者無きを以って、洋薬効なくば治をこう者無かるべし、 漢洋共に自主自立の権を得さしめ病者又自主自立の権にて意の適るにまかせ、治を請はしむれば病者病の癒えざるを苦 漢医方の無効の時は漢医生束縛なくして自ら止むべき事

以上掲示の諸資料によって、 肇堂が漢方医存続運動を興した主旨および 漢方医学に対する考え方は 明白となったと思

50

就任し、つづいて東京浅田翁の配慮によって奥田某が派遣せられて来たが、 阿波というよりも、 むしろ、 四国の漢方医学の中心であった済生医院は、 肇堂没後、 次第に経営不振におち入り、 副院長筒井珉岱が昇格して院長に 明治十七年

こうして、漢方医存続運動の巨火は四国から消え去った。

八八四)遂に廃止せられた。

かし、 名古屋では皇漢医学校(校長村瀬豆洲) 開設せられ、 明治十六年(一八八三) 温知医黌 (皇漢医学講習所)が開校

をみた。

肇堂没後、 約半世紀たって次ぎの表彰状が井上家十三代井上東周に贈られた。

資料7

# 徳島県板野郡松坂村 東周曽祖父

故井上肇堂

ズ、専ラ仁術ヲ主トシ多年済生ニ尽シタル功労洵ニ偉大ナリ、 年擢デラレテ藩主ノ侍医ニ列ス、 救療スルヲ常トス、 ニ医道薀奥ヲ究メ身ヲ持スル倹素慈悲ノ志深シ、 人威ナ其徳ヲ仰グ、 其著ハス所ノ少微新説刀圭界ヲ益スル多ク、 僻遠ノ地医師 患者ニ接スル至公至平懇切到ラザルナシ、 ノ乏シキヲ慨シ、之ガ養成ニカメ鋭竟其ノ充実ヲ期セリ、文久元 仍ツテ金参拾円ヲ賜リ祭祀ノ資ニ供ス、 其創 ムル所 ノ済世医院疾苦ヲ救 其貧者 其功績ヲ表彰ス = 八衣食ヲモ与 フ勘シト

# 徳島県板野郡長

正六位勲五等 鳥 居 和 邦

四、むすび

大正二年三月三十

日

あった。 肇堂が七十有余歳の老境に在って、 四国を代表して徳島の地に漢方医存続運動を興しはじ めたのは明治十 年

の開設)。 漢方医 治医制はやがて漢方の廃絶を招くことを警示し、その対策として漢方医の結集をはかった 至ラシ の運動の 療の優秀性を民衆に知らす目的を以て漢方専門の診療機関を開設して成功した 更らに、 ル 主旨は 抑 東京、 モ我同業者 「勧告文」(資料2) 名古屋の漢方医団体と呼応して、漢方存続に絶対必要な漢方医養成機関の設置認可運動をつづけ (漢方医) にも明記せられているように「鳴呼数千年間伝来セシ斯道 ノ無気無力ニシテ 豈ニ慨歎且痛恨ニ堪へザランヤ」 (明治十三年一月徳島私立漢方済生病院 (徳島漢方済生社)。 である。 (漢方) 近き将来にお ヲシテー つづいて、 朝烏有 いて明

運 た 動は、 この運動は、 肇堂没後急に衰微し、 陳情書、 歎願書、 明治十七年(一八八四)済生病院の廃止を以て終焉した。 建白書など藩庁に提出して尽力したが遂に不許可に終った。 四国における漢方医存続

(昭和五十四年十月十四日記)

注

- (1) 安西安周著「明治先哲医話」(昭和十七年)一九七頁。
- (2) 浅井国幹先生顕彰記念文集(昭和五十年十二月)。
- 3 拙著井上肇堂と漢方医存続運動 「医海時報」 第五八二号 (昭和四十八年五月十一日)。
- (4) 「徳島県医師会史」(昭和五十一年十二月)一一七七頁—一一八九頁
- 5 秀三著「華岡青洲先生及其外科」(思文閣発行)春林軒門人録五〇〇頁
- (6) 井上家蔵青洲遺墨 欲救疾病当精其門外方 無古今唯在致其知。
- (7) 「少微新説」未見資料。
- 8 拙著 「阿波医学史」(昭和四十五年)、五五頁—六〇頁。一〇一頁—一〇五頁。
- 9 「井上家規」は十一代井上家を嗣いだ源貞が父肇堂から見聞した資料によって書いた井上家譜解説書である(井上家蔵)。
- 10 料によって補足して原著として発表する。なお、その大要は昭和五十四年二月二十三日NHK 本稿は、さきに発表した拙稿「徳島県における漢方医存続運動について」日本医史学雑誌 漢方医受難」として放映した。 (昭和四十七年九月) (教育)「生活の中の日本史 の内容を新資
- 11 最近、東京都駿河台井上眼科病院 肇堂と達也との交信資料である。 (井上達也創設) 目下史料整理中であって他日の発表を期し度い。 の改築工事にあたって、 旧倉庫から多数の資料が発見された。 その多く

開業医·徳島市

#### Chodo Inoue's works in a History of Chinese medicine in Tokushima Prefecture in the Meiji era

by

#### Giichi FUKUSHIMA

Chinese medicine, KAMPO which had been practiced in Japan from ancient times was ended because of the promulgation of the new medical system in the Meiji era in 1874.

So physicians of the Chinese school united together against the new system which adopted western medicine exclusively, and organized the Chinese medical association called ONCHISHA in Tokyo. They established the Chinese medical school, ONCHIKO in Tokyo for research and diffusion of KANPO, and conducted a campaign for maintaining the KANPO physicians.

Chodo Inoue (1804-1881) was a leader of this movement in Tokushima Prefecture, Shikoku, and his antecedents were found recently.

I investigated the details of his bibliographical introduction.

He was born in the first year of Bunka in Yatake, Kagamimatsu, Itano-cho, in Tokushima Prefecture and was called "Kogenta" in his childhood, and later "Shunzui" or "Chodo".

He grew up to learn surgery from Seishu Hanaoka in Wakayama and obstetrics from Ressai Oku in Kyoto and later returned to Yatake, Tokushima.

He opened his clinic and wrote a book "Shobi Shinsetsu" which was a hand-book of new medical theory and became a member of the surgical staff of the Tokushima Clan in the first year of Bunkyu. (1861).

He was concerned that KANPO was ended; he set up KANPO Saisei Byoin, a private hospital of Chinese medicine which adopted only KANPO in Nishi Yokocho, Tokushima city in 1880, where KANPO could be diffused and researched.

Then, there were 408 physicians for Chinese medicine and 75 physicians for Western medicine in Tokushima Prefecture.

He presented many times a petition and statement to the Tokushima Prefectural Government for the establishment of his private Chinese medical school, but was unsuccessful.

Unfortunately he passed away without his great dream coming true.

# 天明元年の第一回跻寿館薬品会弘前藩医桐山正哲と

松木明知

1

の医学の進歩のみならず、関連諸科学の発展に及ぼした影響は極めて大であり、日本の科学史上特筆すべき壮挙である 田玄白、 前野良沢、 中川淳庵らによって翻訳され、 安永三年(一七七四)に出版された「解体新書」が、 たんにわが

この翻訳の大事業に弘前藩の江戸定府医官桐山正哲も参画したことは、杉田玄白の回想記 「蘭東事始(一名蘭学事始)」

によってわれわれに伝えられた。

ことは、

何人も否定できない。

桐山正哲の事蹟については、従来没年月以外不明であったが、近年、筆者らの研究によって徐々にそれが闡明にされつ(1~3) しかしながら生年月日を初めとしてその業績が十分に解明されたとは言えない。

したところによれば「くもり」であった。 (一七七一) 三月四日の早朝であった。 杉田玄白が 同僚中川淳庵らと共に、 江戸の骨ヶ原(現在の山谷)で「青茶婆」の腑(ふ)分けを見学したのは ちなみにこの日の江戸の天候は、 前日の三日は「雨」、 翌五日も「雨」で卯の刻過ぎに地震があった。 筆者が弘前藩江戸日記や幕府書物方日記で調査 明和八年

(119)

が推察されるが、 0 腑分けの見学が しかし、 「解体新書」 どのような契機で正哲が玄白の社中に入るようになったかは依然として知られるところがな 翻訳 の動機となったのである。 正哲は おそらく比較的早期に翻訳 0 業に参加したこと

1,

どが のころ江戸にお 集まって彼らの 所蔵する珍品、 いては盛んに薬品会、 奇品などを持ち寄って披露し、互いに研究したのであった。 物産会が開催された。今でいう動植鉱物の展覧会である。 江戸中の本草学者 な

源内の主唱にこたえて開催したものと言われる。 江戸でこのような薬品会が開かれたのは、 宝暦七年(一七五七)が最初で、 これ以降、 毎年のごとく開催されたが、どうしたわけか明和二年 本草学者として有名な田村元雄 が弟 子平賀

2

六五)

以後は、

しばらく中止されていた。

焼し、 た K (せいじゅかんとも読まれることがある)」を創立した。 功績があったことは広く知られてい ちょうどこの年、 森鷗外の史伝で名高い弘前藩の医官渋江抽斎も幕末に躋寿館の講師となり、 再建にばく大な費用を必要とするため、 幕府の医官法眼多紀元考は私立の医学校の開設を願い出て許可され、 る。 後、 しかし、明和九年(一七七二)、天明六年(一七八六) 寛政三年 (一七九一) 官立に 移管し、 わが国最古の医書 幕府の医学館 江戸神田佐久間 「医心方」 の二度の大火に 「躋寿館 町に の校刻の業 2 「踏寿 な 類 館

が躋寿館に の躋寿館でも薬品会が開 おける第 回の薬品会と考えられる。 かれた。 天明元年 (一七八一) 閏五月二十八日に主催したのは桐山正哲であった。 おそらく

本草学者であった。 出 品物を鑑定したのは、 出品したのは鑑定人の西湖を初めとし、 正哲の師 田村西湖であっ た 西 湖 は前述し 会主の桐山正哲、 た田村元雄の長子で、弟栗本舟洲とともに父に劣らぬ 補佐役の須河東伯、 五味玄潤、 白井貞庵

高井東雲、 田中順 総出品点数は約九百点にも上る大規模なものであった。 貞 服部玄忠、 大沢宗哲、 市井元珉、 原仲熊、 藤沢舜の十一人に加えて鑑定人の田村西湖など総勢百五

当の地位を占めていた一つの証左と見做して差し支えなかろう。 桐山 正哲がこのように大規模な薬品会の会主を務めたということは、 当時、 既に正哲が江戸における本草学の分野 で相

3

た。

現在岩瀬文庫に伝えられる天明元年の 「躋寿館薬品会目次」に拠れば鑑定人田村西湖は主品として左の五十種を出展し(5)

白雲母 産、 石英 母 榼藤子、 (和州産)、 亀甲、 殷孽 (甲州産)、 (信州産)、 波斯皂莢、 (武州産)、 鼈甲(漢産)、犀皮、 禹余粮、 黒石英、 青雲母 太乙余粮(東都産)、 全
、 滑石 紫石英 (河州産)、 斑蝥 (漢産)、 蝟皮、 (奥州産)、 (漢産)、 黄雲母 白滑石 牛黄、 斑蝥 陽起石 雌黄 (和州産)、青滑石 (紀州産)、赤雲母、 象皮、 (利州産)、 (上品崑崙黄)、 (黒色)、 虎骨 芫青、 陽起石 (佐州産)、黄滑石、 雄黄 黒雲母 蚺蛇皮、 (青色)、 (上品 (奥州産)、 鮮魚 陽起石 鶏冠雄黄)、 (漢産)、 白石英 鳥滑石 (白色)、 石鐘乳 鯪鯉 (佐州産)、青石英 青塩、 (野州産)、 (即穿山甲)、 (武州産)、 紅塩、 礞石 光明塩、 孔公孽 瑇瑁、 (漢産)、 (甲州産)、 黿 岸塩、 黄 珠

桐山正哲は会主として次に示すような鉱物、 植物、 動物の標本四十九点を出品した。

麻 丹砂、 白鮮、 石膏、 附子、 理石、 釣藤、 長石、 黄蘗、 方解石、 桂、 謄八樹、 甘草、 安産樹、 人参、 沙参、 際虫、 黄精、 牡蠣、 偏精、 竜骨、 求 蝲蛄、 (じゅつ)、 鱧魚、 淫羊藿、 膃 胸臍 黄連、 升

時小豆島から出土したマストドンの化石のことであろう。 右 の物品 0 中 它 は 現在でも仲々入手しがたいものもある。 蝲蛄は「らっこ」と読み 三解説すると謄八樹は "ザリガ オリー = のことで、 ブ、 竜骨というのは、 津軽産俗名 当

本を所有していたことが知られる。 したといわれる。 才 0) ++ 眼 12 1 力 の意である。 七 ニ頭中有白石 イの精で、 もちろんこれらは正哲の収集品の ザリガニの頭部にある結石ようのもので、 強壮剤として貴重なものであり、 番名 オクリカンキリ」と説明され 部であろうが、 津軽一粒金丹の重要な成分でもある。晩年の徳川家康もこれ ていい る。 蘭方では 「オクリカンキリ」 これによって彼が鉱物、 利尿剤として使用された。 は正しくは「オクリカンクリ」でカ 植物、 膃肭臍 動物など多方面 (おっとせい を服 の標 は 用

4

5 知られるが、 ん参勤交代で津軽へ往来した同僚に依頼して津軽産のザリガニなどを収集したものであろう。 哲は寛政二年 これは薬品会よりずっと後のことである。 (一七九〇) および同十年 (一七九八) の二度にわたり江戸から津軽に下ったことが弘前藩日記によっ 天明元年 (一七八一) 以前津軽に下ったか否か分明でない 7 た

7 あったから、 かし正哲は おそらく正哲の収集品も灰燼に帰したことであろう。 天明三年 (一七八三) 十二月二十日浅草鳥越辺から出た大火で類焼し、 しばらくは小屋掛けで生活 したの

H 品 しているが、その中でも注目すべきは津軽産の鷽(カブトガニ) 哲のほ かに弘前藩関係では、 江戸定府の医官須川東伯は主として津軽産の馬脳やか の名が抜見されることである。 の有名な津軽半島の舎利石などを

工 カ 1. ブ トキシ ガニは現在日本では北九州と瀬戸内海のみに棲息する生きた化石といわれる節足動物である。 1 の証明など医学的にも利用され ている。 最近はその体液が

五味子 今から二百年前には津軽の海にいたカブトガニがいつ姿を消したのであろうか。 何首鳥 (かしゅう) 仏頭菊の三点を出 品してい る 浅越玄隆も弘前藩の医者であった。 南

石 九 種を一括展示したのは白井万蔵であった。 「津軽白井万蔵」 とのみ記されており、 どのような人物であった

かは知られるところがない。

されるであろう。 以上のことによっても弘前藩には正哲を中心として本草学に興味を有する医官などが少なくなかったことが容易に首肯 樋 口道泉も江戸定府の医官であった。 石弩 (いしゆみ)、 石脳、 馬脳、 ルザラシ (蛇木) 石銗を出品

5

連ねていることである。 玄白の出品物はサンゴ、 さらにわれわれの興味をひく事実は、 川淳庵は元来、 物産、 いずれも「解体新書」の訳業の中心人物で、 海ホオズキ、 本草の学を好み、 この薬品会の出品者の中に杉田玄白、 青藁羽などであった。「青藁羽」はクジャクの羽のことであろうか。 江戸に上ったオランダ商館長付の医師にも、 正哲の師匠格に当たる人たちであった。 中川淳庵、 度々会見して、 桂川甫周、 石川玄常などが名を かの国 の物産に

産で前述したごとくマストドンの化石である。 「川玄常は鯨の骨の化石、 て質問を発しているほどである。 沙箸 (ウミヤナギ) 淳庵の出品物は、 以前、 を出品し、 平賀源内が所有していたものかもしれない。 ダチョウの卵、 桂川甫周は竜骨など十類点出品した。 エブリコ、アロエ、サアクヒスなどであった。 この竜骨は讃州小豆島

出 玄白が弟子で後に た頭蓋骨 ウニ 7 「解体新書」を改訂して「重訂解体新書」を上梓した大規玄沢はエジプトのミイラやその中 ル などを出品した。 当時としてはめったに見ることの出来ない珍品、 奇品の数々であったとい ら取

ても決して過言でない。

の出品者の顔ぶれからすると正哲が右に述べた人々と頻繁な交遊が続いていていたことが推察される。 このように盛大な薬品会を主催するに当たって、 正哲が 「解体新書」 翻訳の業に参加した明和の未年、 会主の正哲はその準備に多忙を極めたことであろう。 安永の初年より、 およそ七、八年経過しているが薬品会 天明元年

解体新書」の訳述の会の一員となったのかもしれない。 若年のころより本草学を好み、 かしながら正哲が「解体新書」の訳業へ参加した動機が何であったかは、 田村西湖の門に学び、 その関係で同じく本草学に造詣の深かった中川淳庵の知遇を得て 今慥に解決出来ない問題である。

236

するようになったのかもしれない。 るいはまた、先に訳述の会に入り、そこで中川淳庵と昵懇となり、 その手引きで田村西湖の門に学び、 本草学を専攻

筆者の調査によって、 正哲の近親者にも本草学者がいたことが最近明かとなった。

とは 中期 で は 彼は桐山正怡と称し、 「嶧陽館」と称したのである。 確 の青森県の文化史を語るためには、 峄山一 かであろう。 の陽 (みなみ)の意で、 赤水と号した。江戸屋敷近くに住して、その居を この人物が正哲とどのような関係にあるかは本誌に既に発表したが、いずれにせよ江.(3) **嶧山の陽に産するキリは琴を作るに良いと言われた。** 本草学を巡る桐山正哲たちの動向を研究することが極めて重要になりつつあるこ 一嶧陽館 (えきようかん)」と称 すなわち「嗶陽の桐」 した。 にちなん

# 参考文献

- (1) 松木明知 藩医桐山正哲の事蹟 津軽の医史 所収津軽書房 昭和四十六年
- 2 松木明知 七代桐山 正哲の墓碑 続津軽の医史 所収津軽書房 昭和四十八年
- 3 桐山 正怡と「学本草随筆」 日本医史学雑誌二十五巻 三号 昭和五十四年七月
- 5 躋寿館薬品会目次 松村明校註 蘭東事始 天明元年 岩波古典文学大系 西尾市立図書館 第九十五巻 岩瀬文庫 四八九頁 岩波書店 昭和三十九年

(弘前大学医学部麻酔科学教室)

#### Shotetsu Kiriyama, a physician of the Hirosaki Feudal Clan and the Exhibition of Natural History in Saiju-kan

### by Akitomo MATSUKI

In 1781, a big exhibition of natural history was held at Saijukan, the medical school of the Tokugawa Shognate, under the presidency of Shotetsu Kiriyama who was a physician of the Hirosaki feudal clan.

Seiko Tamura, a preceptor of Kiriyama in natural history joined this exhibition as curator of the specimens.

One hundred and five members presented a total number of over nine hundred specimens in this exhibition.

The names of Genpaku Sugita, Junan Nakagawa, Genjo Ishikawa, Gentaku Ohtsuki who had been active members of the translation of "Kaitai-Shinsho" were found on the list of this exhibition.

The fact that this big exhibition was held under the presidency of Shotetsu Kiriyama would suggest that a close friend-ship had been maintained among Kiriyama and "Kaitai-Shinsho" members of the translation group at that time, when some 7 years had passed since the publication of "Kaitai-Shinsho".

# 日本医史学会例会記事

二月例会 二月二十三日(土)

(カットグット)の日本への導入について 順天堂大学医学部九号館 一番教室

腸線

蔵 方 宏 昌

ローヤル・タッチについて(スライド供覧)

立

Ш

昭

長谷寺験記にみる治病利生について 順天堂大学医学部九号館 関 根 番教室

島津斉興に関する戸塚家文書二点

戸

塚

武比古

三月例会 三月二十二日(土)

# 日本医史学会会則抄

第 History) という。 この会は、 日本医史学会(Japan Society of Medical

第二条 この会は、事務所を〒13東京都文京区本郷二―一―一 順天堂大学医学部医史学研究室内におく。

この会は、医史を究研しその普及をはかるを目的とす

第四条 学術集会、その他講演会、学術展観の開催等 前条の目的を達成するために次の事業を行う。

係図書等の刊行。 機関紙「日本医史学雑誌」「日本医史学会会報」および関

- 日本の医史学界を代表して、内外の関連学術団体等との連
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 この会の会員は次のとおりとする この会の目的に賛同し会費年額五、〇〇〇円を納める者 正会員

ただし、外国居住者は年額30ドルとする。

- (2)総会の承認を得た者 この会に対し功績顕著であった者で評議員会の議決ならびに 名誉会員
- この会の目的事業に賛助し会費年額一〇、〇〇〇円以上を納 賛助会員

める者、または団体

第六条 正会員になろうとするものは評議員の紹介により、理事 えて所定の入会申込書を提出しなければならない。 長の承認を得て入会金二、〇〇〇円およびその年度の会費を添

第七条 名誉会員は次の各号の何れかに該当し理事会、評議員会 (1) が功績顕著と認めた者であることを要する。

- 三十年以上の在籍正会員であって七十歳に達した者
- (2) 前理事長
- (3) 名誉会員は終身として会費を免除することができる。 正会員または外国人で功績顕著な者

第八条 第九条 賛助会員になろうとする者も第六条に準ずる 第六条及び第八条の会員の資格取得は会費納入日より始

第十条 会員には次の権利がある。

まる。

- (1) この会の発行する機関誌の無償配布をうけること。
- (2) 機関誌に投稿すること。
- 第十一条 会員は、会費を前納し総会の議決を尊重しなければな (3) らない。 総会、学術大会、学術集会その他の事業に参加すること。

第十二条 会員は次の事由によってその資格を失う。

- (2) 会費の滞納が一年以上を経過したとき
- (4) (3)禁治産、準禁治産または破産の宣告。 死亡、失踪宣告または会員である団体の解散。

# (5) 第十四条による除名処分。

一名おく。 第十三条 この会には、年一回学術大会を主宰するために会長を

- 1 この会は学術大会を毎年一回開催し、学術集会は随時開催
- 2 会長は、理事会の推薦により、通常総会毎に理事長が委嘱する。
- 評議員会または総会の承認を得て変更することができる。 開催することを原則とするがやむを得ない事情のある場合は る長の主宰する学術大会は、この会の通常総会と同時点で
- 4 会長の任期は、学術大会を議決した通常総会の翌日から次
- 5 会長は必要に応じ理事会に出席しこれと密接な連絡のもの
- 6 会長に事故あるとき、または欠けたときは新に会長を委嘱
- 7 会長は、学術大会関係事務を委嘱するために、会員のうち

学術集会は、随事理事長主宰のもとに開くことができる。

8

# 文部省科学研究費学術定期刊行物補助金を受ける

受けて刊行している。
本誌は昨年度にひきつづき文部省の科学研究費補助金の交付を

# 『日本医史学雑誌』投稿規定

投稿資格 原則として本会会員に限る。発行期日 年四回(一月、四月、七月、十月)末日とする。

東稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の終りに ・ 京稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著

原稿の取捨選択、掲載順序の決定は編集委員が行なう。また編原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。欧文抄録を添えること。

集の都合により加除補正することもある。

校 正 原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集が(四百字原稿用紙で大体十二枚まで)は無料とし、それを超えが(四百字原稿用紙で大体十二枚まで)は無料とし、それを超えが(四百字原稿用紙で大体十二枚まで)は無料とし、それを超えが(四百字原稿用紙で大体十二枚まで)は無料とし、二校以後は編集

別 刷 別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。委員会にて行なう。

医史学研究室内 日本医史学会 原稿送り先 東京都文京区本郷二丁目一の一、順天堂大学医学部

事務担当 鈴木滋子 編集顧問 小川鼎三、A・W・ピーターソン 本郎、三輪卓爾、室賀昭三、矢数圭堂、矢部一郎

編集委員

大鳥蘭三郎、

大塚恭男、蔵方宏昌、

酒井シヅ、

樋口誠

事

会計監 理 事 大鳥蘭三郎 勝三郎 宗田 紀雄 大塚 古川 恭男 明

任

理

三郎 三中佐木野藤 蒲原 大石原 美 全 栄 操 実 宏 節 矢長鈴酒緒 数門木井方 谷洋治勝 シ富ヅ雄

谷藤宗酒小大石津野田井川鳥原

三雄三雄

道明

名誉会員 王丸 赤松 金 旁 芳 杉石 III 靖三郎光昭 大塚

俊 敬

学雑誌が益々充実することを念願して

を

整えて御 上げます。

投稿下さるよう重

しい 形

申

皆様の御協力に

より ねてお

日

本医

山山守三本富服中中田屋浦間士部沢 III 邦與即良 豊彦 安矢三井数輪 丸古樋山川口 中 博明郎 矢山室松部下賀木 堀福中江島山 沃

委員会としても有難く感謝申

ります。

今後とも会員諸

氏

の御支援

げる次第

た。

国

内

から

の投稿

最

近

0

内容 また

充実し

原稿も豊富になり編集 \$

御協力をお願いいたします。

投稿される際には投稿規定に沿

いってい

理正 圭卓爾 広堂爾 0 渡辺に 省略)

後 記

谷蔵津方事

三雄 宏昌

矢酒 井

- >

杉田

道

郎 "

詫び 誌 6 関誌に す。 5 方言 L たが、 盗難に 0 初 \$ めめて すでに欧米各国からの 投稿を得まし 申 本誌は昭和三年から日本医史学会の機 なっ 一際的に注目されるようになってきま 巻二号が大へん遅れまし 投稿を得まし 逢うとい 上げます。 方、 7 いますが、 朗報として、 たのは今回 5 た思わぬ事故で遅 本号は印刷所 たことをお伝えし 中華人民共和 投稿を得て、 本号で中国 か 初 たことを で校正 3 7 n で 本 か 其 かい 刷

鈴末川大岩阿青議木中島滝治知木員

久志本

榊原悠知

紀

坦俊正田一義正基三一夫郎男雄義雄

暉道

行治 所有 所知波五郎 所知波五郎

岡内石赤田田原堀

博醇力昭

片江今安桐川市芸

土田高関杉屋中瀬根田

中津高瀬鈴川田山戸木

重助武正朗一平雄

五五. 年年 四四 月三十日 発刷

昭昭和和

五五

日

本医史学雑誌 第二十六卷第二

集者代表 〒 大 鳥 蘭 三 郎 日本医史学会 旧天堂大学医学部 医史学研究室内 医史学研究室内 İ

発 編

原 原出版株式会社 原出版株式会社

製作協力者

金 三

〒

東京都江東区亀戸報社印刷株式会社

印

刷

一所

(129)

クルムスターヘル

東大名誉教授

刻。別のと同

一版のターヘル・アナトミアを復

巻の縮写版を添付 ・緒方両先生の解説 われわれの先駆者が使用した

するため、

解体新書 ( 送料 四五〇円 (縮写 版

提 範 内景 和蘭内景 内象銅版図 東大名誉教授 頒

和蘭

価 三八、〇〇〇円 限定版三〇〇部

ナトミアは解

ずるター

ル

語の原著第二版の蘭訳本である。

今年は解体新書出版二〇〇年にあたる。

歴史的な機会を一層意義あるものと

全1冊 内象銅版図 **医範提網本文** 巧 タイプ印刷・濃 折帖仕立·精巧 福井手漉局紙厚紙 濃紺地布貼特 土佐楮手漉和 オフセット印 製帙 紙

全3巻



小し、再度当時の医学界を驚さ調六十一才の著で、漢方

漢方内

隣させに

た今

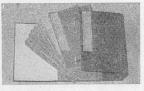
#### 内科秘録 瘍科秘録 続瘍科秘録 本間玄調 全12冊

科秘録 金茶緞子織 瘍科秘録・続瘍科秘録 紫紺紋柄装・本文=特漉因州楮和紙・コロタイプ印刷・和綴じ 帙函=内 としても高く評価され、医学の高度に進歩し 閱 育資料として、また、 :用として、貴重な文献である。(矢数道明氏蔵)-資料として、また、古典籍愛好家の鑑賞用・保体本に忠実に復刻したもので、医学者の研究・教紙・印刷・製本等に現代技術の粋をつくして、 も依然として光彩を放っている。この 覧瘍 が困難で、現在も尚医学教課の資料科秘録・内科秘録共に稀覯本として、 拾弐万円 上質紙張美麗箱入 頒価=内科秘録 巧芸版は 拾七万円

全5冊 たものである。 13 る。

刷

れ、ために玄調は青洲より破門されたと伝えられム開したもので、天下の耳目を聳動させたといわ立続導科秘録は、華岡流の外科学の奥義の秘法を以著作である。当時医師の金科玉条とされ、特にい著作である。当時医師の金科玉条とされ、特にい書は、華岡青洲・シーボルトに師事して出藍本書は、華岡青洲・シーボルトに師事して出藍





作/財団法人日本医学文化保存会 Tel.  $(03)813 - 0265 \sim 6$ 

売捌所/株式会社 金原商店 Tel.  $(03)811 - 7161 \sim 5$  international audience. I hope that you will share my problematique and give me your suggestions and criticisms from your own standpoints based on fuller access to source materials and rooted in a better understanding of the *Zeitgeist* of the nineteenth century Europe.)

#### Notes

- 1) Texts of Symposia, (Proceedings No. 1 of the XIV International Congress of the History of Science, Science Council of Japan, 1974)
- 2) Johannes Conrad, The German Universities for the Last Fifty Years (1855) p. 64. and Nakayama et al. (ed.) Nihon Kagaku Gijutsushi Taikei, Kokusai 日本科学技術史大系,国際 (Source-Book of the History of Japanese Science and Technology, International Relation, 1968) p. 63.
- 3) Conrad, pp. 66-69.
- 4) J.K. Crellin, "Chemistry and Eighteenth-Century British Medical Education", Clio Medica, vol. 9. no. 1, pp. 9-21 (1974), and Noel Parry and Jose Parry, The Rise of the Medical Profession (1976)
- 5) Hans H. Simmer, "Principles and Problems of Medical Undergraduate Education in Germany During the Nineteenth and Early Twentieth Centuries" in C.D. O'Malley ed. *The History of Medical Education*, (1970, University of California Press) p. 173 ff.
- 6) Max Lenz, Geschichte der Königlichen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin, (1910) is the best source of our discussion. At this particular point, see von Gossler, Die Königl. Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin (Berlin, 1887) I, p. 351 ff. See also Nakayama, Shigeru, "Kindai Kagaku no Daigaku ni Taisuru Impact, 3, …Berlin Daigaku Sosetsu o Megutte 近代科学の大学に対 するインパクト, 3ーベルリン大学創設をめぐって (The Impact of Modern Science upon Universitites…The Founding of Berlin University), Daigaku Ronshu 大学論集(Research in Higher Education, March, 1975) no. 3, pp. 74–83.
- 7) Statistics at the end of Lenz, Bd. III, and Hirano, Ichiro 平野一郎 (ed.)

  Daigakushi 1 (History of Uinversities, no. 1, Kodansha, 1974) p. 188.
- 8) See Helmut Schelsky, Einsamkeit und Freiheit, Idee und Gestalt der deutschen Universität und ihrer Reformen (Hamburg, 1963)
- 9) Conrad, p. 71.
- 10) Lenz, Bd. IV, p. 56.
- 11) Hans-Heinz Eulner, Die Entwicklung der medizinischen Spezialfacher an den Universitäten des deutschen Sprachgebietes (Ferdinand Enke, 1970) p. 513.
- 12) Eulner, p. 32.
- 13) Eulner, pp. 656-670.
- 14) Lenz, Bd. III, p. 297.
- 15) Lenz, Bd. III, p. 154.

(14)

the scientific laboratory in the Philosophical Faculty from the 1830 s on. After the death of Johannes Müller, his successor, Emil H. Du-Bois Reymond, belatedly created his physiological institute<sup>15)</sup>.

#### Scientific medicine and medical license

The above-stated four conditions were neither necessary nor sufficient for scientization of medicine. They were purely historical, accidental and parochial causes. Once scientization of medicine is completed, however, its system can be universal and easily transferrable to other new countries like Japan, where traditions were politically swept away and an entirely new system was sought. The conditions for those who started the scientization of medicine were entirely different from the conditions for those who seek to import an already scientized medicine.

In late nineteenth century Japan, scientized medicine (or medical science) was imported exclusively from Germany. German scientized medicine now gained official sanction as opposed to traditional *Kanpo* 漢法 (Chinese-style) medicine.

Modern science has notable character of universality, which in this case was utilized to suppress local, parochial traditional medicine. Modern science presupposes a clear-cut solution, which provides the best criterion for competitive written examinations. Thus, modern medical science was programmed into and nicely fitted to the system of medical license examination.

Now to become a legitimate physician with authority, one had to pass a license examination mainly given in testable subjects, such as physiology and anatomy, but not equally applicable to clinical experience. Consequently, medical licensees formed a new medical profession, separating themselves from the traditional physicians' community. The qualifications for induction into the new medical establishment were mastery of modern scientized medicine and command of the German language.

(This is far from a finished paper, as I rather intentionally adopted an informal colloquial style for presentation to this particular

(13) 244

have been better located in the Philosophical rather than the Medical Faculty, but the beachhead of mathematics and physics in the Philosophical Faculty was more remotely linked to chemistry and physiology than that of anatomy in the Medical Faculty.

#### 4. Institut

While academic freedom and Naturphilosophie can be maintained only with classrooms and lecture-platforms, modern scientific research cannot be done without a certain amount of instrumentation, laboratory and research apprenticeship. The glory and reputation of the German universities in the early nineteenth century rested mainly on lecture-platform philosophy. The infrastructure of the Philosophical Faculty, such as freedom of teaching and learning, Privatdozent, honorarium, and high mobility of students and teachers, was designed to promote such "theatrical" subjects of study. However, it is rather obsolete for the promotion of modern experimental science. It is certainly significant that the University of Berlin had, from its inception, a special instrument for the promotion of research called Seminar, in which an outstanding professor and selected students enjoyed facilities and stipends, like Friedrich Wolff's classical seminar. The medical clinic also enjoyed a certain amount of allocated budgets, which were not available to other teachers, whose finance were limited to the honoraria of students, and a regular salary if one held a professorship.

Justus Liebig's celebrated chemical *Institut* established in the 1820 s was a significant breakthrough. It was imitated by many other universities, where laboratories of experimental science were created and budgeted, usually twice as much as the seminars for non-experimental subjects. Liebig in his recollection said that he could not have been successful in creating an institutional novelty had he been in a big university like Berlin with its inhibitive academic bureaucracy. In 1848, pharmaceutical students petitioned to create a Chemical Institute in the University of Berlin but it was delayed until 1860<sup>14)</sup>.

The Medical Faculty must have been influenced by the success of

245 (12)

chemistry's penetration through the university wall was delayed chiefly because of its lack of a counterpart in the traditional university curriculum

By the same token, the pre-existence of an anatomical chair was crucially important in building a beachhead for the landing of modern science in the practically oriented Medical Faculty. In the German universities since the sixteenth century anatomy accompanied by botany (materia medica) entered the university and played a vanguard role with its empirico-positivistic approach in expelling the centuries-old scholastic speculative curriculum<sup>12)</sup>.

Up until the mid-eighteenth century, however, an anatomist could not support himself by teaching only anatomy but was compelled to teach other subjects like surgery and obstetrics for his livelihood. In the early nineteenth century, with the rise of the urban bourgeoisie, medical practice became an attractive vocation. The number of medical students rose, medical teaching in the universities commanded people's confidence, and alongside these events, the chair of anatomy became an established stronghold.

Anatomy is primarily an educational subject to give students a knowledge of human body, and is not directly responsible for clinical treatment. Isolated from the main part of the Medical Faculty, the anatomist assimilated himself more toward the research scientist rather than physicians in his behavior and way of thinking, out of which medical science emerged independent of clinical practice. He extended his interest in vivisection to animal dissection, comparative anatomy, pathological anatomy and furthermore to histology with the development of the microscope. Eventually, on this line of development, modern scientific physiology nd physiological chemistry came into existence. In the mid-nineteenth century German universities, a physiological chair came to be independently established branched off from the anatomical chair, and in turn in the late-nineteenth century chairs of physiological chemistry were established in many universities<sup>13)</sup>. As the chairs of physiological chemistry and even physiology emerged without close ties to clinical medicine, they might

(11) 246

Table III. Number of Students and Teachers at the Founding Time of the University of Berlin

Faculty	Theology	Law	Medicine	Philosophy		
Students	29	53	117	12		
Teachers	4	4	14	30		
Full Professors	3	3	6	12		

- 1. Anatomy, surgery, gynecology and obstetrics.
- 2. Animal chemistry, pharmacology, pharmaceutics, prescription and physiology.
- 3. Psychology, psychiatry and psychotherapy.
- 4. Introduction to medicine, symptomology and pathology<sup>10)</sup>.

This table shows his clear vision of the coming age of the scientization of medicine one generation later. In actual practice, such an idealistic plan could not be realized overnight. Reil's visionary philosophical inclination did not endear him to the pragmatico-empirically oriented Hufeland. Under the deanship of Hufeland, the Medical Faculty of the University of Berlin started with four chairs; medical clinic (Reil in charge), medical policlinic (Hufeland), surgery and anatomy, soon followed by obstetrics and a second surgical chair. The chairs of physiology and physiological chemistry were established as late as 1855 and 1877, respectively<sup>11</sup>).

It is a conventional assessment of the historians of science that the establishment of empirico-experimental natural science was delayed for a third of century, because of the dominance of *Naturphilosophie* in the German universities. However, we should not underestimate Reil's philosophical speculation which led him to envision the scientization and theoretization of medicine.

#### 3. Anatomy

When modern science landed on the shores of the old conservative institutions of medieval origin, a pre-existing beachhead must have played a decisively instrumental role. Thus, the medieval curricula of Platonic quadravium and Aristotelian Physica were inductors of modern mathematics and physics during the eighteenth century, while

Faculty and Dean Friedrich Schleiermacher of the Theological Faculty, the ideal of philosophers held sway over the University up until the 1820 s. Fichte demanded that the University be reorganized into a single faculty of philosophy by disbanding the older faculties of theology, law and medicine. The less aggressive Schleiermacher claimed that the University should be the center for teaching and *Bildung*; though he agreed to preserve the other professional faculties as subordinate to philosophy, research activities should be transfered solely to the academies<sup>8)</sup>.

Within the University, the power of romantic and speculative *Naturphilosophie* had suppressed the rise of the opposing empirical school up until the 1820 s.

When Johannes Müller, a founder of modern physiology, tried to find a post in the universities around 1820 s, the Ministry of Education selected new recruits according to his inclination to *Naturphilosophie*, and most of the medical professors were followers of this school.

Though *Naturphilosophie* as advocated by Friedrich Schelling and Henrik Steffens is hardly comprehensible to contemporary readers, it might have functioned, especially in its nascent stage of a scientific discipline, as a stimulant of interest in the overall concern of nature and the methodology of guiding research.

Naturphilosophie created a conflict point in the early years of the Medical Faculty at the University of Berlin. It appeared in a strife between Reil, a follower of Schelling's Naturphilosophie, and Christian W. Hufeland, a practical clinician. In organizing the new university, Hufeland proposed a plan to emphasize practical and empirical subjects instead of speculative ones, modelling the curriculum after technical schools. Eventually he succeeded to make medicine the largest faculty within the University as indicated in Table III, while in average German universities, the Medical Faculty is represented only 15 to 20 % of the total university faculty<sup>9)</sup>.

On the other hand, Reil formulated a radically new organization plan for the Medical Faculty. The courses he presented are classified into the following four groups:

(9)

they passed the Abiturprüfung, the student numbers appear to indicate the popularity of the specialized faculty. On the other hand, the number of faculty members more or less reflects the interest of administration as the majority of them were paid professors. In actual practice, however, students could attend any course in any faculty. Those students who chose medicine as their future profession still attended heavily the courses given at the Philosophical Faculty, such as academic philosophy and chemistry as the basic subjects of their future discipline. Thus, the Philosophical Faculty, beside training its own philosophy students, still took care of basic and general education for a large number of the students enrolled in other professional faculties as had been their sole duty before.

The rise of reputation and prestige of philosophical subjects preceded institutional reform even back to the eighteenth century, and many students, though not headed for future specialization, were attracted to the theatrical performance of Johann G. Fichte and other star lecturers of the Philosophical Faculty. While students of medicine were exposed to the newly-rising scientific disciplines given in the Philosophical Faculty, they must have been accustomed to treating things in a scientific way and developed the mental habit to esteem the new mode of scientific research.

In other words, the scientization of medicine was infiltrated into medical students, mainly due to academic freedom (or rather, the amorphic system) to permit the free attendance at the courses given in other faculties. This trend became increasingly intense as time passed, since the Philosophical Faculty gained still more prestige and better-known lecturers during the course of the nineteenth century.

#### 2. Naturphilosophie

The mixed evaluation of *Naturphilosophie* has been always an embarassing problem to rationally minded historians of science and remains ever challenging for them. In the early years of the University of Berlin, the school of *Naturphilosophie* dominated not only the intellectual climate of faculty and students but the academic politics of the founding time as well. Under Dean Fichte of the Philosophical

249 (8)

indulge in science.

Modern universities have two entirely different kinds of educational function; one is a "theatrical" function, like the free lectures given at the lecture platform of the Philosophical Faculty, and the other is that of a "driving-school", like the practical drill common to technical schools of engineering and medicine. During the nineteenth century, endless discussions were repeated in the Medical Faculty whether planned obligatory curriculum, rigorous drill and reviewing examinations should be introduced in practical training, at the expense of the principle of freedom on the part of students as practiced in the Philosophical faculty where only free lectures were given to students of the theatrical audience type<sup>5)</sup>. While the Philosophical Faculty did not give any study plan to its students, the Medical and other professional faculties usually provided their *Lehrplan* for students<sup>6)</sup>.

On the history of the university, the founding of the University of Berlin in 1809 was particularly significant in making the model of modern university where scientific research was considered to be one of its major functions. Its institutional novelty is nothing more than the raising of the status of the Philosophical Faculty to equal that of the other higher professional faculties of theology, law and medicine. The raising of the Faculty's status had two institutional measures; first the Philosophical Faculty acquired its own Matrikel; and secondly, it obtained the right to issue the doctoral degree (Ph. D.). While previously all the students were working towards professional higher degrees and the Philosophical Faculty took care of their preparatory and general education, now it has its own students who pursued independent disciplines of philosophical subjects toward a higher degree.

The number of matriculated students and faculty members in the opening period of the University of Berlin is shown in Table III7. This Table shows that while medical students are the largest group and more than double the number of philosophy students, the Philosophical Faculty has the most faculty members. Since at that time in Prussia, students could be enrolled in any faculty as long as

(7) 250

teaching. At this time, the universities played a pivotal role to turn students from an inherited occupation to a new profession of science. Since the 1830 s, chemistry became truely an established university discipline, a foremost model of the nineteenth century professionalized science at university.

Sociologically speaking, chemists' background in the eighteenth century was predominantly bourgeoisie (particularly pharmacists) as in the third category of Conrad's class stratification in Table I; the rest of members were spread across all the other categories, even including farm-labor, while the nineteenth century saw considerable upward movement of chemists' family background eventually reaching university graduates of the first category.

I do not know so much about class structure among physicians, surgeons and apothecaries in Germany, as we know them for the English medical profession<sup>4)</sup>, but we may safely say that pharmacy and apothecary played definitely a decisive role as vanguard in creating the modern scientific profession, while the medical profession remained rather passive, only trying to catch up in compilance with the scientific trend of the day.

#### Major conditions for scientization of medicine

Having portrayed some statistical and prosopographical features, I now turn to the internal aspects of the scientization of medicine and enumerate its major conditions in the following, particularly as they appeared in the University of Berlin.

#### 1. Academic freedom.

The rise of German universities and Wissenschaft may be equated to the glory of the Philosophical Faculty, not that of the Medical Faculty. Much has been said about the value of academic freedom for the promotion of learning in the German universities, but the students of medicine fitted less into von Humboldt's ideal than philosophy students. The students of medicine had to gain a certain amount of practical knowledge in order to be able to take care of patients. During the semesters they did not have much time to

251 (6)

Table II. Birth and Education of Eminent Chemists

Others				ny	Germa-				France	1				England				
Father's Occupation Education	Total		Education	Occupation	Father's	To		Education	Occupation	Father's	To		Education	Occupation	Father's	Total	Year of Birth	
Physician Pharmacist Apprentice. University	tal	University	Apprentice.	Pharmacist	Physician	Total	University	Apprentice.	Pharmacist	Physician	Total	University	Apprentice.	Pharmacist	Physician		th	
		1				т	ω	1	2	1	51					1	1750 s	
П	1		1			1		1			2	2			1	4	1760 s	
L	1	1	2	1		ω	4	1			4	3	1	1		5	1770 s	
1	1	3	2		2	4	4		1		4.	1				ш	1750 s   1760 s   1770 s   1780 s	
		ω	4	2	<u> </u>	6						4				5	1790 s	
ω <sub>1</sub>	4	51	2	ယ	1	51	w	ω			51	1	1			1	1800 s	
Ľ	1	51	1	1	1	51	4				4	4	1		1	51	1810 s	
4	4	4				4					1	4	1		1	51	1820 s	
5 1	6	ω			1	ω						6				6	1830 s	
2	2	6				6	1				1	1				1	1840 s	
2 1	2	7			1	7	2				ω	2				2	1850 s	
1	1	ω			-	ω	1				1	1				1	1860 s	

confine themselves mainly to the Philosophical Faculty<sup>3)</sup>. Thus, it would be hardly possible to say that a sicentific profession emerged out of the medical profession.

Though somewhat indirectly, I could gather some evidence to support the above thesis. Recently we have completed a comprehensive collection of bibliographical data on scientists, Dictionary of Scientific Biography (Charles Scribner's Sons, 14 vols.). I happened to be involved in the editorial plan and I was provided a long list of eminent scientists, classified according to disciplines together with the years of birth and death. According to its editorial principles, each contributor was supposed to fill out the father's occupation and education of the scientist. From this data I have produced some limited statistics by a punch-card method and made some rather meaningful findings, though more exhaustive and rigorous statistics should be made in future with the cooperation of more manpower.

Historians of science sense that something had changed in the career pattern of scientists in the early nineteenth century, both in terms of family backgrounds and formal education, as science was professionalized. In the field of chemistry, this trend is particularly noticeable as indicated in Table II.

Among those chemists who were born in late eighteenth century Germany, most of them had served an apprenticeship at an apothecary and many also received university training later. Those who were born in the early decades of the nineteenth century still served an apprenticeship, but in the course of the nineteenth century chemistry became increasingly a university-centered discipline and the university was established as the exclusive training center not only for chemists but for most of the other disciplines of natural science.

Regarding the training years or active research period of a chemist, we may simply add two or three decades to the decade of birth; thus out of our little statistics, we may be able to conclude that the German scientific (or, to be more precise, chemical) community had a transitional period from the 1780 s to the 1820 s, when the style of training changed from apprenticeship to university

253 (4)

Table I. Occupation and Social Position of the Fathers of Students at Halle.

Year	Professio requiring universit educatio	g a y	Lower of and elem schoolmas	entary sters	Merchan manufact hotel-kee landed j etors offi apotheca fundhold	pers, propri- cers, ries,	Artisans peasants		Inferior servants and laborers		
	Medicine	Phil.	Medicine	Phil.	Medicine	e Phil.	Medicine	Phil.	Medicine	Phil	
1832~36	41.8	23.6	14.7	28.0	31.3	18.3	12.1	29.0		1.8	
1850~54	34.4	29.7	16.7	26.8	32.8	23.8	15.8	17.9	0.3	4.5	
1872~76	44.5	32.4	12.5	28.6	30.5	18.1	12.5	20.9	_		
1877~81	35.0	24.3	18.2	24.4	32.8	26.6	13.6	23.8	0.4	0.9	

amateur gentlemen who gathered together at scientific meetings, academies and philosophical societies in Europe were medical men. However, we doubt whether sons of well-to-do physicians would venture to enter the precarious new career of scientists. Although the survey of students' birth is generally hardly obtainable, we have some statistics, thanks to Johannes Conrad, to tell us the occupations of the fathers of the nineteenth century German university students (Table I)<sup>2)</sup>.

Here we clearly see that more medical students came from the upper class who had university level education and from the newly rising bourgeoisie, while sons of petit officials, primary school teachers, artisans and peasants and even laborer and servants were prominent in the Philosophical Faculty, which was at that time the nursing home of scientific disciplines.

Statistics shows that more than half of the sons of physicians go to the Medical Faculty. Medicine requires many years when no fees come in, and the student, besides, has but small chance of gaining anything while attending the university. It is different with the students of theology and philosophy; in the case of the latter a three years' course is sufficient in order to present themselves for examination. The student of philosophy can count upon immediately receiving an appointment (mostly of schoolteachers) with an income attended to it. It is no wonder, then, if the less-moneyed classes

occurred mainly in the nineteenth century when scientists became assimilated to old professions, particularly to the medical profession, in their group behavior, social prestige and priviledge.

Then, what is the "professionalization of medicine?" Throughout the modern period, medicine has been already one of the most typically established professions. We are, thus, not able to discuss the professionalization of medicine in the same way as we do the professionalization of science.

During the course of the nineteenth century, however, medical professions in the advanced European countries underwent two major courses of modernization, both internally and externally: the internal one is the "scientization" of a hitherto practically oriented medical discipline, and the external one is the monopoly of curing arts by those medical groups who issue exclusively valid licenses to practice. Setting up insurmountable barriers for laymen by these means, the medical profession established itself firmly in modern society. These two factors were largely interrelated with each other, but the present article is mainly concerned with the first aspect of the scientization of medicine, in which how the medical profession changed its quality would hopefully be elucidated.

#### Origin of medical and scientific students

When we speak of the "scientization of medicine", we find its most typical historical case in nineteenth century Germany, where the clinical teaching in French hospitals in the early nineteenth century gave way to laboratory research of medical science in German universities under Wilhelm von Humboldt's ideal of the unity between teaching and research, and its institutional paradigm was the celebrated newly-founded University of Berlin. Apart from the individual glorification of such early proponents as von Humboldt and Johann Christian Reil, we are interested in who, in sociological terms, were the real träger of the scientization trend in the medical camp.

We often notice that during the eighteenth century many of the

255 (2)

#### Scientization of Medicine\*

#### Shigeru NAKAYAMA\*\*

Preface

Frankly, I am a bit puzzled by the common theme of our symposium "Professionalization of Medicine".

First of all, "profession" is one of the hardest word to define. When I organized a symposium "Professionalization of Science" four years ago on the occasion of the XIVth International Congress of the History of Science held in Japan<sup>1)</sup>, I had difficulty in finding an adequate translation word for "profession" in common Japanese usage. I tentatively put it into a compound word "Senmon Shokugyo 専門職 業". This is divided into "speciality" and "vocation". Even with a century of effort and experience translating European languages into Tapanese still we could not find and thus fail to coin a single-word adequate translation term for "profession". All this implies that "profession" is quite a parochial term, only making sense in European history since late medieval times on. Sociologists of profession have tried to present a number of ways of defining this term, rather in vain to my mind, and it still undergoes rapid change of its implication even now as evident in such a new word as "professional killer". Hence, as a historian of science, I am satisfied with defining it as a purely historical term, which originated rather accidentally in medieval Europe as specifying a group of people who had a common background of university education such as in theology, law and medicine.

Having so defined it, we come across further problems. When I say "professionalization of science", I mean a historical process that

<sup>\*</sup> July 1978/ Revised December Paper presented at the Third International Symposium on the Comparative History of Medicine-East and West, Fuji Institute of Education and Training, Japan. October 1978.

<sup>\*\*</sup> College of General Education, University of Tokyo

# HDLとコレソルビン

HDL

HDL

HDI

HDL

LDL

コレソルビンは動脈硬化性疾患の 発症に関連が深い血漿リポタンパク質に対し

●防御因子としてのHDL-コレステロールを増加させ 促進因子であるLDL-コレステロールを減少させます。

●HDLの亜分画において、特に注目されている HDL2-コレステロールの増加が認められています。

●Atherogenic Index(動脈硬化指数)を改善します。

脂質代謝改善剤

### コレリルと。カプセル 細粒

〈シンフィブラート〉

LDL

「議応度」下記述症に伴う高脂血症の改善/熱原硬化症、脳熱原硬化症、冠熱原硬化症、 高血圧症、機関係 【排法・用量)でセル剤:通常1日3~6カプセルの(シンフィブラー ・もりから)。18 号間に分けて食物に対しり変する。なお、海・症状により速度に対する している。19 号を10 分けでした。2月 では、19 日本のでは、19 


CL-A5-11980年6月作成



**吉富製薬**株式

〒541 大阪市東区平野町3丁目35番地

#### NIHON ISHIGAKU ZASSHI

#### Journal of the Japan Society of Medical History

Vol. 26. No. 2

April 1980

#### CONTENTS

Articles
On some Changes in the Situation of the Doctor
among the People in ancient TimesSachiwo KUME(113)
Medicines in Ssu-min-yüeh-ling ·······Akira AKAHORI···(143)
Sanei Koseki and Internal Medicine ······Shōichi YAMAGATA···(154)
One Hundred Years of Matsuzawa Hospital,
as Described in Literary WorksYasuo OKADA(170)
On the Story of Jenner's experiment on inoculation
of his son with Swine pox matterShiro KATO(189)
A historical study on the San Sze-miao and
his Chien Ching Fang ······Chao Yǒu-Chén·····(204)
Chodo Inoue's Works in a History of Chinese medicine
in Tokushima Prefecture in the Meiji era
Giichi FUKUSHIMA…(212)
Shotetsu Kiriyama, a Physician of the Hirosaki
Feudal Clan and the Exhibition of Natural
History in Saiju-kan ······Akitomo MATSUKI···(231)
Scientization of Medicine ······ Sigeru NAKAYAMA···( 256 )
Miscellaneous(238)

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2-1-1, Bunkyo-Ku, Tokyo